美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告 8

茨城県稲敷郡美浦村

野　中　遺　跡

—第 2 次発掘調査報告書—

2000

美浦村教育委員会

美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告８

茨城県稲敷郡美浦村　野中遺跡　―第２次発掘調査報告書―　　正誤表

箇　所	誤	正
例言　19行	黒澤晴彦	黒澤春彦
例言　19行	高橋嘉郎	高橋嘉朗
例言　20行	平田満夫	平田満男
８頁　**第５図**　スケール	50m	30m
15頁　左段　５行	東西1.5cm	東西1.5m
17頁　左段　７行	Lを巻いた	L(細)を巻いた
26頁　**写真19**　右上下	9	7
38頁　18～22行及**表１**	コナラ属コラナ亜属	コナラ属コナラ亜属
44頁　左段　31行	北西―南東方向2.85m	北西―南東方向3m
44頁　左段　31～32行	北東―南西方向3m	北東―南西方向2.85m
53頁　左段　15行	遺構外に	調査区外に
64頁　右段　13行	池平遺跡SI－12, 22	池平遺跡SI－12, 16, 22
73頁　**弥生土器縄文原体集計表**	( )は同一個１点	( )は同一個体を１点
79頁　**遺構別土師器・須恵器出土点数**	5住 16 (16)　6住 356 (188)　6 (2)	5住 16 (16)　6住 356 (188)　6 (2)

美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告 8

茨城県稲敷郡美浦村

野　中　遺　跡

—第 2 次発掘調査報告書—

2000

美浦村教育委員会

第７号住居址からは土製支脚３点が炉址を囲んで出土した（帯状に見えるのは住居構築前の風倒木痕）

第６号住居址から出土した甕形土器（右から**17,18,19**）

序

美浦村には、国史跡陸平貝塚や木原城址をはじめ、数多くの貴重な遺跡が存在します。このことは、当地が太古から人々の豊かな暮らしを育んできたこと、また、地域の人々が先人の文化を大切に守ってきた歴史があることを示しています。このような先人の想いが詰まった遺産を知り、それを守り、さらに活用することによって未来に継承していくことが、悠久の歴史の中で現在の私たちがなすべき役割であると思っております。

発掘調査はそのような過去の文化を知るにはまたとない機会であり、この度の野中遺跡の調査も大きな成果をあげることができました。野中遺跡がある村役場周辺地域では、以前、庚申古墳が発掘調査され、金環やガラス小玉などで飾られた古代の人骨が発見されています。今回の調査では多数の住居の跡がみつかり、その古代人たちの生活を知る上で重要な資料が得られました。特に、炉を取り囲むように３つ並んで出土した土製の“五徳”は、古代人たちの日々の暮らしぶりを彷彿とさせるものといえます。本書が刊行されたことにより、その成果がさらに広く活用され、新たな美浦村の文化を創造する財産になることを願う次第です。

最後になりましたが、埋蔵文化財の重要性を理解され調査に多大なご協力を賜った株式会社スーパーカドヤと有限会社ヨシミネをはじめ、関係者の皆様方と調査に参加された方々のご支援・ご尽力に対し、心より厚く御礼を申し上げます。

平成12年３月

美浦村教育委員会
教育長　塚本　和夫

例　　言

1．本書は、茨城県稲敷郡美浦村請領字野中 1552-1 外地内に所在する野中遺跡にかかる、株式会社スーパーカドヤ店舗開設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．発掘調査の主体者は美浦村教育委員会で、調査組織は以下の通りである。

教育長　塚本和夫

生涯学習課長　諸岡正明（平成11年３月退任）、村崎友春（平成11年４月就任）

生涯学習課文化財係長　増尾尚子（平成11年３月退任）、岡田守（平成11年４月就任）

生涯学習課文化財係学芸員　中村哲也（調査担当者）、川村勝、馬場信子

3．調査参加者は以下の通りである。

現地調査　中島重一、椎塚隆二、殿岡達夫、小泉正治、市川一男、海道民子、松葉英治

整理作業　波多野洋子、海道民子、小口伸子

4．本書作成にあたって、石材については茨城県自然博物館の遠藤好・小池渉両氏に同定をお願いし、出土炭化材の樹種同定については株式会社パリノ・サーヴェイに委託した。

5．本書の編集・執筆は、株式会社パリノ・サーヴェイの分析報告を除いて、中村が行った。

6．調査に関わる図面・写真・遺物等の資料は、美浦村教育委員会が一括して保管している。

7．発掘調査から本書の刊行に至るまでの下記の諸氏･諸機関にご指導、ご協力を賜った。記して感謝する次第である。（敬称略、五十音順）

阿部有花、阿部芳郎、飯塚廣、石川功、石川日出志、石橋充、海老澤稔、小口英一郎、樫村宣行、木村正、木村愛子、黒澤晴彦、黒澤浩、湖口淳一、小玉秀成、塩谷修、白石真理、鈴木正博、関口満、高橋嘉郎、千葉隆司、鶴見貞雄、比気君男、平田満夫、深谷昇、増尾恭子、宮本礼子、村田六郎太、茂木文緒

茨城県教育庁文化課、茨城県南教育事務所、陸平調査会、株式会社スーパーカドヤ、三友測量株式会社、明治大学考古学博物館、有限会社ヨシミネ

凡　　例

本書における図中・表中の表記は、特に指示の無い限り下記の事項を示す。

1．遺構断面図で地山を示す斜線の無いものは、断ち割り調査による観察を行ったものである。

2．遺構実測図の中で、粗い網点は焼け込み焼土の、長い破線は床面硬化部の、短い破線は貼床の掘り方及び推定復元線を、一点破線は撹乱の範囲を示す。また、Ｐはピットの略である。

3．土器実測面で、表面の網点は赤色塗彩が施された部位を、断面の網点は須恵器であることを示す。

4．土器実測図の側縁に付されている「－」は、弥生土器では縄文施文部の境を示し、土師器の場合、口縁部のものはそれより上位に、脚部のものはそれより下位にヨコナデ整形痕が認められることを表す。

5．遺構の略称として、住居址は「住」、溝状遺物は「溝」、土坑は「土」を用いた。（例：第１号住居址→１住）

6．巻末の観察表に示した土製品・石器・滑石製遺物の「長さ（高さ）」・「幅」は、図示した正面図の位置で、展開の基準線に平行し、しかも遺物の輪郭に外接する長方形の辺長にあたる距離を計測したものである。土錘や剥片等観察表の註で指示したもの以外は、距離が長い方を「長さ」、短い方を「幅」として計測している。但し、未図化の砕片については最も距離が長くなる方向を「長さ」、それに直行する方向の最大値を「幅」とした。一方「厚さ」は「長さ（高さ）」・「幅」の計測面に対し垂直する方向の計測値である。

7．本書掲載の実測図の縮尺は、住居址平面図 1/60、土坑平面図 1/30、断面図 1/60 又は 1/30、土器復元実測図 1/4、土器拓影図・土器破片図 1/3、土製支脚 1/4、他の土製品 1/2、鉄器 1/2、石核・剥片・滑石製遺物 2/3、他の石器・石製品 1/3である。

目　次

口絵

序

例言・凡例

目次

Ⅰ　遺跡の立地と歴史的環境 …… 1

野中遺跡の位置と地形／野中遺跡の歴史的環境

Ⅱ　調査の経過と概要 …… 3

調査に至る経緯／調査の方法／調査の経過／調査成果の概要

Ⅲ　検出された遺構と遺物

1．縄文時代の遺物 …… 7

縄文時代の概要／出土した縄文土器

2．弥生時代の遺構と遺物 …… 7

弥生時代の遺構と遺物の概要／第１号住居址／第５号住居址／第３号土坑
／攪乱内土器集中地点／後世遺構内及び遺構外出土の弥生土器

3．古墳時代以降の遺構と遺物 …… 22

古墳時代以降の遺構と遺物の概要／第２号住居址／第３号住居址／第４号住居址
／第６号住居址／第７号住居址／第１号溝状遺構／第２，４号溝状遺構
／第３号溝状遺構／第１号土坑／第２号土坑／③区ピット群
／第１号住居址出土の古墳時代遺物／遺構外出土の古墳時代以降及び時期不明遺物

Ⅳ　まとめと若干の考察

1．観察所見に基づく遺構・遺物の基礎的検討 …… 58

第３号土坑に関わる現象・行為の復元／高杯形土器の住居址間接合について
／土錘の摩滅について／土製支脚について／玉随及びペグマタイト製遺物について
／滑石製遺物について

2．古墳時代甕形土器の型式学的検討 …… 64

引用・参考文献 …… 68

付表 …… 69

報告書抄録 …… 82

Ⅰ　遺跡の立地と歴史的環境

野中遺跡の位置と地形

野中遺跡は茨城県南部の霞ヶ浦南岸、稲敷郡美浦村のほぼ中央に位置する。美浦村の地勢は北と東が霞ヶ浦に面し、湖岸を中心に広がる沖積平野と樹枝状の谷（谷津）が発達した標高20～30ｍの稲敷台地からなる。村の東部には余郷入と呼ばれる干拓地が存在するが、戦前までは東から西へ向かって細長く入り込んだ霞ヶ浦の入り江であった。その余郷入を谷口部に、更に西へ続く谷津が約４kmにわたって村を東西に横断しており、野中遺跡は谷津の中流から北側に枝分かれした小さな支谷に面した、標高24～28ｍの台地上平坦部に立地している。（第１図）

遺跡の地形を細かくみると、遺跡が展開する台地平坦部の東側は南東から入り込んだ支谷の谷頭に面し、北、西、南側は西から回り込んだ支谷が更に枝分かれした３つの谷津によって区切られている。遺跡の広がりが予想される台地平坦部は東西、南北とも300ｍ程の規模で、周囲の谷津との最大比高差は約13ｍである。（第２図）

野中遺跡の歴史的環境

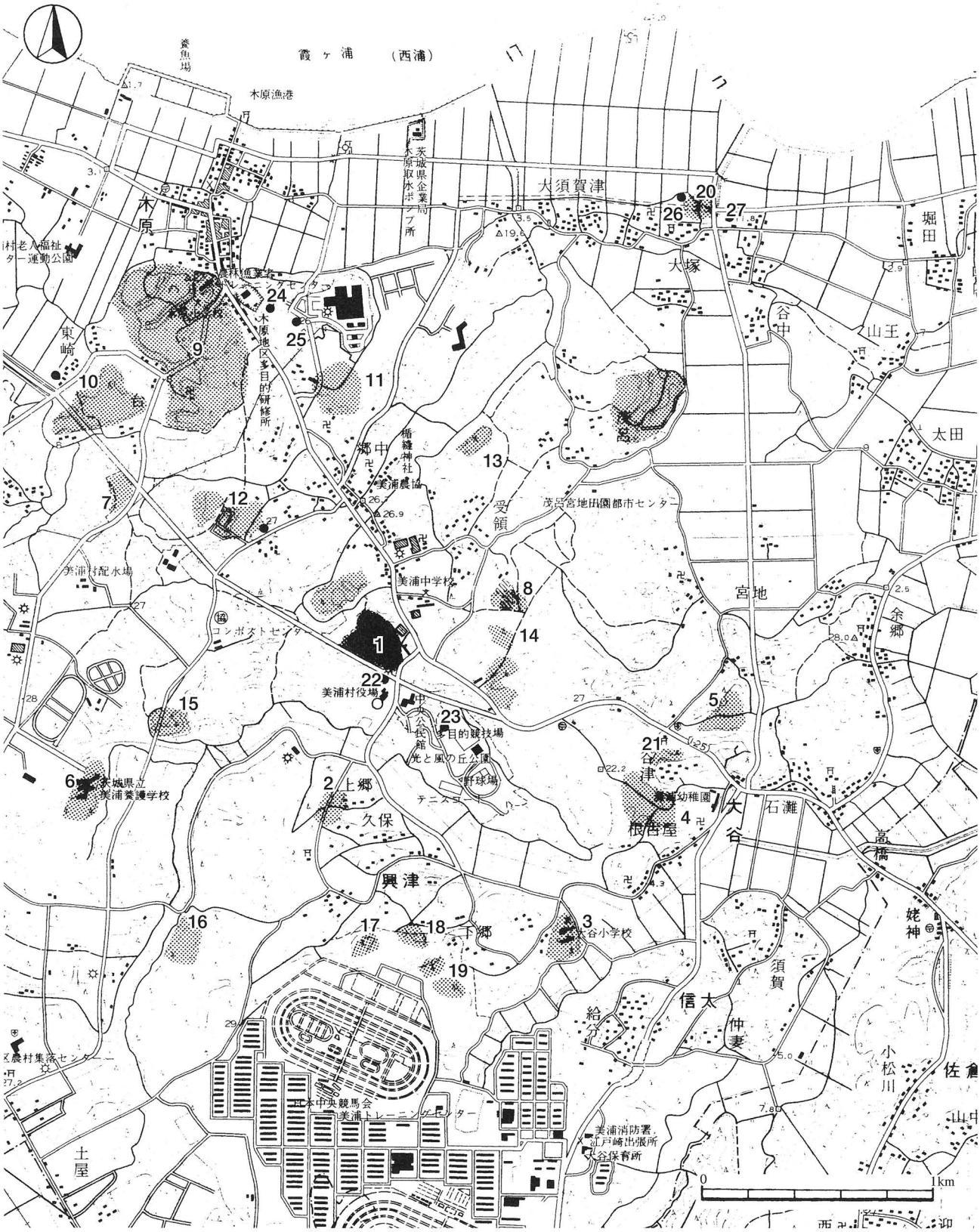
余郷入から続く谷津の両岸から、霞ヶ浦湖岸の沖積地に面した台地にかけての地域には、数多くの遺跡が存在し、村内でも遺跡の密集地帯になっている（第１図）。縄文時代については、余郷入から続く主谷両岸に前期の興津貝塚［西村1984］、前・中期の虚空蔵貝塚［大川他1977］、早・中期の大谷貝塚、中・後期の平木貝塚といった縄文時代の早期～後期にわたる貝塚を有する遺跡が散在する。

野中遺跡の主体となる弥生時代以降については、主谷の谷奥部に弥生時代中期末葉の住居址が検出された常陸笹山遺跡［大竹他1986］が位置し、上流部には平安時代の集落址である摩迦陀遺跡が存在する。一方、野中遺跡と同様に、主谷から派生した支谷に面した集落遺跡としては、主谷北側に古墳時代中～後期の原遺跡等があり、主谷南側には古墳時代中期の興津白井遺跡や、平安時代の原畑遺跡、稲荷山遺跡［奥富他1996］が点在する。また、水系は異なるが、野中遺跡に近接した東側の台地上には、弥生時代後期、古墳時代中～後期の集落址である八ヶ山遺跡、古墳時代中期の住居址が検出された請領妙山遺跡などが存在する。

台地上の遺跡ばかりではなく、野中遺跡とはやや離れるが、霞ヶ浦に面した砂丘上の微高地には、古墳時代及び平安時代の住居址が検出された岸内遺跡が立地する。また、古墳については、霞ヶ浦を望む台地上に築造された100ｍを越える中期の前方後円墳である愛宕山古墳を主墳とする木原白旗古墳群や、岸内遺跡と同じ微高地につくられた中期の大型円墳群を主体とする大塚古墳群など多くの古墳群が存在する。野中遺跡自体も八枚原古墳群に属しており、遺跡から南東の舌状台地上にかけて小円墳が散在している。その内の庚申古墳は野中遺跡とは小さな谷頭を挟んで南側に隣接する後期古墳で、箱形石棺から人骨、金環、青銅環、ガラス小玉が検出されている［大竹他1989］。

なお、弥生時代、古墳時代における霞ヶ浦の水域環境については、自然科学分析によるデータの蓄積は充分ではない。ただ『常陸國風土記』の浮島の塩焼等の記述をも参考にするならば、まだ海水域であったと推測される。

これら霞ヶ浦と谷津という生産基盤になり得る自然環境をひかえて密集する古代の遺跡群は、相互に関連を持ちながら各時代・各時期ごとに形成されたものと考えられるが、特に野中遺跡における古墳時代集落址は、その規模からいって中核的な性格を有していたものと思われる。



第１図　野中遺跡周辺遺跡分布図

1.野中遺跡　2.興津貝塚　3.虚空蔵貝塚　4.大谷貝塚　5.平木貝塚　6.常陸笹山遺跡　7.神田遺跡　8.八ヶ山遺跡　9.木原城址　10.下り内遺跡　11.御茶園遺跡　12.原遺跡　13.茂呂天神遺跡　14.請領妙山遺跡　15.摩迦陀遺跡　16.興津白井遺跡　17.高野台遺跡　18.原畑遺跡　19.稲荷山遺跡　20.岸内遺跡　21.大谷谷津台遺跡　22.庚申古墳　23.八枚原１号墳　24.愛宕山古墳　25.木原白旗２号墳　26.同居塚古墳　27.大塚弁天塚古墳

Ⅱ　調査の経過と概要

調査に至る経緯

第１次調査

野中遺跡は平成４年に、民間の開発行為に伴い発見された遺跡で、遺跡の北西部約10,000㎡については、記録保存のための発掘調査が、平成５年10月～平成６年３月の期間、美浦村教育委員会によって実施されている。

この第１次調査では、弥生時代後期の住居址５軒、古墳時代中～後期の住居址19軒、掘立柱建物址９軒、円墳１基、時期不明の溝状遺構３条、土坑６基が検出されている。遺物としては、縄文時代の前期浮島式及び中期加曾利Ｅ式土器、石鏃、弥生時代後期の土器、台石、石英砕片、古墳時代の土師器及び須恵器、磨石、砥石、紡錘車、球状土錘、鉄器、ガラス小玉、ミニチュア土器、双孔円盤・剣形模造品・臼玉・勾玉・管玉を含む滑石製遺物が出土している。

なお、第１次調査については現在整理中であり、上記した内容は現地調査時の所見を基にしたものである。

第２次調査に至る経緯

平成９年６月３日、株式会社スーパーカドヤより美浦村大字請領1552-1外地内における開発行為（店舗）に伴う埋蔵文化財の所在の有無及び取扱について、美浦村教育委員会に照会があった。照会地は野中遺跡第１次調査区の隣接地にあたり、埋蔵文化財が所在する可能性がきわめて高かったため、６月10日にテストピットによる試掘確認調査を実施した。結果、11ヶ所設定したテストピットのうち、４ヶ所から遺構や遺物が検出され、野中遺跡が照会地まで広がっていることが確認された。６月12日付で、村教育委員会は埋蔵文化財が有る旨を文書で回答し、以後、県文化課をはじめとする関係機関に連絡を取るとともに、開発企業側と保存のための協議に入った。

開発に伴う許認可に見通しの着いた段階で、開発企業から文化庁長官に、文化財保護法第57条の２第１項の規定に基づく土木工事に伴う発掘の届出が行われた。そして平成10年３月18日に、土地の開発主体である有限会社ヨシミネと店舗を開設する株式会社スーパーカドヤ、それに村教育委員会の三者によって、『美浦村請領字野中地区埋蔵文化財に関する協定書』が締結され、村教育委員会による記録保存のための第２次調査が実施される運びとなった。

調査の方法

調査区の設定（第２，３図）

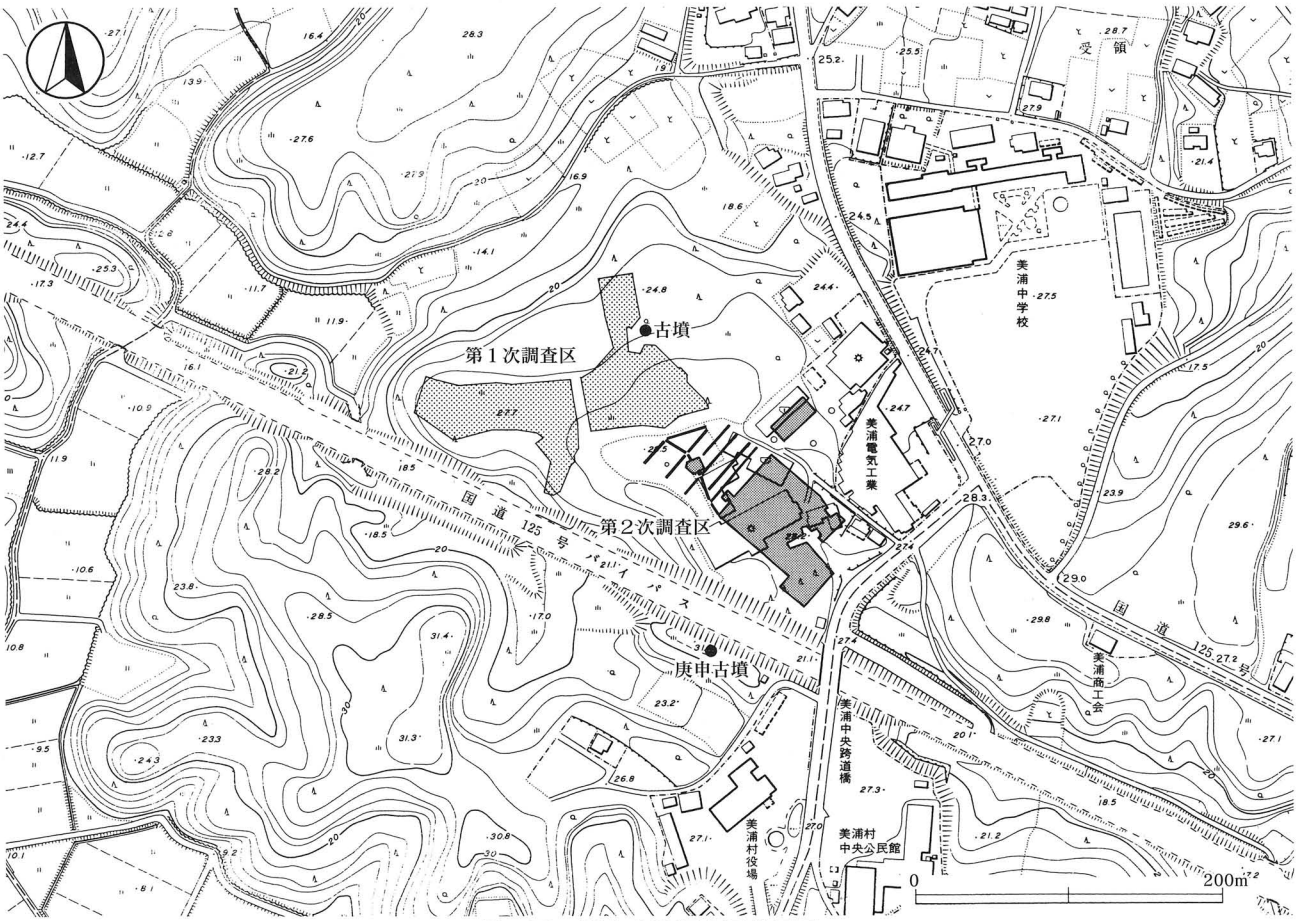
調査区の設定にあたっては、店舗等建物建設部分については全面発掘を行い、駐車場部分については地下の遺構に影響の無いように工事を実施することで現状保存する方法を採った。但し、全面調査区でも利用する立木や作業道路として必要な部分については未調査区として残し、駐車場部分の雨水排水管埋設部についてはトレンチ調査を行っている。

全面発掘区は主要店舗部の①，②区とした調査区と付帯的施設を建設する③区に分かれる。②区は調査開始時点で廃屋が残っていたため、調査の進行上区分けした調査区である。また、現地調査を一旦終了した後、多少の設計変更が行われたため、トレンチの増設による立会調査を追加調査として行った。

トレンチ調査区は対象地の北西部、第１調査区と隣接する位置にあたり、最終的に幅90cmのトレンチが計13本設定された。全面調査区の①，②区は面積約3,600㎡で、トレンチ調査区の南東側に位置し、③区は面積約370㎡で、トレンチ調査区の北東側に位置する。調査区総面積は約4,000㎡である。

発掘の方法

耕作土、客土、攪乱土からなる表土層は、重機（バックホーとキャリアダンプ）を使って除去した。各遺構は基本的にまずサブトレンチによって覆土や掘り方の状況を捉え、土層観察用の畦等を残しながら、分層された土層ごとに発掘を進める方法を採り、掘り方面だけではな



第２図　野中遺跡調査区位置図

く、覆土中の人為痕跡の検出に努めた。遺物については層位ごと、便宜的に遺構内を区画した平面区ごとの取り上げを基本としたが、遺棄・廃棄がされたことが明確なものについては出土位置と高さ、それに出土状態等を記録している。なお、平面実測は平板測量で行い、実測時の縮尺は住居址・土坑1/20、溝状遺構1/20～1/50、ピット群1/40、断面1/20である。

写真１　表土剥ぎ作業風景

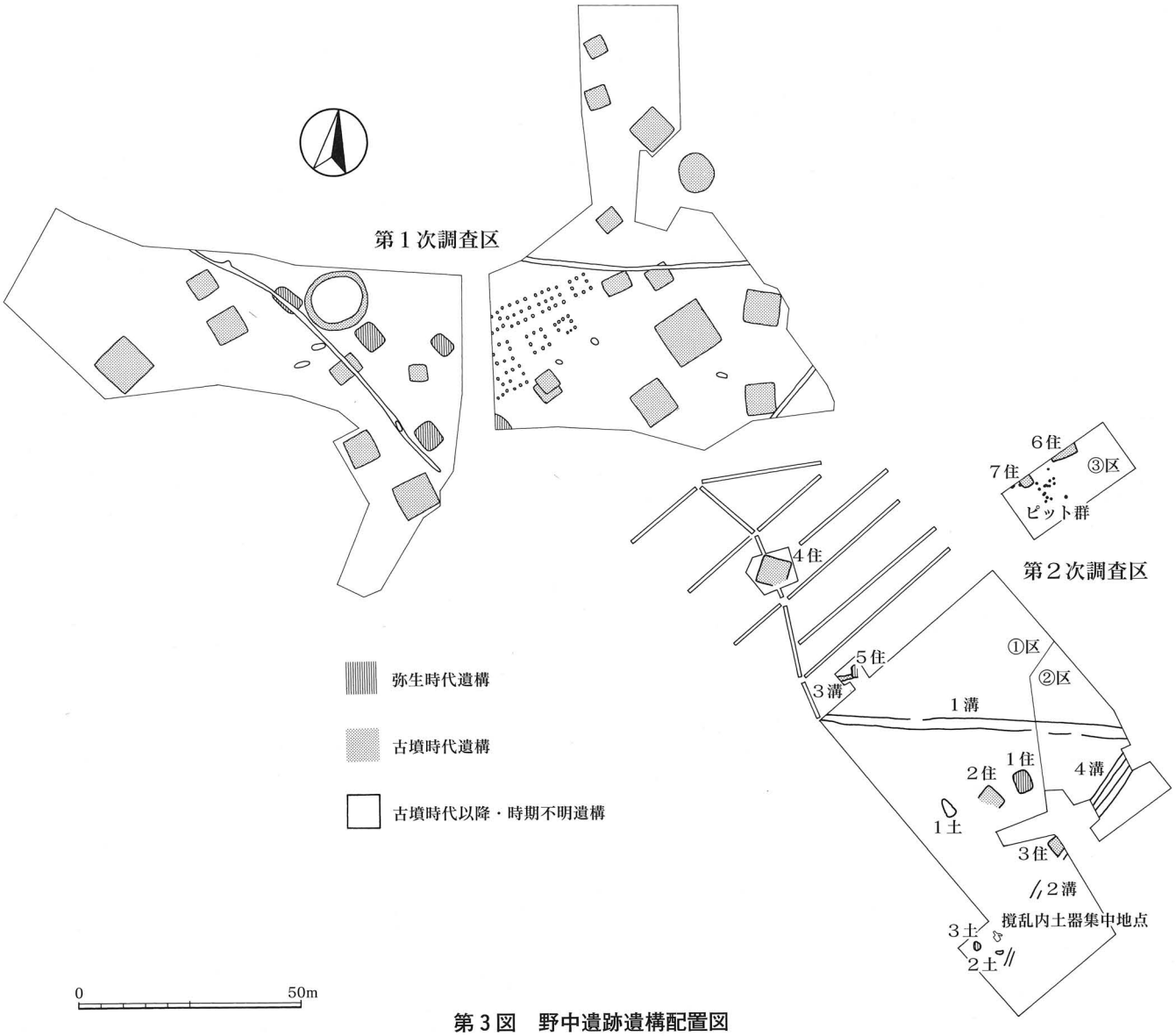
調査の経過

現地調査

第２次調査の現地発掘調査は平成10年４月３日から同年６月８日まで約２ヶ月間にわたって実施された。調査地の草刈りと基準杭の設定は、事前に開発企業によって行われている。以下、調査日誌抄を掲載する。

平成10年

- ４月２日(木) 晴れ　現地にプレハブ、トイレ等搬入。
- ４月３日(金) 晴れ　表土剥ぎ開始。文化財保護法第98条の２第１項の規定に基づき「埋蔵文化財発掘調査の報告」送付。
- ４月８日(水) 曇り　発掘器材搬入。
- ４月10日(金) 晴れ　本日より作業員入る。遺構確認開始(①区)。
- ４月16日(木) 曇り　トレンチ部表土剥ぎ開始(①区表土剥ぎ終了)。遺構確認終了(①区)。



第３図　野中遺跡遺構配置図

１溝調査開始。

・４月17日(金) 曇り後雨　トレンチ部表土剥ぎ終了。仮設水道工事。

・４月22日(水) 晴れ　１土調査開始。

・４月23日(木) 晴れ　１住、２住調査開始。調査区内に測量杭設定。

・４月27日(月) 曇り後雨　調査区内(②区)の家屋解体(～28日)。

・５月６日(水) 晴れ時々曇り　３住、２溝調査開始。

・５月７日(木) 晴れ　２，３土調査開始。

・５月14日(木) 曇り後晴れ　４住調査開始。

・５月15日(金) 晴れ　重機による表土剥ぎ開始(②，③区)。

・５月19日(火) 雨のち晴れ　表土剥ぎ終了。

・５月22日(金) 晴れ　５住、３溝調査開始。中央公民館郷土史講座生見学。

写真２　①区遺構確認作業風景

・5月25日(月) 曇り　遺構確認(③区)。
・5月27日(水) 晴れ　遺構確認(②区)。
・6月2日(火) 曇り　4溝調査。
・6月4日(木) 曇り後晴れ　6住、7住調査開始。
・6月8日(月) 晴れ　③区ピット群調査。本日で現地発掘調査終了。器材撤収。
・6月12日(金)「発掘終了届」送付。
・6月24日(水) 現地調査終了立会。
・7月14日(火) 晴れ　遺構埋め戻し(～15日)。
平成11年
・1月16日(土) トレンチ増設による立会追加調査。

整理作業

整理作業は平成11年10月25日から開始した。同日から同年12月16日までは、臨時作業員を雇用し、遺物のクリーニング、注記、分類、接合、拓本取り作業を実施した。12月からは遺物の実測作業、写真撮影、及び報告書作成に向けてのトレース作業、原稿執筆を併行して開始し、平成12年2月まで継続した。

調査成果の概要

基本土層

表土層（Ⅰ層）は耕作土、客土、攪乱土からなり、客土、攪乱土が主体であった①，②区では35～60cm、耕作土が主体であった③区では20～35cm程の厚さを測る。調査区の大部分では、表土層直下が地山のローム層（Ⅲ層）になっていたが、①区の北部から②区の北西部にかけては、表土層とローム層の間に褐色土層（Ⅱ層）が最も厚い所で15cm程存在していた。このⅡ層とした褐色土層は、やや赤味がかった褐色土を主体に暗褐色土とローム粒子が混じるもので、第1調査区で広範囲に認められた褐色土層に対応する土層と思われる。

Ⅱ層が存在した部分から検出された第1号溝状遺構は、Ⅱ層上面（＝表土層下面）から掘り込みが認められたが、後述する他の遺構は、Ⅱ層が存在しない所から検出され、ローム層上面（＝表土層下面）が確認面であった。調査区内のローム層上面はほぼ平坦で、若干北東側に向かって傾斜していた。南西側にあたる①区西端では標高28.25m、北東側にあたる③区では標高27.6m前後を測る。また、①区最南東側の北東角は谷頭部にあたり、ローム層上面の標高が27mと急に低くなっていた。

検出された遺構と遺物（第3図）

今回調査を実施した第2次調査区から検出された遺構は、弥生時代の住居址2軒（第1，5号）と土坑1基（第3号）、古墳時代の住居址5軒（第2，3，4，6，7号）と溝状遺構1条（第3号）、古墳時代以降の溝状遺構3条（第1，2，4号）と土坑1基（第2号）、時期不明の土坑1基（第1号）とピット群（③区）で、配置は第3図のとおりである。第1調査区と比べると遺構の密度が粗で、遺跡の周縁部にあたるものと思われる。

但し、調査区内には地山ローム層まで及ぶ攪乱が多数認められ、失われた遺構もあったものと考えられる。特に、瓦店が以前存在した①，②区とトレンチ調査部では瓦片等を廃棄した坑が多くみられ、中でも第4号住居址の北西側と北東側のトレンチ群、及び①区の第1号土坑の南西側は、ほとんど全域が攪乱に覆われていた。

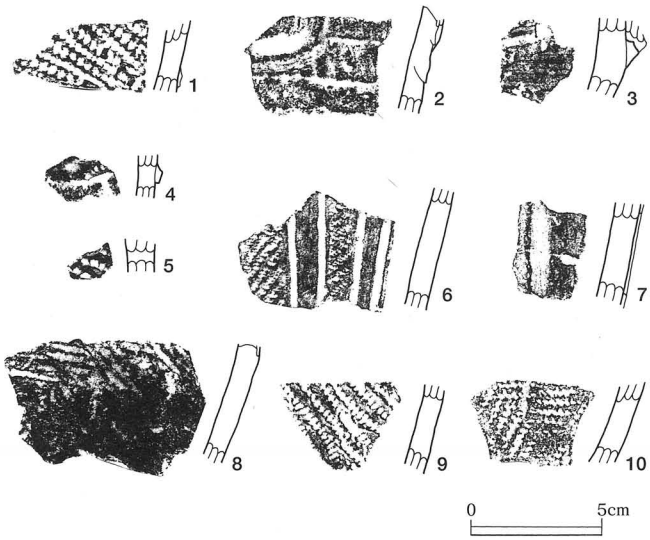
遺物については、遺構内を中心に、縄文土器片10点、弥生土器片638点、土師器片2,834点、須恵器片16点、土錘11点、土器片利用研磨具1点、土製支脚3点、土製紡錘車1点、不明土製品1点、鉄鏃1点、刀子1点、敲石3点、砥石2点、板状石製品7点、玉随製の石核1点、同剥片8点、同砕片4点、ペグマタイト製の石核？1点、同剥片2点、同砕片13点、チャート製の剥片1点、同砕片3点、安山岩製の剥片1点、双孔円盤3点を含む滑石製遺物29点が出土している。

Ⅲ　検出された遺構と遺物

1.　縄文時代の遺物

縄文時代の概要

縄文時代については、明確な遺構は検出されておらず、第４図に示した計10点の縄文土器片が、遺構外や後世の遺構内を中心に出土したのみである。但し、第４図**3**の縄文土器片は、他に全く遺物が検出されなかった第１号土坑から出土しており、第１号土坑が縄文時代まで遡りうる可能性はある。しかし、時期が限定できないため第１号土坑については時期不明の遺構として扱い、後節Ⅲ－３で記述する。また、形態的に縄文時代に該当する可能性がある石器についても、遺構内出土のものはその遺構の所で扱い、遺構外出土のものは時期不明の遺物としてⅢ－３で後述する。



第４図　野中遺跡第２次調査出土縄文土器

出土した縄文土器（第４図）

1は胎土に繊維を含む土器片で、単節ＲＬの縄文が施されている。**2**，**3**は隆帯がみられる破片で、**2**の外面には輪積み痕が残され、**3**の下方には単節ＬＲと思われる縄文が認められる。**4**，**5**は連続する刺突文が施されたもので、**4**の刺突列は隆帯に沿って施されている。**6**は複節ＲＬＲの縄文を縦方向に帯状に施文した後、縦位の沈線で区切り、沈線間の無文部を磨いている。**7**には縦位の微隆帯を境に単節ＬＲを施文した縄文部と無文部がみられる。**8**～**10**は縄文のみが施された破片で、縄文原体は**8**が無節Ｌ、**9**が単節ＲＬ、**10**が複節ＲＬＲである。

出土位置は**1**，**2**，**5**，**6**が①区遺構外、**8**が第３号住居址、**10**が第４号住居址、**4**，**9**が第１号溝状遺構、**7**が第２号溝状遺構、**3**が第１号土坑である。なお、**1**は前期前半、**2**～**7**は中期に相当する土器と思われる。

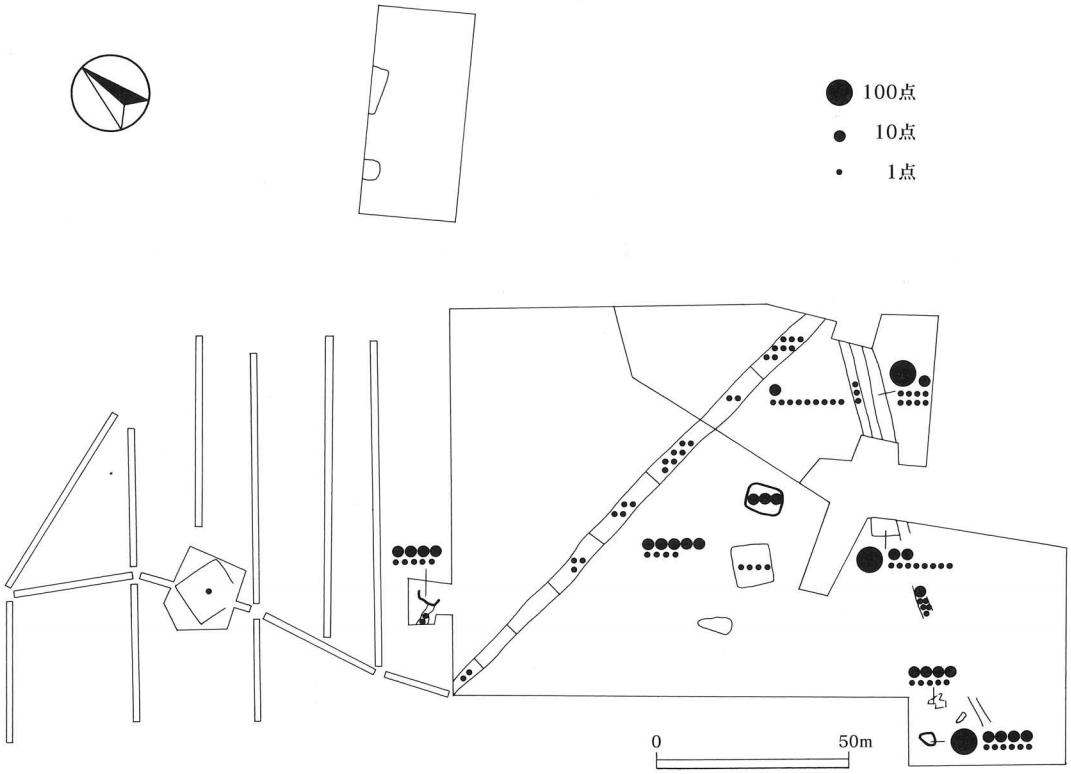
2.　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構と遺物の概要

弥生時代の遺構としては、第１号、第５号の２軒の竪穴住居址と第３号土坑が該当する。遺物は土器が主体で、その他上記の遺構内から、土製紡錘車、敲石、ペグマタイト製の石核？、不明土製品が出土している。

弥生土器

出土状況　弥生土器は計638点検出されている。出土状況をみてみると（第５図）、当該期の遺構内から多く出土している他、①，②区東部からの出土が多い。特に、古墳時代以降の遺構である第３号住居址と第２号溝状遺構Ⅳ区からまとまった出土が認められ、その付近に弥生



第５図　野中遺跡第２次調査区弥生土器出土状況図

時代の遺構や活動地点が存在していた可能性も考えられる。また、①区南部の第３号土坑に隣接する攪乱内からは同一個体の破片群を主体に土器片が集中して検出されており、「攪乱内土器集中地点」と呼称する。

器形と文様　出土した土器には、広口の壷形土器や甕形土器、それに鉢もしくは高杯形土器などが認められる。文様については、頸部文様に多条櫛描文が多く認められ、格子目文など箆状工具で描かれた文様もみられる。

縄文原体　施文されている縄文の原体は、付表に示したように異なる原体の組み合わせも含めて19種認められた。１段の縄を４本使った縄文原体が多いが、分類にあたっては、規則的に１条ごとに深浅が出ているものを附加条１種附加２条、そうでないものを直前段４条とした。さらに１段４本の原体には、３段の直前段反撚も存在するが、撚り戻しが強いもので、附加条や直前段４条としたもののうち、施文単位が捉えられない小片については、３段の直前段反撚が含まれている可能性がある。

また、今回「撚糸文」とした軸に条を巻き絡げた原体を回転押圧したものも多く認められる（註）。いずれも軸の原体が不明であるが、１段の条が回転押圧されているのもののうち、便宜的に条の太さが幅1mm以下のものを本稿では（細）として区分した。節の幅からみて、（細）でない撚糸文としたものの中には、軸縄が押圧されなかった附加条縄文が含まれている可能性が高い。また、撚糸文（細）としたものは圧痕が深く、節が細長いものが多い傾向がある。

胎土　肉眼観察によって胎土は大きく２種類に分けられる。ひとつは径1mm以下の細かい白色及び透明の砂粒が含まれているもので、もう一つは径１～２mmの粗い白色及び透明の砂粒が目立つ一群である。両者には灰色の砂粒が含まれる場合があり、後者には雲母粒子が混ざったものも存在する。割合としてはおおよそ前者が２に対し後者が１である。

なお、図示した弥生土器の選択にあたっては、口縁部破片、底部破片、縄文以外の文様を有する破片は、第３号土坑出土の櫛描文の小片２点と、平行沈線？が施された小片１点、それに後世の第３号住居址出土の木葉痕が

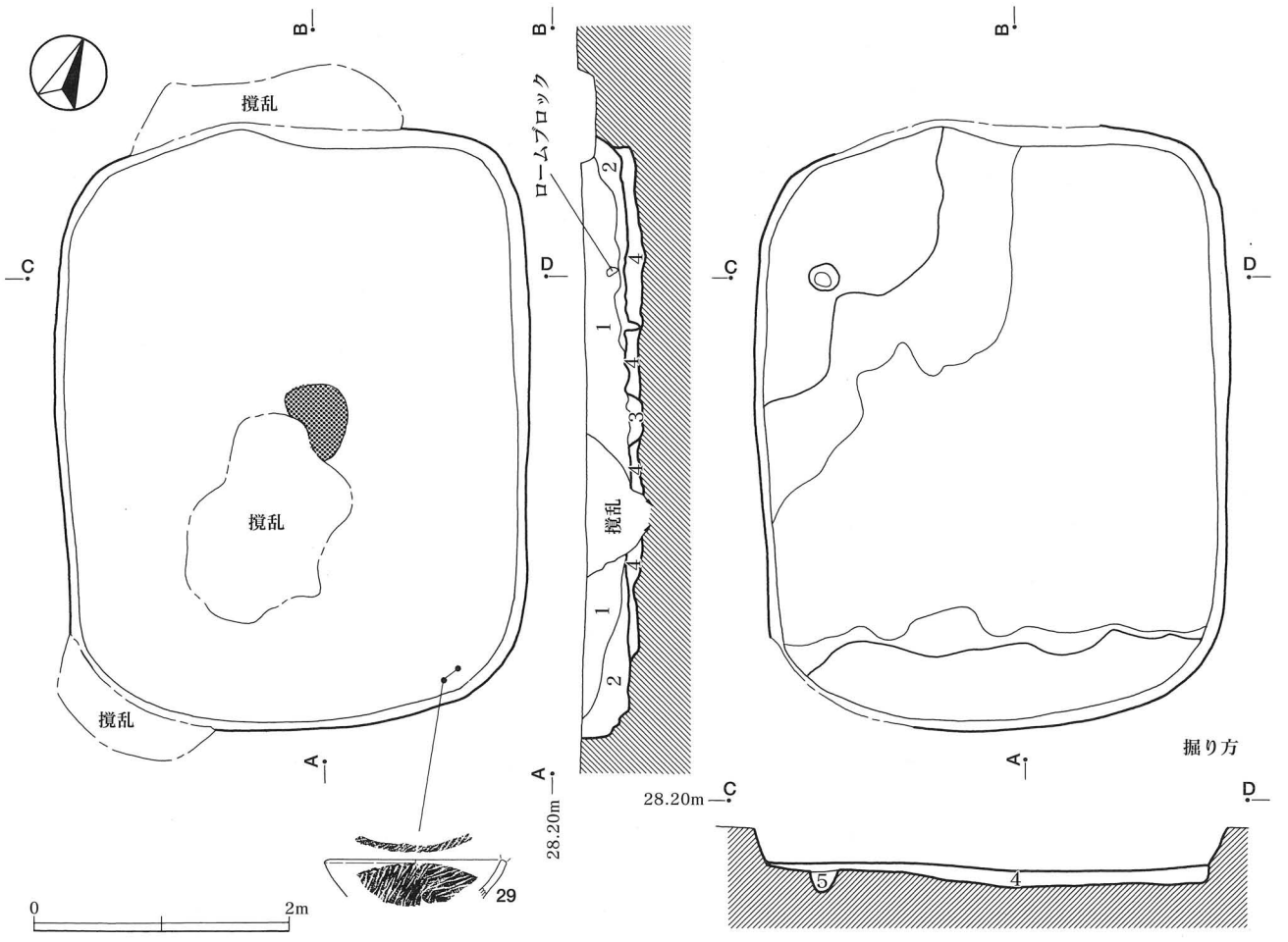
みられる底部小片１点を除いて、全て掲載した。一方、縄文のみが施された土器破片は、原体の種類ごとに選別して掲載し、遺構ごとの原体別出土数は付表に示してある。また、第１，５号住居址については全点掲載した。縄文原体の量的傾向や図示した遺物個々の属性については、巻末の付表を参照されたい。

（註）この原体としては単軸絡条体第１類や附加条縄文が想定されるが、軸が不明で明瞭な区別ができないため、撚糸文とした。なお、縄文原体の観察は山内清男氏の文献［山内1979］に拠ったが、縄文原体の表記は省略化した（例R $\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$→RL）。

第１号住居址

位置　①区中央の東寄りに位置する。攪乱によって南北両壁の上側一部と中央南側の床の一部が損なわれている。

規模と形態　平面形は長軸4.9m、短軸3.8mの隅丸長方形で、壁の高さは南側で37cmを測る。床面のほとんどは貼床によって構成されており、中央には長径62cmの炉址が存在する。地山ローム層を掘り込んだ貼床の掘り方は、北西部隅と南壁側を高く残した形態で、深いと



第１号住居址土層説明

１層：黒褐色土層　締まり有り。粘性無し。黒褐色土を主体に褐色土が若干混じる。ローム・焼土・炭化物粒子を含む。
２層：褐色土層　締まり・粘性やや有り。褐色土を主体にロームが混じる。焼土・炭化物粒子を含む。
３層：褐色土層　締まり・粘性やや有り。褐色土と黒褐色土が混じる。ハードロームブロック（最大径20mm）、ローム粒子を含み、焼土粒子もやや目立つ。２層土より黒味強い。
４層：暗黄褐色土層　締まり・粘性やや有。ロームと褐色土が斑状（径10～50mm）に混じる。ハードロームブロック（最大径10～150mm）が多量に混ざり、中央付近では黒褐色土も斑状（径10～20mm）に混じる。焼土・炭化物粒子は含まない。貼床土。
５層：褐色土層　締まり・粘性やや有。暗褐色土とロームが斑状（径10～20mm）に混じる。ローム粒子を含み、焼土・炭化物粒子を若干含む。貼床下ピット覆土。

第６図　第１号住居址実測図

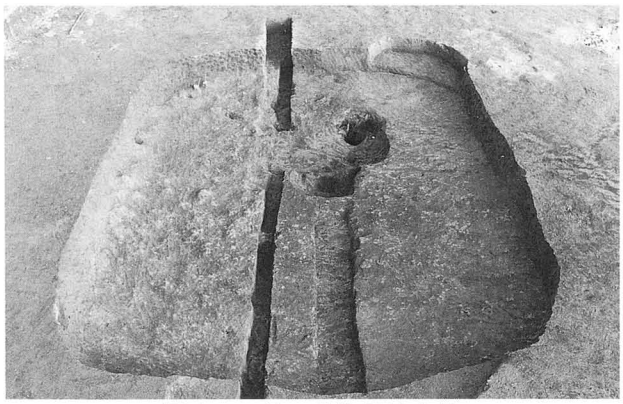


写真３　第１号住居址全景

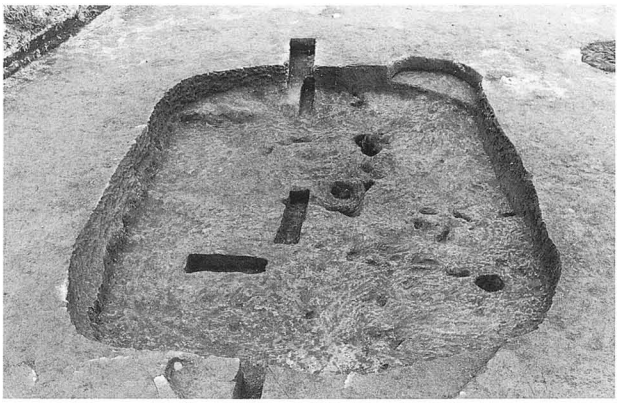


写真４　第１号住居址掘り方

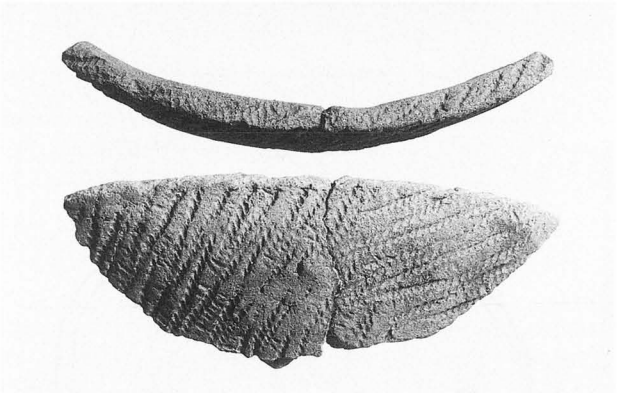


写真５　第１号住居址出土土器 29

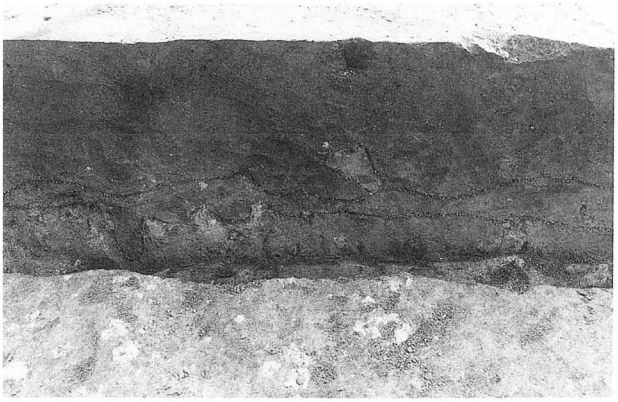


写真６　第１号住居址貼床断面

ころでは床面から10cm程掘り下げられている。南壁側の高く掘り残された部分はそのまま床面として利用されているが、その他の部分にはロームと褐色土が斑状に混じったものにハードロームブロックを含んだ土（４層）が充填され、床面を形成している。また、炉址の部分には貼床が存在せず、焼土粒子が目立つ褐色土（３層）が堆積した皿状の窪みになっており、その窪みの周りには貼床上面が焼け込んだ焼土が部分的に認められる。柱穴等の床面に付随するピットは検出されなかったが、北西隅の貼床下からは径23cm、深さ19cmのピットが検出されている。

覆土と遺物の出土状態　床面上の壁際には２層とした褐色土層が認められ、その２層と床面中央部を覆って、１層とした黒褐色土層が堆積する。

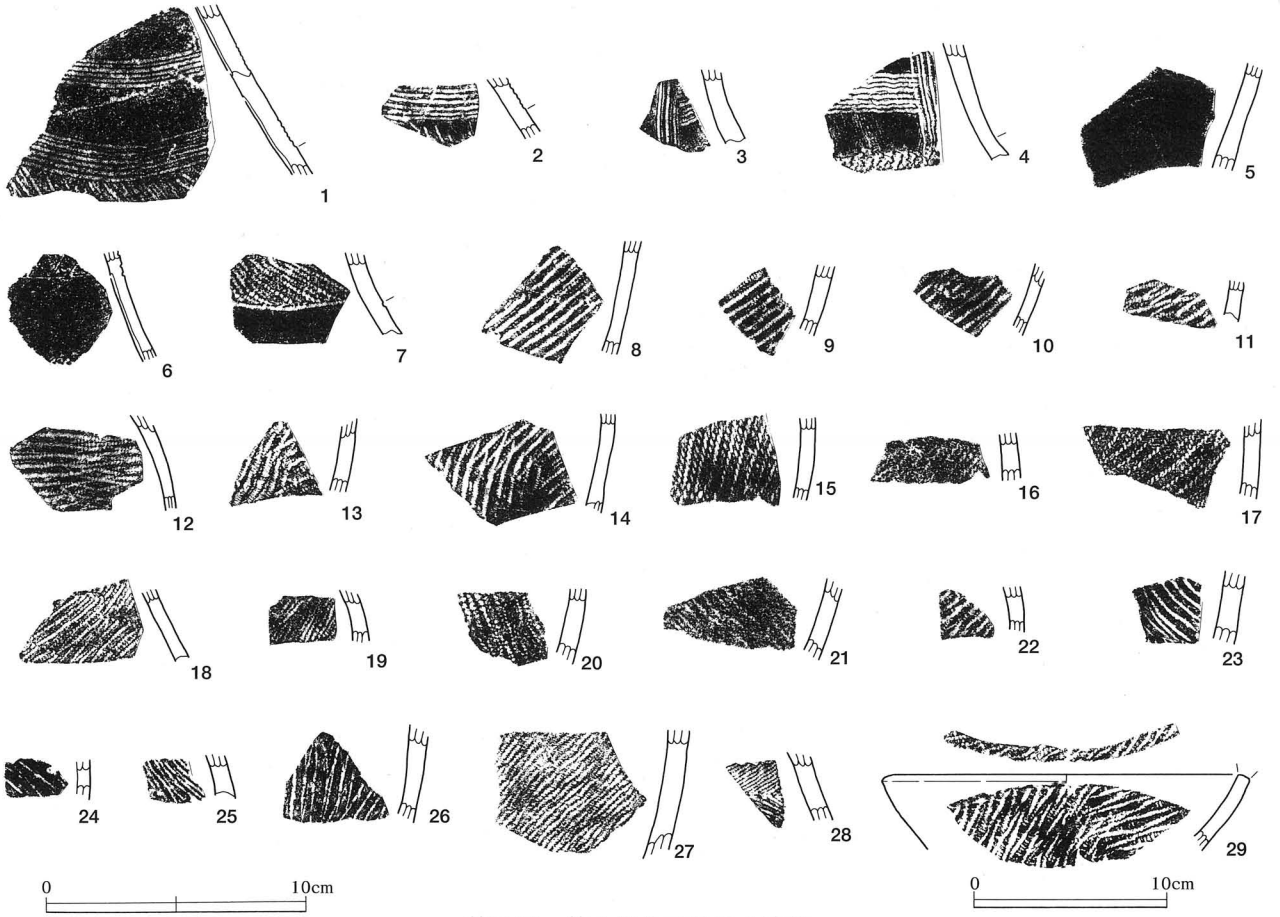
南東隅の２層に覆われた床面直上から**29**の弥生土器が２点に分かれて出土した他、28点の弥生土器片が覆土中や貼床土、それに攪乱内から散漫な分布状態で出土している。一方、１層中や攪乱内からは土師器54点が出土している。

遺構の時期については、土師器が２層や床面上からは出土しなかったこと、平面形が弥生時代に多くみられる形態のものであることから弥生時代と捉える。

出土遺物（第７図）　出土した遺物は上記した弥生土器と土師器、それに滑石製遺物１点であるが、ここでは弥生土器についてのみ記載し、土師器と滑石製遺物についてはⅢ－３で触れる。また、**1**は本住居址と15ｍ以上離れた第２号溝状遺構Ⅳ区から出土した破片であるが、本住居址出土の**2**と同一個体と捉えられるためここで一緒に報告する。

1～5は頸部に４本歯以上の櫛歯状工具によって描かれた櫛描文が施された頸部付近の破片で、**1**，**2**は横位の、**3**，**4**は縦位と横位を組み合わせた、**5**は山形もしくは菱形のモチーフを描いている。また、**1**の胴部にはＲ？の撚糸を巻いた撚糸文がみられる。**6**は箆状工具による単沈線で格子目文が描かれた土器で、下部の無文部には赤色塗彩が部分的に残る。**7**は単節ＬＲ？が施文された縄文帯と無文帯を箆状工具による単沈線で区切っている。

8～29は縄文のみが施されたもので、原体は**8～17**が附加条１種附加２条ＬＲ＋２Ｒ、**18**が直前段反撚Ｌ



第７図　第１号住居址出土遺物

ＬＲ、**19**が直前段４条ＬＲ？、**20～23が**撚糸文Ｒ、**24～26**が撚糸文Ｒ（細）、**27**が単節ＲＬ、**28**が単節ＲＬと附加条１種附加２条ＲＬ＋２Ｒを組み合わせたものである。**8～14** は同一個体の破片と思われ、**17**には縄文施文前につけられた刷毛目整形痕が、**18**の外面の一部には赤色塗彩が認められる。

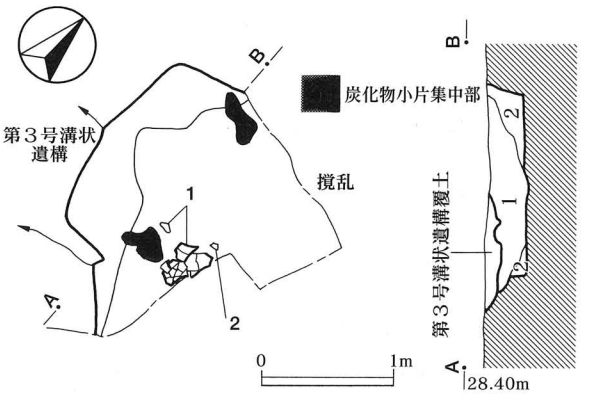
29は鉢もしくは高杯形土器の杯部と思われ、外面と口唇部には直前段反撚ＬＬＲの縄文が施されている。復元口径は19cm。

第５号住居址

位置　①区の北西端に位置する。住居址の大部分は攪乱されており、西隅が僅かに残っていたに過ぎない。また、覆土の上部は古墳時代の第３号溝状遺構によって一部壊されている。

規模と形態　残存していた隅は丸みを帯び、隅丸の平面形をしていたと思われる。壁の高さは28cm。床面は地山ローム層であり、残存部全面が硬化している。ピット、炉址等は検出されていない。

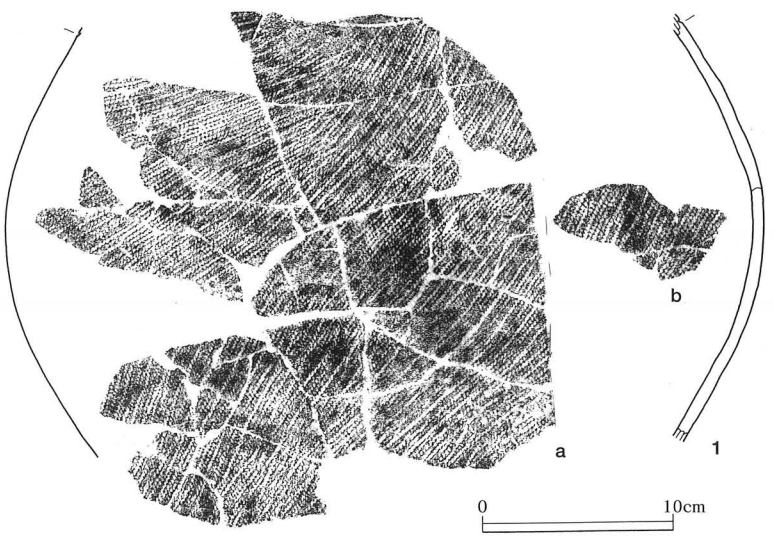
覆土と遺物の出土状態　覆土は壁際床面上に堆積する

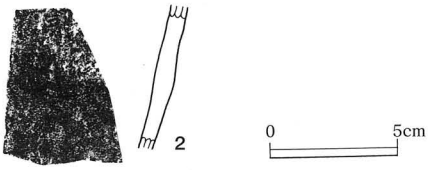


第５号住居址土層説明

１層：黒褐色土層　締まり・粘性やや有り。黒褐色土を主体に暗褐色土が混じる。ロームブロック（径10～30mm）を若干含み、ローム・炭化物粒子を含む。
２層：褐色土層　締まり・粘性やや有り。褐色土を主体にハードロームブロック（最大径20mm）、ローム・炭化物粒子を含む。

第８図　第５号住居址実測図





第９図　第５号住居址出土遺物

写真７　第５号住居址全景

２層とした褐色土層と、２層と中央寄りの床面を覆う１層とした黒褐色土層からなる。壁際の２層上面には、最大長50mmの炭化物小片が集中した箇所が２ヶ所認められる。

床面直上からは１の弥生土器がつぶれた状態で出土し、２の土器もその側の床面直上の出土である。その他16点の土師器小片が覆土中から出土している。大型破片である１の出土状況から、弥生時代の遺構と捉える。

出土遺物（第９図）　１は壺形土器の胴部破片で、附加条１種附加２条ＬＲ＋２Ｒの縄文が施されている。また僅かに残る頸部は無文帯になっており、縄文施文部との境には、篦状工具による単沈線が引かれている。復元胴部最大径は40cm。２は無文の土器で、外面は粗い撫でによって整形されている。表面の粘土が撫でによってかなり延ばされており、粘土に粘性がある内に整形されたものと思われる。

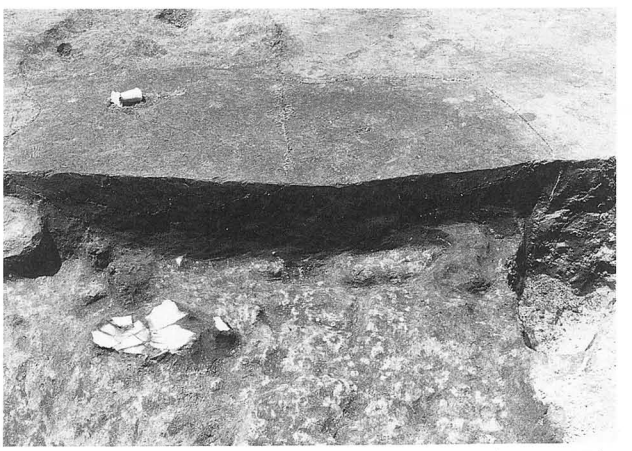


写真８　第５号住居址土器１・２出土状況（上は３溝）

第３号土坑

位置　①区の南端に位置する。立木のため表土層を残してあった個所から検出されたもので、その下に焼土を含む覆土の一部が残されていた。北、南側は攪乱のため、西側は表土剥ぎ時の掘り過ぎにより、遺構の範囲を明確に捉えられていない。

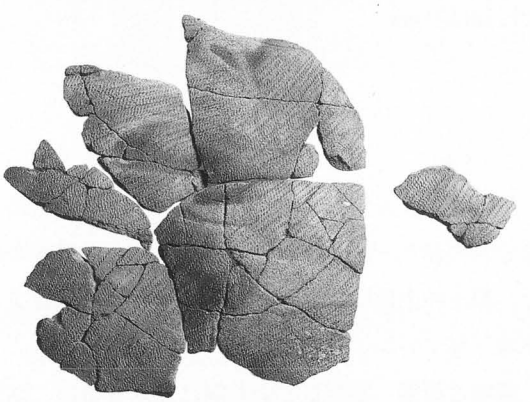
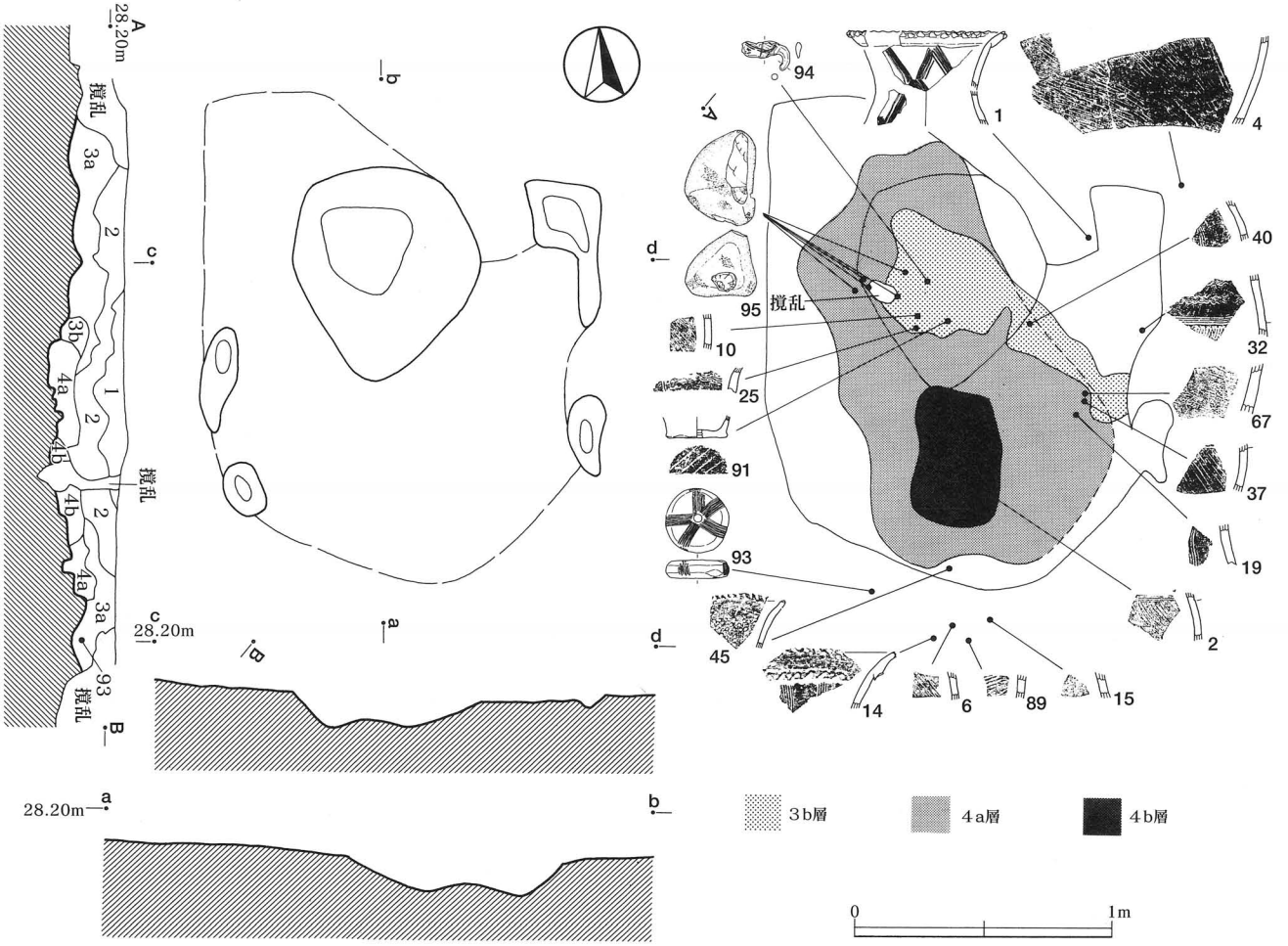


写真９　第５号住居址出土土器１



第３号住居址土層説明

１層：黒褐色土層　締まり・粘性やや無し。黒褐色土を主体に暗褐色土が混じる。ローム・焼土・炭化物粒子を含む。
２層：暗褐色土層　締まり・粘性やや無し。暗褐色土と褐色土が混じる。
３ａ層：褐色土層　締まり有り、粘性やや有り。褐色土主体。
３ｂ層：赤褐色土層　締まり有り、粘性やや有り。３ａ層土に多量の焼土粒子が混じる。
４ａ層：暗褐色土層　締まり・粘性やや無し。暗褐色土に炭化物粒子を多く、焼土粒子をやや多く含む。ローム粒子も含む。
４ｂ層：黒褐色土層　締まり・粘性やや無し。４ａ層土に炭化物起源と思われる黒褐色土が混じる。

第10図　第３号土坑実測図

写真10　第３号土坑全景

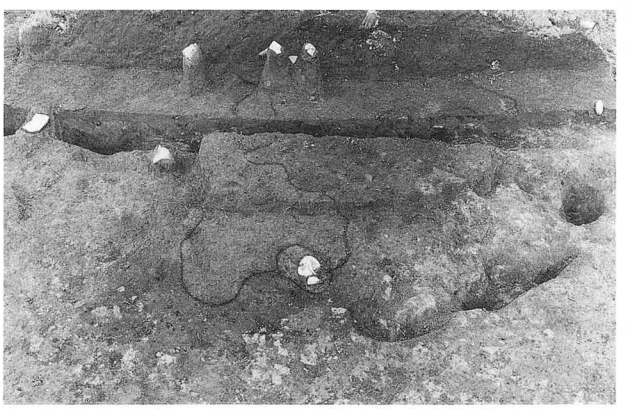
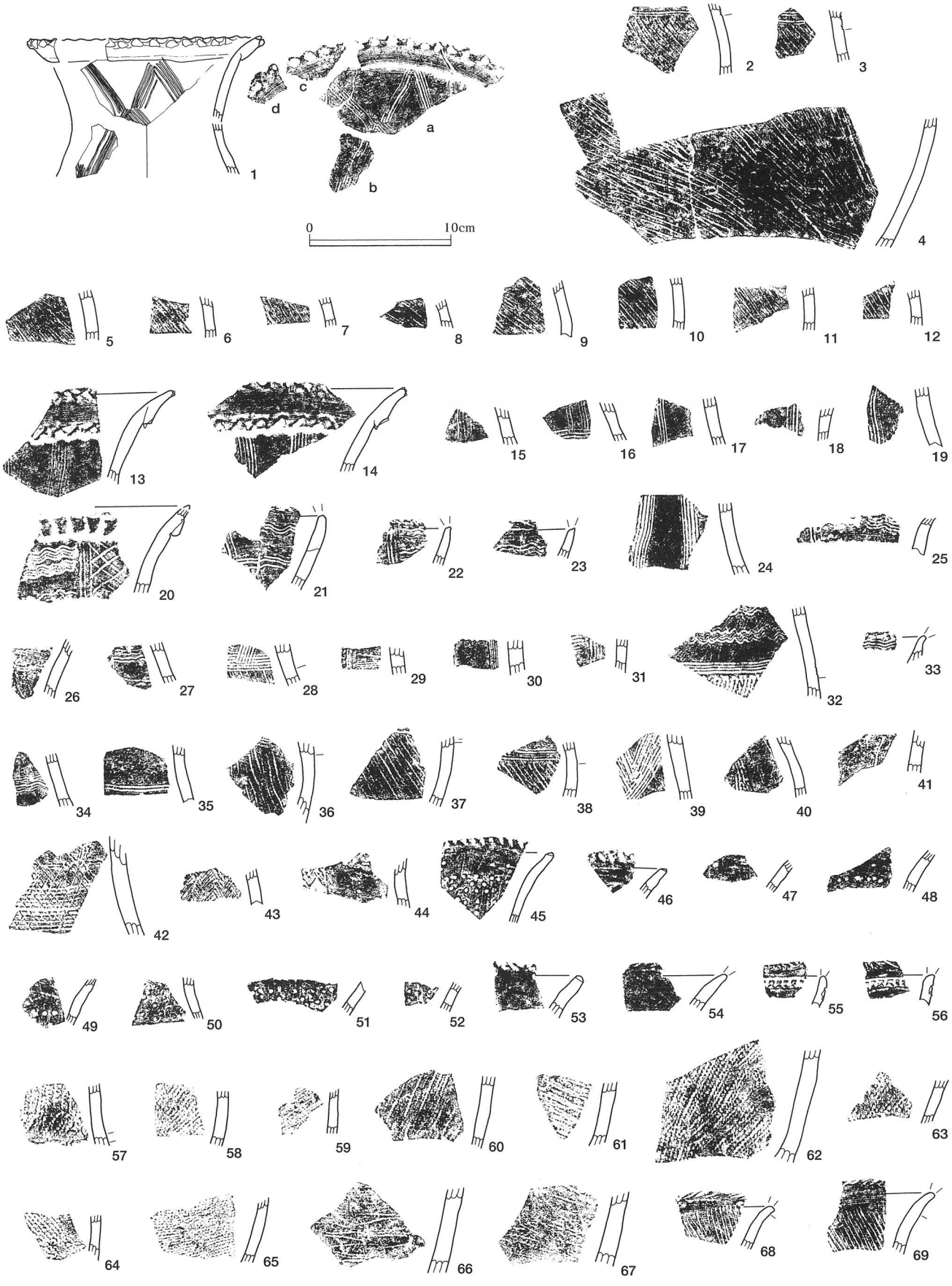


写真11　第３号土坑遺物出土状態



第11図　第3号土坑出土遺物

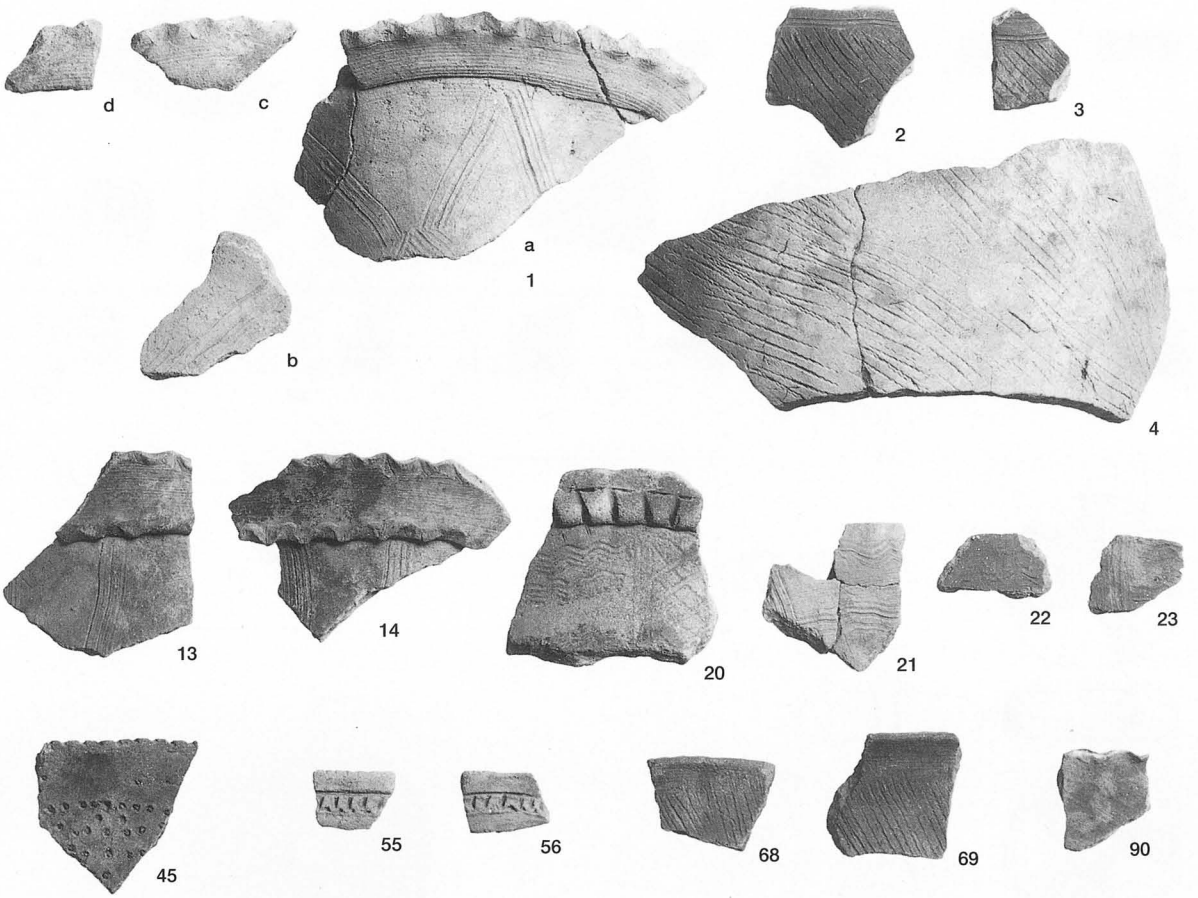


写真12　第３号土坑出土遺物

規模と形態　最終的には、長径86cm、深さ20cmの不整円形の皿状の掘り込みの周囲に、地山であるローム漸移層が被熱のためかボロボロに劣化した面（ボロボロのブロックは硬化していた）が検出されている。確認できた劣化部は南北２ｍ、東西1.5cmの範囲に広がっており、東西両端には劣化部を区切る形で、深さ５～14cmの浅い溝状のピットが２ヶ所づつ計４ヶ所存在する。覆土の限界が確認できた東側では、劣化部が切れるあたりから徐々に地山が上がっていき、それに伴い覆土が薄くなって途切れていた。なお、皿状の掘り込み内もボロボロに劣化していた。

覆土と遺物の出土状態　皿状の掘り込み内から周囲の劣化部直上には、４ａ層とした炭化物粒子を多く含む暗褐色土層が堆積しており、皿状の掘り込みの南側の４ａ層中には黒味の強い炭化物起源と思われる４ｂ層がブロック状に存在する。４層が存在しない部分の遺構縁辺の劣化部上には３ａ層とした褐色土層が堆積し、一部４層を覆っている。また、皿状の掘り込みを中心とした範囲の３ａ層中には、３ｂ層とした多量の焼土粒子を含む赤褐色土がブロック状にみられる。更に３，４層を覆って暗褐色土層の２層と黒褐色土層の１層が凹レンズ状に堆積する。劣化部におけるこれら覆土の厚さは20cm程である。

底面直上から覆土、さらに覆土上の表土層にかけて計146点の弥生土器片が出土している。土器片はいずれも細片で、同一個体の破片でも出土した位置や層位にばらつきがある。図示した各土器の出土位置については、第10図の遺物分布図と付表の観察表を参照されたい。土器以外では、**93**の土製紡錘車が遺構南端の３ａ層中から、**94**の土製品と**95**の敲石が皿状の掘り込み内の４ａ層上面から出土している。なお、**95**の敲石は８片に破砕しており、そのうちの２片は４ａ層中の出土である。

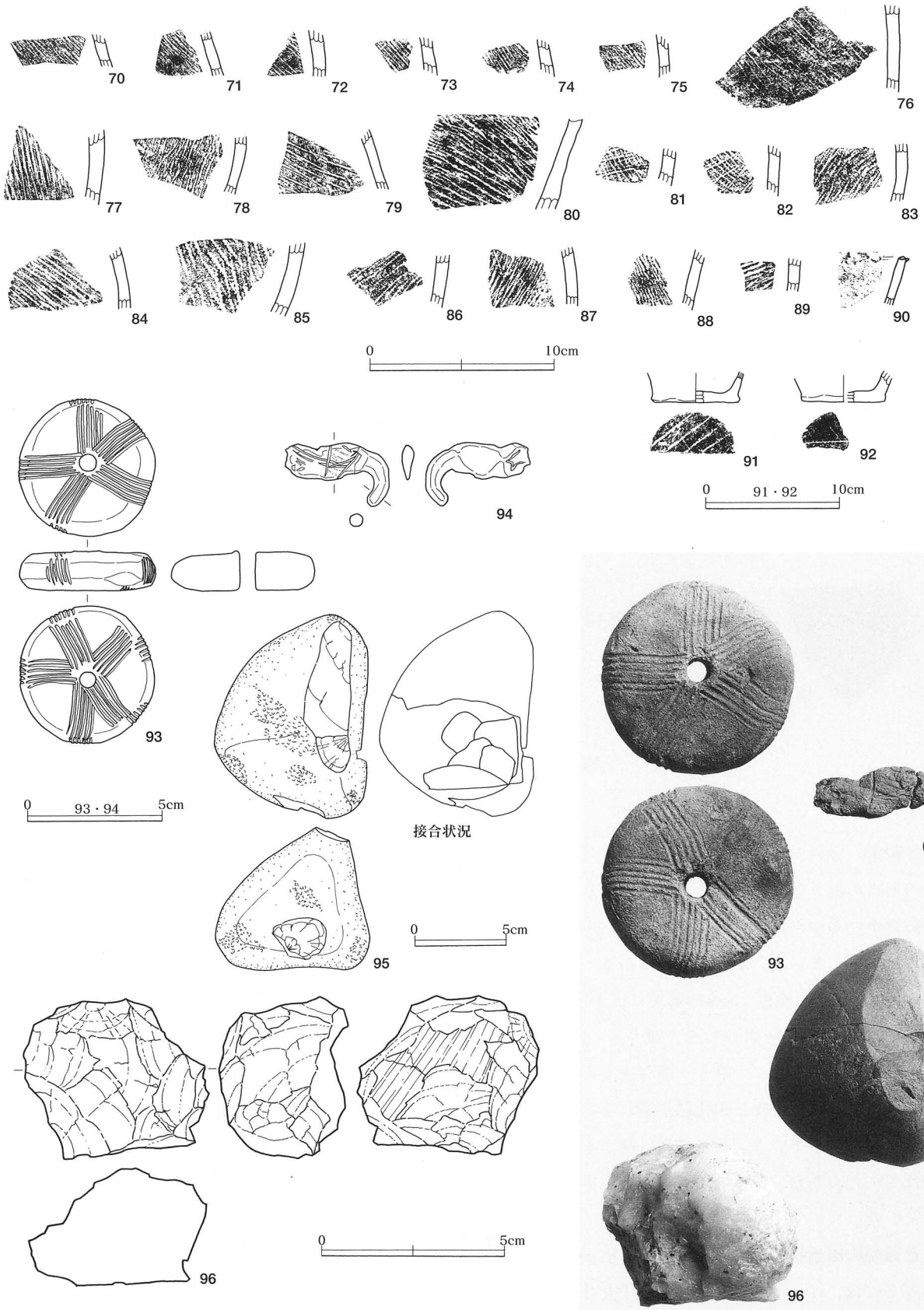


写真13　第3号土坑出土遺物

第12図　第3号土坑出土遺物

出土遺物（第11、12図）　**1～92**は弥生土器である。**1**は頸部以上が復元できた広口の壷形土器で、頸部には５本歯の櫛歯状工具による櫛描文によって菱形のモチーフが描かれている。口縁は複合口縁で、ヨコナデ整形後、口唇部が内外面から交互に押捺されている。復元口径は16.6cm。

2～12は同一個体の胴部破片群であり、Ｌを巻いた撚糸文が施されている。また、**2**の破片には胴部と頸部を区画する平行沈線文が半截竹管状工具によって引かれている。

13～41は３本歯以上の櫛歯状工具による櫛描文が施文されたものである。**13～19**は頸部に櫛描文が縦位に施されたもので、**16**には頸部下端を区画する横位の櫛描文もみられる。**13～15**と**16，17**はそれぞれ同一個体で、前者の口縁部はヨコナデ整形の後、口唇部に交互押捺が、複合口縁下端に押捺が施されている。**20～28**は縦位の櫛描文を起点に横位の波状櫛描文が施されたもので、**24，25**は２列の縦位櫛描文の間が無文部になっている。**20**は複合口縁の下部を篦状工具による単沈線によって横位に区切り、その下の複合口縁下端部に縦位の刻みを入れている。また、頸部の櫛描文によって縦位に区画された部分には、篦状工具による格子目文がみられる。**28**の胴部にはＲ（細）を巻いた撚糸文が施され、同一個体である**22，23**それに**21**の口唇部には縄文が施されている。**29～31**は縦位の櫛描文を起点に横位の直線的な櫛描文が施されたもので、**29，30**は同一個体。**32～34**は横位に波状の櫛描文が施されたもの。**32**には頸部下端を区画する櫛描文と胴部に施文された直前段４条ＬＲの縄文がみられ、**33**の口唇部には縄文が施されている。**35～38**は頸部下端を区画する櫛描文がみられるもので、**35**の区画上位は無文で、煤が付着している。また、**36～38**の胴部にはＲ（細）を巻いた撚糸文が施文されている。**39**は山形もしくは菱形の、**40，41**は曲線的なモチーフを櫛描文によって表出したものである。

42～44は篦状工具による単沈線によって文様が描かれたもので、**42**は横位の櫛描文の上に格子目文が、同一個体の**43，44**は矢羽状の文様が描かれている。**45～52**は同一個体と思われる口縁部破片である。口唇部には刻みが施され、口唇直下は幅１cm程の無文帯になっている。無文帯の下には径２mmの竹管状工具を使った円形刺突文が数多く施文されている。**53，54**は無文の口縁部破片で、**53**の口唇部には刻みが、**54**の口唇部には縄文が施されている。**55，56**は同一個体で、口縁部に篦状工具によって２本の平行する沈線が引かれ、その間に刻み列が充填されたものである。また、口唇部には縄文が施文されている。

57～60は附加条１種附加２条ＬＲ＋２Ｒの縄文が施文された胴部破片。**61**の縄文は附加条と思われ、附加縄Ｒが２本密接して現れている。**62～65**は直前段４条ＬＲの縄文が施された胴部破片。**68～82**はＲ（細）を巻いた撚糸文が施されたもので、**79**には撚糸文施文前の刷毛目整形痕がみられる。**66，67**は同一個体で、他の撚糸文に比べて条の間隔が不規則である。また、**68～73**も同一個体の破片であり、**68，69**の口縁部にはヨコナデ整形痕がみられ、口唇部に縄文が施されている。**83～86**はＲを巻いた撚糸文が、**87，88**はＬ（細）を巻いた撚糸文が、**89**は０段多条と思われるＬを巻いた撚糸文が施された胴部破片。**90**は甕形土器の無文の口縁部破片で、口唇部上面には押捺が施され、内外面は撫でによって整形されている。また、胎土はとても微粒の白色粒子を含むもので、他の個体と趣を異にする。**91，92**は底部破片で、両者とも底面に木葉痕が残る。底径は**91**が6.5cm、**92**が6.2cm（復元）。

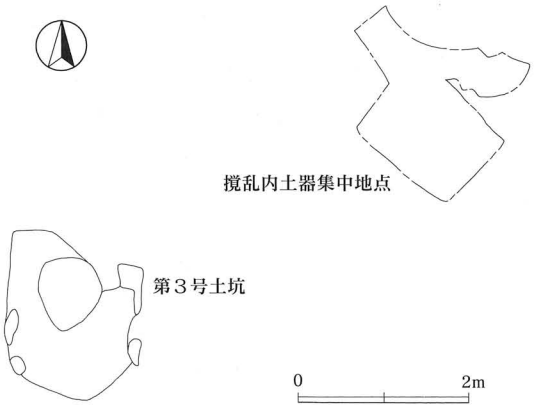
93は完形の土製紡錘車で、表裏側面に孔部を中心として放射状に描かれた、６本歯の櫛歯状工具による櫛描文がみられる。また、表裏両開口部に若干の摩滅が認められる。**94**は土製品で鉤状に曲がっている棒状部と指頭押捺で扁平にされた部分からなる。扁平部の片面には繊維の圧痕もしくは擦痕がみられる。

95は三角錐状の砂岩製自然礫を使用した敲石で、三角錐の底面にあたる部分と稜や角にあたる部分に複数の敲打痕が残る。８片に破砕された状態で出土したものであり、いずれの破片も被熱による赤化が認められる。被熱度合いの差か礫表面の赤化具合は破片によって異なるが、破損面についてはいずれも礫表面近くが赤化しているのみで、中央部の赤化はほとんど認められない。

96はペグマタイトの節理が発達した石英質部を使用した塊状の形態をした石器である。表面は多くの剥離面と節理面で構成され、周縁方向からの剥離が多いという他、目立った規則性は認められない。石核か。

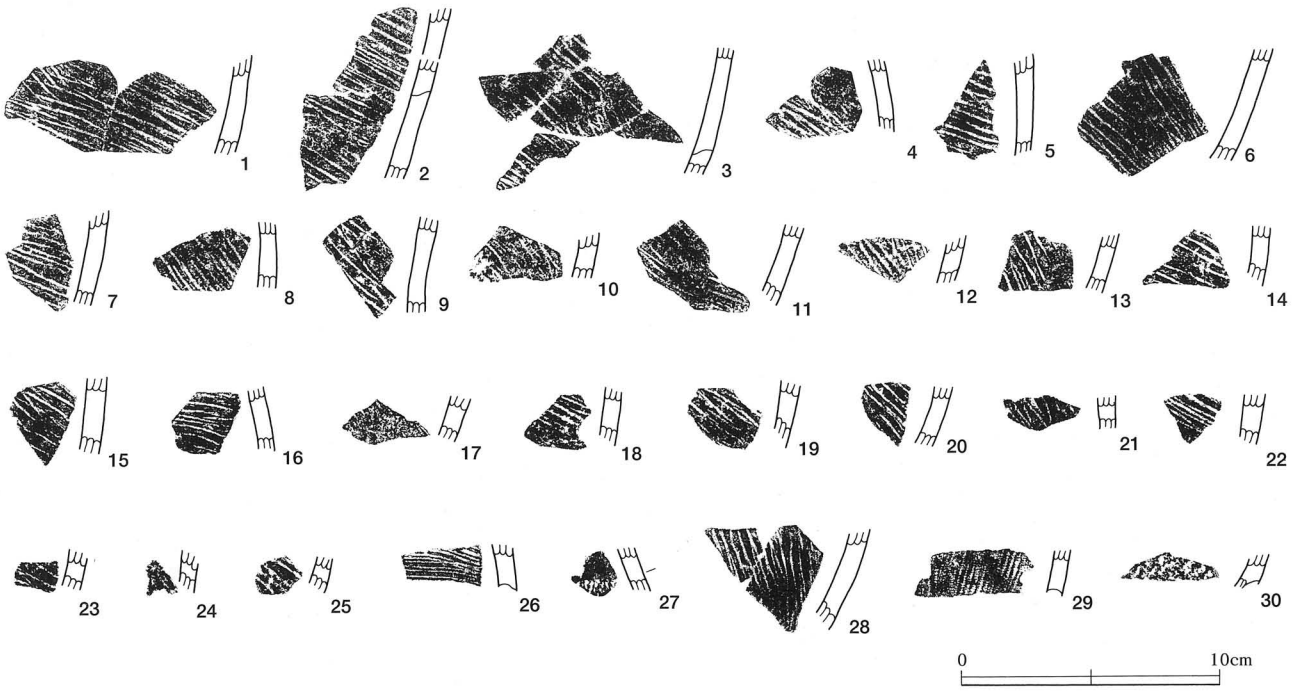
攪乱内土器集中地点

位置と遺物の出土状態　①区の第３号土坑の北東約６ｍの所に位置する攪乱内の一部（径50cm程の範囲）から、同一個体の破片34点を含む計45点の弥生土器片がかたまって検出された。攪乱内ではあるが、土器が包含されていたブロック状の土が均質であったこと、また、同一個体の破片が多く含まれていることから、これらの土器片を、原位置は動かされているものの遺棄・廃棄された時点でのまとまりを部分的に示している一群として扱う。



第13図　攪乱内土器集中地点実測図

出土遺物（第14図）　**1～25**は同一個体で、Ｌ（細）を巻いた撚糸文が施された胴部破片である。**26**は多条の櫛描文が横位に施されたもの。**28**はＲ（細）を巻いた撚糸文が、**29**は単節ＲＬの縄文が施文された胴部破片。**27**と**30**には縄文が施されているが原体は不明。**27**の縄文上位は無文になっている。



第14図　攪乱内土器集中地点出土遺物

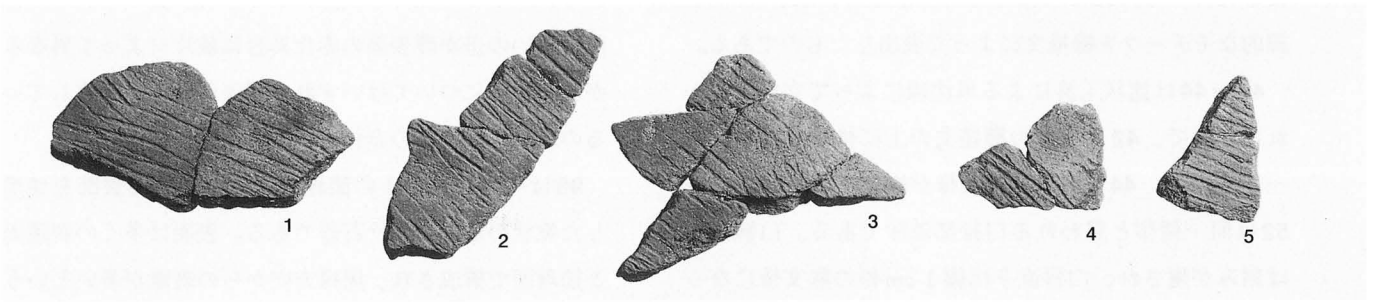


写真14　攪乱内土器集中地点出土土器

後世遺構内及び遺構外出土の弥生土器

ここでは古墳時代以降の遺構内から検出された弥生土器、及び遺構外から出土した弥生土器を記載する。該当する土器片は計372点である。（第15，16図）

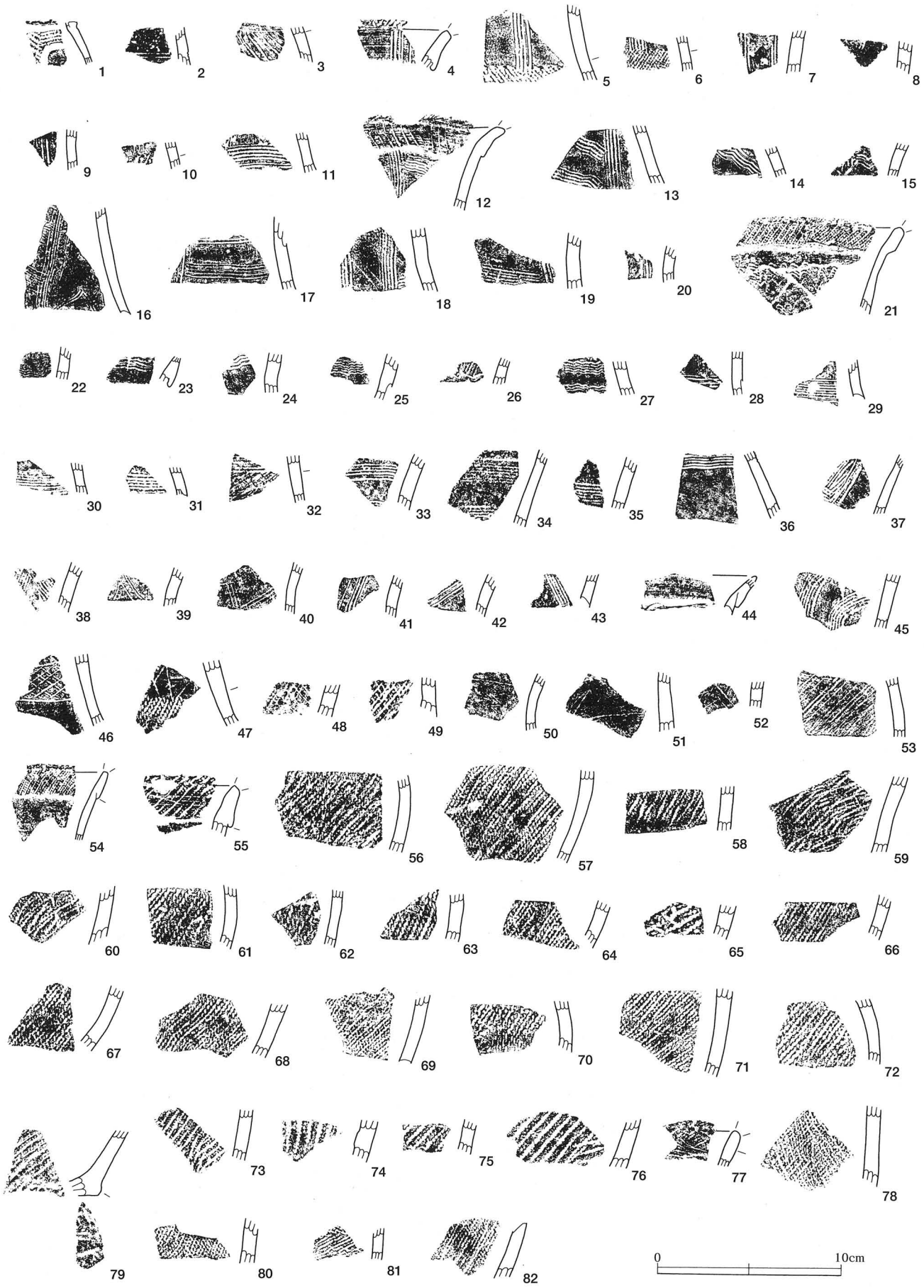
1は細頸の壷形土器の肩部にあたる破片と思われ、幅３mmの太めの単沈線に挟まれた部分に、単節ＬＲの縄文が施されている。**2**，**3**は半截竹管状工具による平行沈線文によって、頸部下端が区画されているもので、**3**の胴部にはＲ（細）を巻いた撚糸文が施文されている。

4～45は３本歯以上の櫛歯状工具によって描かれた櫛描文が施文された口縁部から頸部にかけての破片である。**4～11**は縦位に櫛描文が施されたもので、**11**には櫛描文による横位の区画文も合わさっている。**4**は複合口縁部の破片で、櫛描文施文前にヨコナデ整形がなされ、口唇部には縄文が施されている。**5**，**6**，**10**の胴部には縄文がみられる。**5**は附加条１種附加２条ＬＲ＋２Ｒ、**6**は単節ＬＲであろうか。**12～15**は縦位の櫛描文を起点に波状の櫛描文を横位に配したもの。**12**は複合口縁と口唇部にＲ（細）を巻いた撚糸文が施されている。**13**，**14**は同一個体で、波状の櫛描文がやや斜めに配されている。**16～20**は縦位の櫛描文を起点に直線的な櫛描文を横位に配したもの。**18**は２列の縦位櫛描文の間が無文部になっており、**16**では同様な部分に半截竹管状工具を使った平行沈線によって山形のモチーフが描かれている。**21～27**は横位の波状櫛描文が施されたもので、**26**には刷毛目整形痕もみられる。また、**21**の複合口縁と口唇部には附加条１種附加２条ＬＲ＋２Ｒの縄文が施文されている。**28～36**は直線的な櫛描文が横位に施されたもの。**32**の櫛描文は胴部との区画文になっており、胴部には直前段反撚ＬＬＲの縄文が施文されている。**33**，**34**は同一個体。**37～44**は櫛描文で山形もしくは菱形のモチーフを描いたもので、**44**は無文の複合口縁を持つ。**45**は櫛描文で曲線的なモチーフが描かれている。

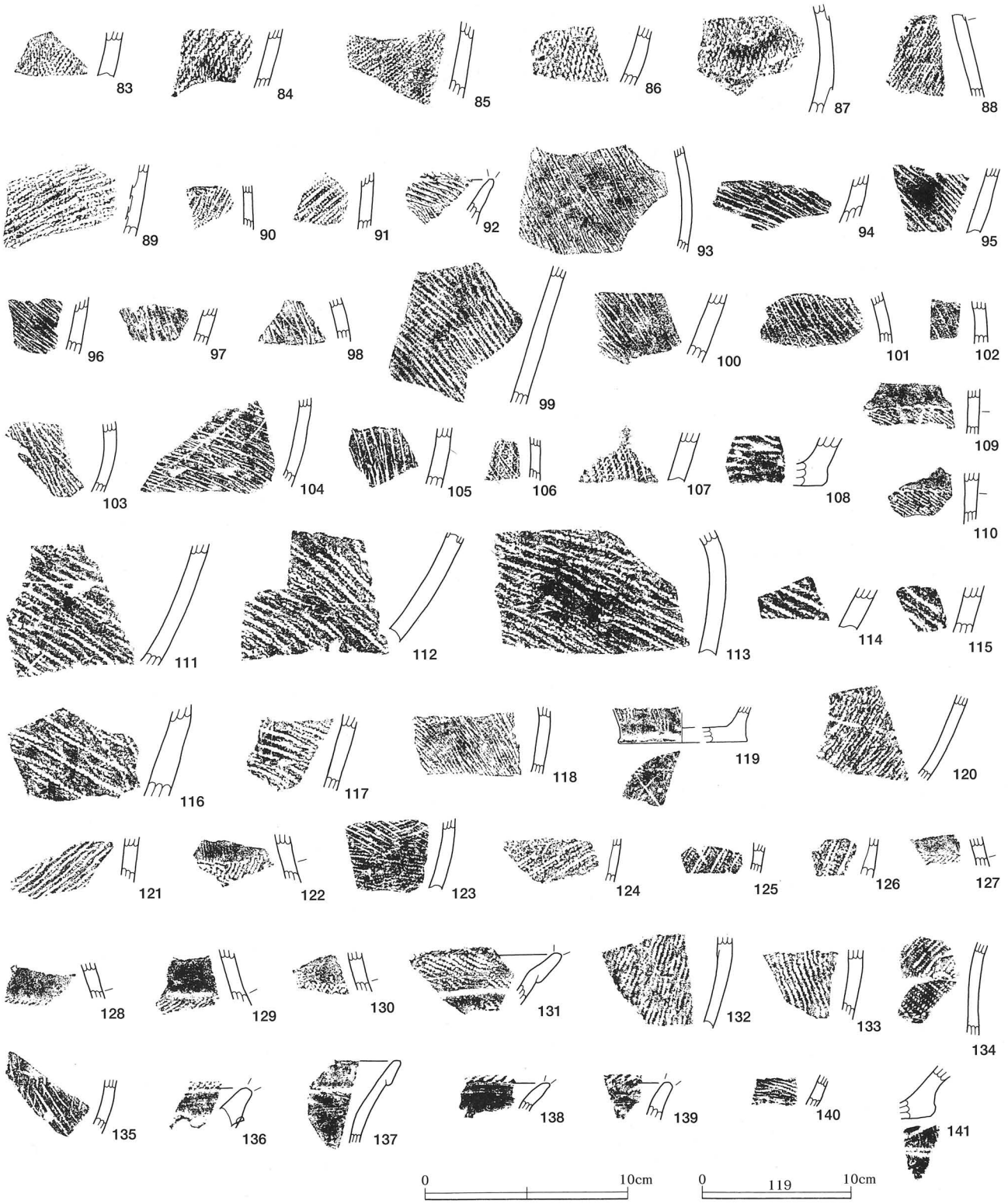
46～49は篦状工具による単沈線で格子目文が描かれたもので、**46**は格子目文の上下を単沈線で区画している。**47**の胴部に施文された縄文は附加条１種附加２条ＬＲ＋２Ｒ。**50～52**も篦状工具による単沈線でモチーフを描いていたもので、**50**では横位の単沈線文で区画された中に横向きの矢羽状のモチーフが描かれている。**53**は横位の波状櫛描文を施文した後に、刷毛目整形を施したものである。

54～79は附加条１種附加２条ＬＲ＋２Ｒの縄文が施されたもので、**54**，**55**，**77**が口縁部、**79**が底部、他が胴部破片である。**61**，**62**は同一個体。**54**，**55**は複合口縁と口唇部に縄文が施文されており、複合口縁の下位は無文である。**77**の口唇部にも縄文施文。また、**78**では縄文が交差する形で重複している。**80～87**は直前段４条ＬＲの縄文が施文された胴部破片。**88～91**は直前段反撚ＬＬＲの縄文が施されたもので、**90**には赤色塗彩が一部に残っている。**92～107**はＲ（細）を巻いた撚糸文で、**106**，**107**は交差する形で撚糸文が重複している。**101**には赤色塗彩が一部に残る。**108**はＲを巻いた撚糸文が施文された底部破片。**109**，**110**は同一個体で、頸部無文部の下位に撚りの細かい直前段反撚ＲＲＬの縄文が施文されたもの。**111～115**は同一個体の胴部破片で、撚りの太い縄文が施されている。原体は直前段反撚ＲＲＬか。**116**，**117**はＬを巻いた、**118**，**119**はＬ（細）を巻いた撚糸文が施されたもので、**119**は底部、他は胴部破片である。**119**の復元底径は10.0cm。**120**，**121**は附加条１種附加２条ＬＲ＋２Ｌが施文されたもの。**122**は頸部無文部の下位に縄文が施されたもので、原体は無節Ｌか。**123**は附加条１種附加２条ＬＲ＋２ＲとＲ（細）を巻いた撚糸文が施文された胴部破片。**124～126**に施文されている縄文は直前段４条ＬＲと思われ、隣接する２条が深く押圧されている。**127～130**は頸部無文部の下位に単節ＬＲの縄文が施されているもので、**127～129**は同一個体。**131～133**は単節ＲＬの縄文が施文されたもので、**133**は０段多条と思われる。**131**は複合口縁と口唇部に縄文が施文されており、複合口縁より下位は無文部になっている。**134**は結束第１種ＬＲ・ＲＬ、**135**はｒを巻いた撚糸文が施文されたもの。

136～139は口縁部破片で、**136**，**137**は複合口縁である。**136**，**138**，**139**の口唇部には縄文が施文され、**136**の複合口縁下端には上下から交互押捺が施されている。それ以外に文様の施文無し。**140**は条痕がみられる破片であるが、刷毛目整形か。**141**は底部破片で、底部に太い沈線がみられる。



第15図　後世遺構及び遺構外出土弥生土器



第16図　後世遺構及び遺構外出土弥生土器

3. 古墳時代以降の遺構と遺物

古墳時代以降の遺構と遺物の概要

古墳時代の遺構としては、第２号、第３号、第４号、第６号、第７号の５軒の竪穴住居址と、第３号溝状遺構が該当する。また、第１号、第２号、第４号溝状遺構と第２号土坑は、遺構の重複関係や出土遺物等から古墳時代もしくはそれ以降の時代が想定される。第１号土坑、それに③区のピット群は時期不明の遺構であるが、本節で一緒に報告する。

遺物は、遺構内を中心に検出された土師器が主体であり、須恵器も若干出土している。他には鉄鏃、刀子、土錘、敲石、砥石、板状石製品、石核、剥片、砕片、双孔円盤を含む滑石製遺物が出土している。なお、石核、剥片、砕片については、弥生時代以前の可能性も考えられる遺物であるが、そのほとんどが古墳時代以降の遺構内から出土しているため、本節で扱う。

土師器・須恵器

土師器片は計2,834点、須恵器片は計16点検出された。但し、土師器には時期不明の素焼き無文の土器片を含む。土師器の主体は、住居址から出土した古墳時代中期から後期に該当するものである。

これら古墳時代土師器の胎土は、肉眼観察によって径１mm以下の細かい白色及び透明の砂粒が含まれているものと、白色砂粒と径１～２mmの粗い透明砂粒が目立つものに大きく分けられ、両者には灰色砂粒と雲母粒子が含まれる場合がある。雲母粒子については、前者に含まれる場合はごく微量であるが、後者でみられる雲母粒子は粗く、含有量が多い。後者の全体に対する割合は５％未満で、圧倒的に前者が多い。なお、第４号住居址出土の**27**は細かい雲母粒子が目立つもので、上記２者とは趣が異なる。また、これら古墳時代土師器と伴出した須恵器も透明砂粒がみられなく、質を異にする。

滑石製遺物

双孔円盤３点を含む滑石製遺物が計29点検出された。石材は雲母片岩質から蛇紋岩質まで細かくみると数種認められるが、今回は滑石製模造品の製作に関する石材ということで、一括して滑石と呼称する。滑石製遺物に残された加工痕としては、剥離、折り取り、削り、刃あたり痕（以下「刃痕」）、研磨、穿孔が認められる。このうち削りと刃痕は金属製工具によって残されたものと思われる。また、未製品としたものは、加工形状から製品の種類が特定されるものである。

以下、遺構ごとに遺構自体の内容や出土遺物を報告していくが、遺構別・器種別の土器出土点数や遺物個々の属性については巻末の付表を、土層の細かい説明や堆積状況、それに遺物個々の出土位置については各遺構の実測図を参照されたい。

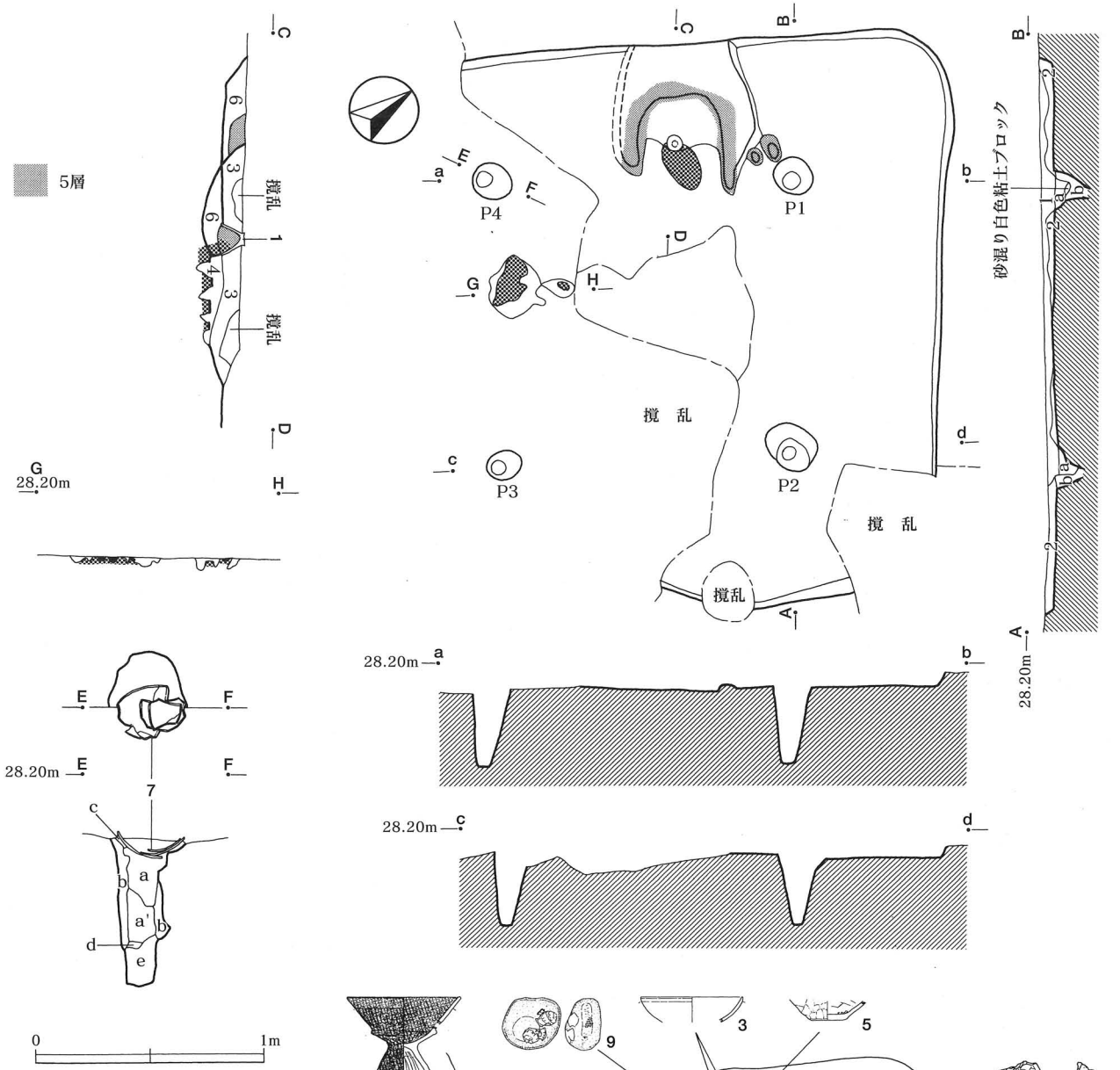
第２号住居址

位置　①区のほぼ中央に位置する。南側約1/3と東側隅が攪乱によって失われている。

規模と形態　平面形は残存部と主柱穴の配置からみて隅丸正方形をしていたものと思われる。残存していた北西－南東方向の壁間が5.2ｍ、壁の高さが北西側で11cmを測る。床面は地山ローム層からなっており、中央部に硬化部が認められる。

北西壁に竈がつくられているが、構築材の主体は６層としたロームと褐色土が斑状に混じった明褐色土で、燃焼部に面した袖と奥壁だけに５層とした白色粘土がＵ字形に貼られていた。焚き口部における両袖間の間隔は74cmである。燃焼部底面の焚き口寄りには、地山ローム層が長径44cmの範囲にわたって赤化し、ボロボロに劣化した火床面が存在する。

一方、攪乱によって床面が残っていなかった住居址南東部には、長径約65cmに及ぶ焼土が存在する。断ち割りによる断面観察の結果、約６cmの振幅で細かく凹凸になった地山ローム層上面に被熱による赤化が認められた。この部分の失われた床面は約１cm程であり、もと

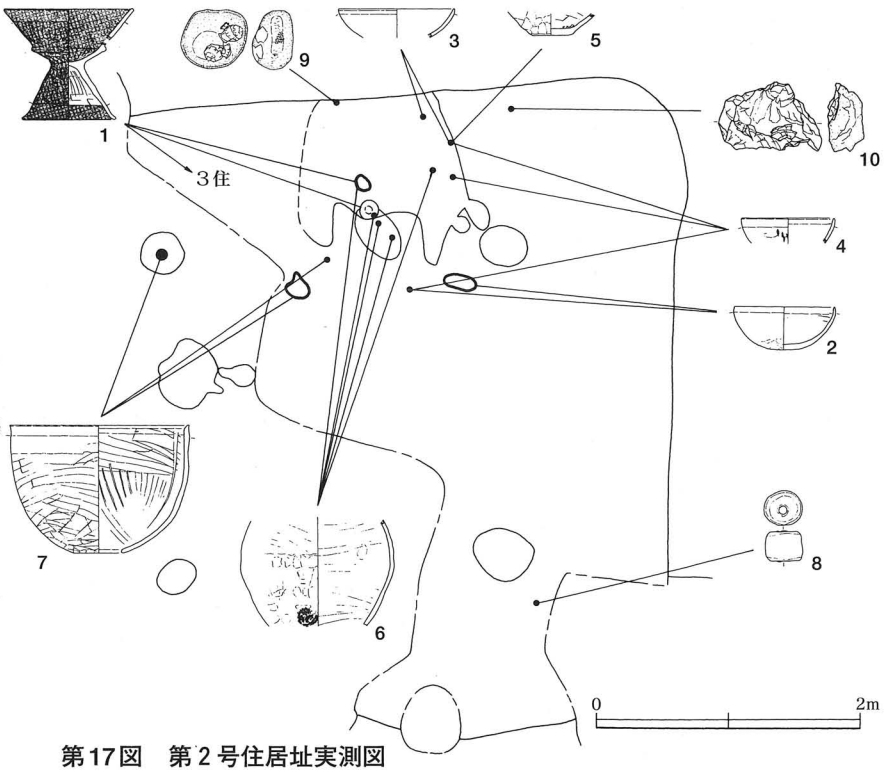


第2号住居址土層説明

1層：褐色土層　締まり・粘性やや有り。褐色土と暗褐色土が混じる。ローム粒子を含み、焼土・炭化物粒子を少量含む。
2層：明褐色土層　締まり・粘性やや有り。褐色土を主体にロームがブロック状（最大径20mm）に混じる。ローム粒子を含み、焼土・炭化物粒子を少量含む。
3層：褐色土層　締まり・粘性やや有り。1層土に砂・白色粘土・焼土粒子、焼土ブロック（最大径10mm）が混じる。
4層：赤褐色土層　締まり・粘性やや有り。褐色土に多量の焼土ブロック（最大径20mm）が混じる。焼土・ローム粒子を含む。
5層：白色粘土層　締まり・粘性有り。白色粘土と砂と褐色土が混じる。ローム粒子を含む。竈構築材。
6層：明褐色土層　締まり・粘性有り。ロームと褐色土が斑状（径10mm以下）に混じる。所々暗褐色土も混じる。竈構築材。

（ピット覆土）
a：暗褐色土　締まり・粘性やや無し。褐色土と暗褐色土が混じる。ローム粒子を多く含み、焼土・炭化物粒子も含む。
a'：暗褐色土　aと同質だが、暗褐色土の割合が多く、黒味が強い。
b：暗黄褐色土　締まり・粘性有り。ロームを主体に若干の褐色土が混じる。ハードロームブロック（最大径15mm）を含む。
c：黒褐色土　締まり・粘性やや有り。黒褐色土を主体に若干の褐色土が混じる。土器7に密着。
d：赤褐色土　eに多量の焼土粒子が混じる。
e：明褐色土　締まり無し。粘性やや無し。

（炉址覆土）
褐色土　ローム・焼土・炭化物粒子を含む。



第17図　第2号住居址実測図

写真15　第２号住居址全景

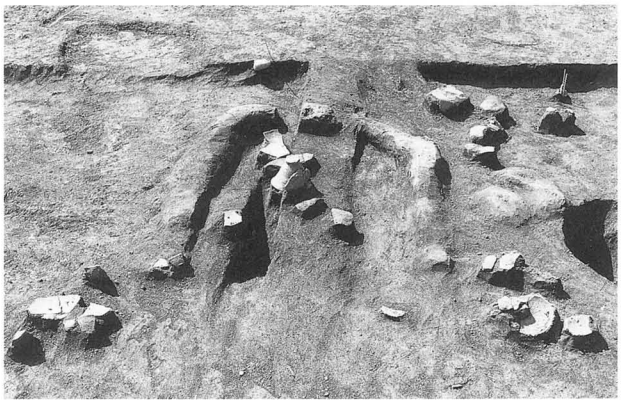


写真16　第２号住居址竈

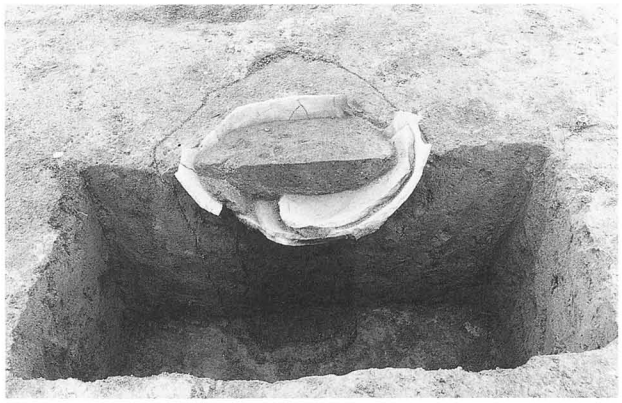


写真17　Ｐ４土器７出土状況

写真18　竈土層断面

の床面が被熱したものと考えられる。本住居址では、住居廃絶後の燃焼の痕跡が認められないため、炉址と捉えておく。

検出されたピットはＰ１～Ｐ４とした４ヶ所である。これらは方形に配置されていることから主柱穴と捉えられる。Ｐ１，２はともに床面からの深さ70cmを測り、攪乱下から検出されたＰ３，４は地山ローム層上面からの深さがそれぞれ68cm、66cmである。なお、ピット底面の標高値は４ヶ所ともほぼ同じである。

覆土と遺物の出土状態　床面上の壁際には２層とした明褐色土層が堆積し、住居址中央部の床面上と２層上を１層とした褐色土層が覆う。

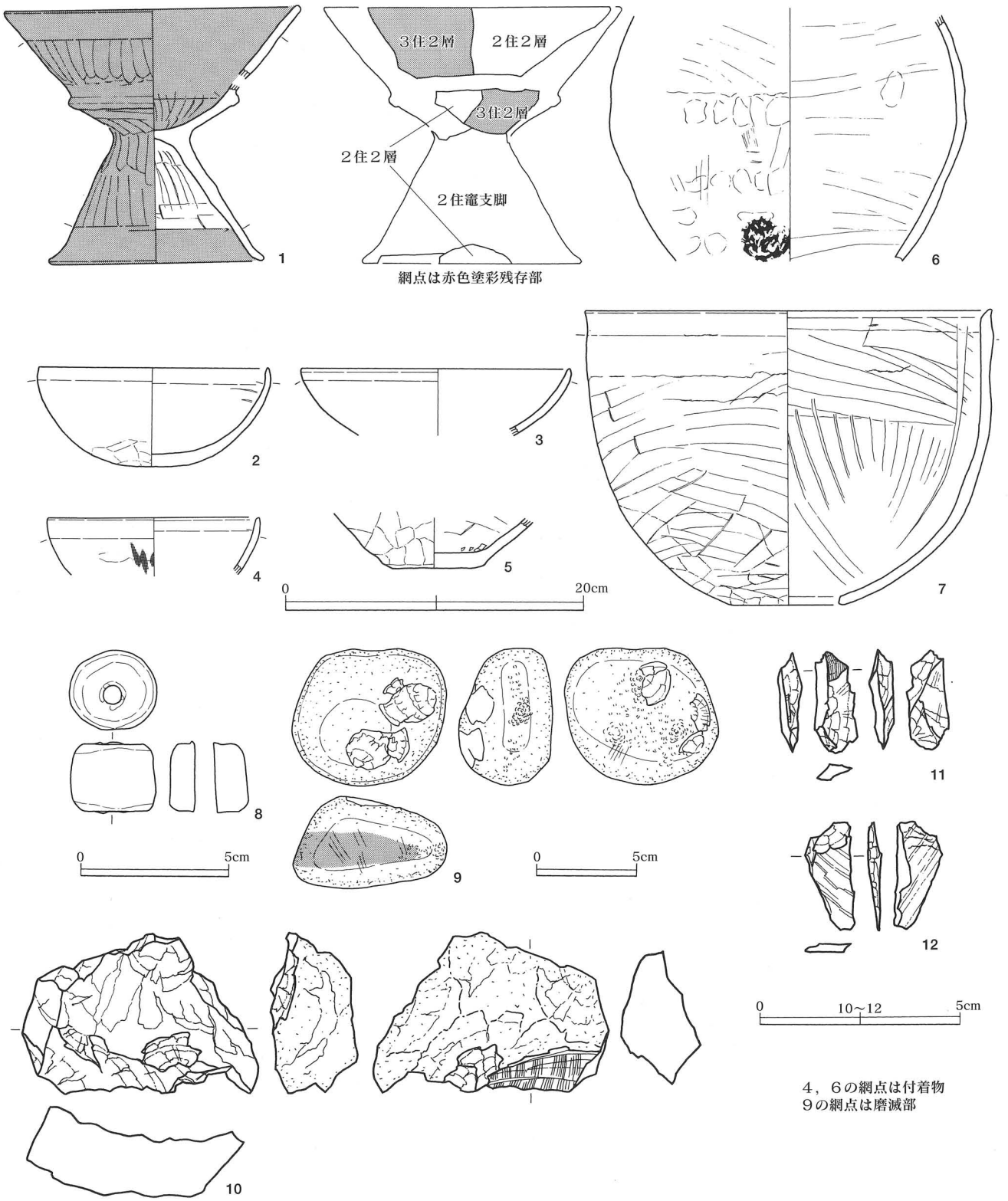
竈内では焼土粒子を多量に含む４層とした赤褐色土層が火床面上にみとめられ、その上位には１層土に白色粘土粒子と砂粒を含む３層とした褐色土層が堆積する。火床面端にあたる燃焼部中央には**1**の高杯形土器の脚部が、支脚として正位の状態で残されていた。この支脚は竈構築材６層の上に、脚内部に５層と同質の白色粘土を充填し固定されていたが、火床面側の脚内部の白色粘土と脚下の６層は被熱のため赤化していた。一方、炉址の凹凸の凹部には、ローム・焼土・炭化物粒子を含む褐色土が認められた。

Ｐ４の開口部からは、**7**の甑形土器の大型破片がピットの口を塞ぐ形で内面を上に重った状態で検出された。重ねられた一番下の破片の外面にはｃとした黒褐色土が薄く密着していた。Ｐ４の覆土では、褐色土とハードロームブロックを含むロームからなるｂとした土が壁際に観察され、柱を支えた充填土と考えられる。

遺物の出土位置については上記**1**，**7**の他、**6**の土師器が竈内、**3**～**5**の土師器と**9**の敲石が竈直上、**2**の土師器が竈前の床面直上及び２層、**10**の滑石製遺物が竈北東側の２層中から検出されており、竈周辺に遺物が集中していた（土師器については主な破片の出土位置）。また、**8**の土錘はＰ２東側の床面直上からの出土である。

出土遺物（第18図）　本住居址から検出された遺物は、土師器片167点、弥生土器片４点、土錘１点、敲石１点、滑石製遺物３点である。

1～**7**は土師器。**1**は高杯形土器で、杯下部に鍔状の隆帯が巡り、脚部は柱状部を持たない円錐形の形態をし



第18図　第2号住居址出土遺物

ている。部分的に残る痕跡から脚部内面上部を除いて赤色塗彩が施されていたと思われる。この高杯形土器は、脚部から杯下部にかけては支脚に使用されていた脚部の大型破片1点と竈周辺の2層から出土した2点、それに第3号住居址の2層から出土した1点が、杯部口縁については竈周辺の2層から出土した1点と第3号住居址の2層出土の1点の破片が接合したものである。第3号住居址から出土した2点は赤色塗彩が良く残っているのに

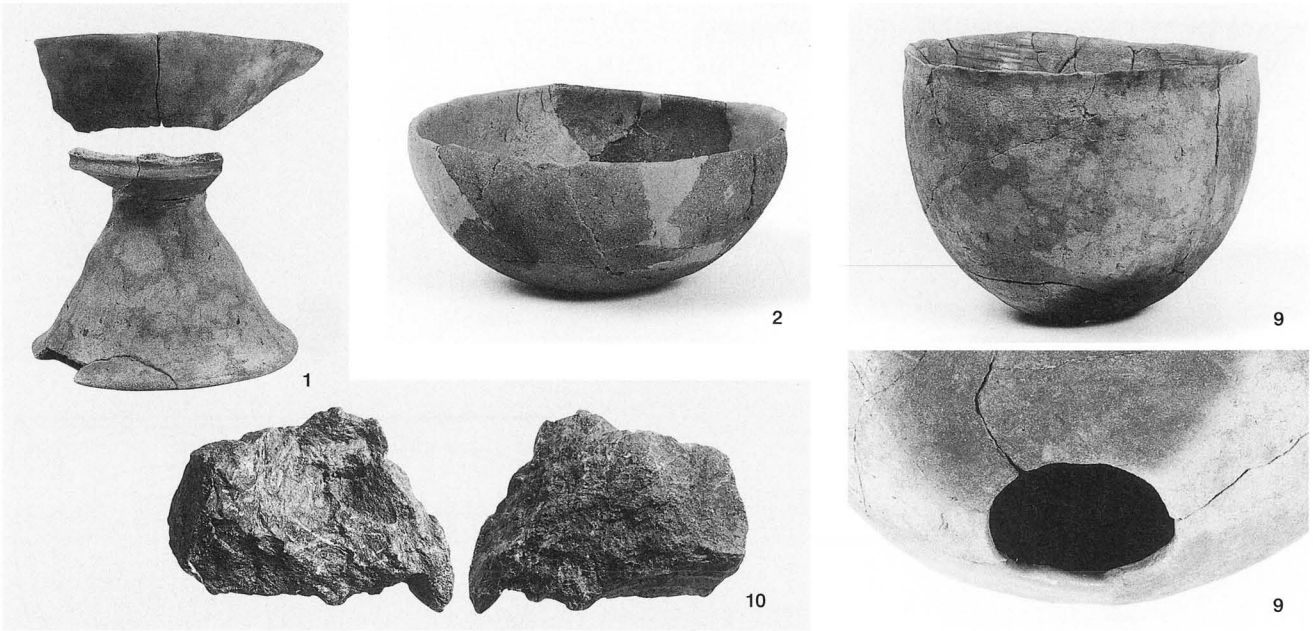


写真19　第２号住居址出土遺物

対し、第２号住居址から出土した４点は部分的にその痕跡が認められるに過ぎない。特に支脚に使用されていた脚部破片は、被熱のため表面がかなり荒れている。

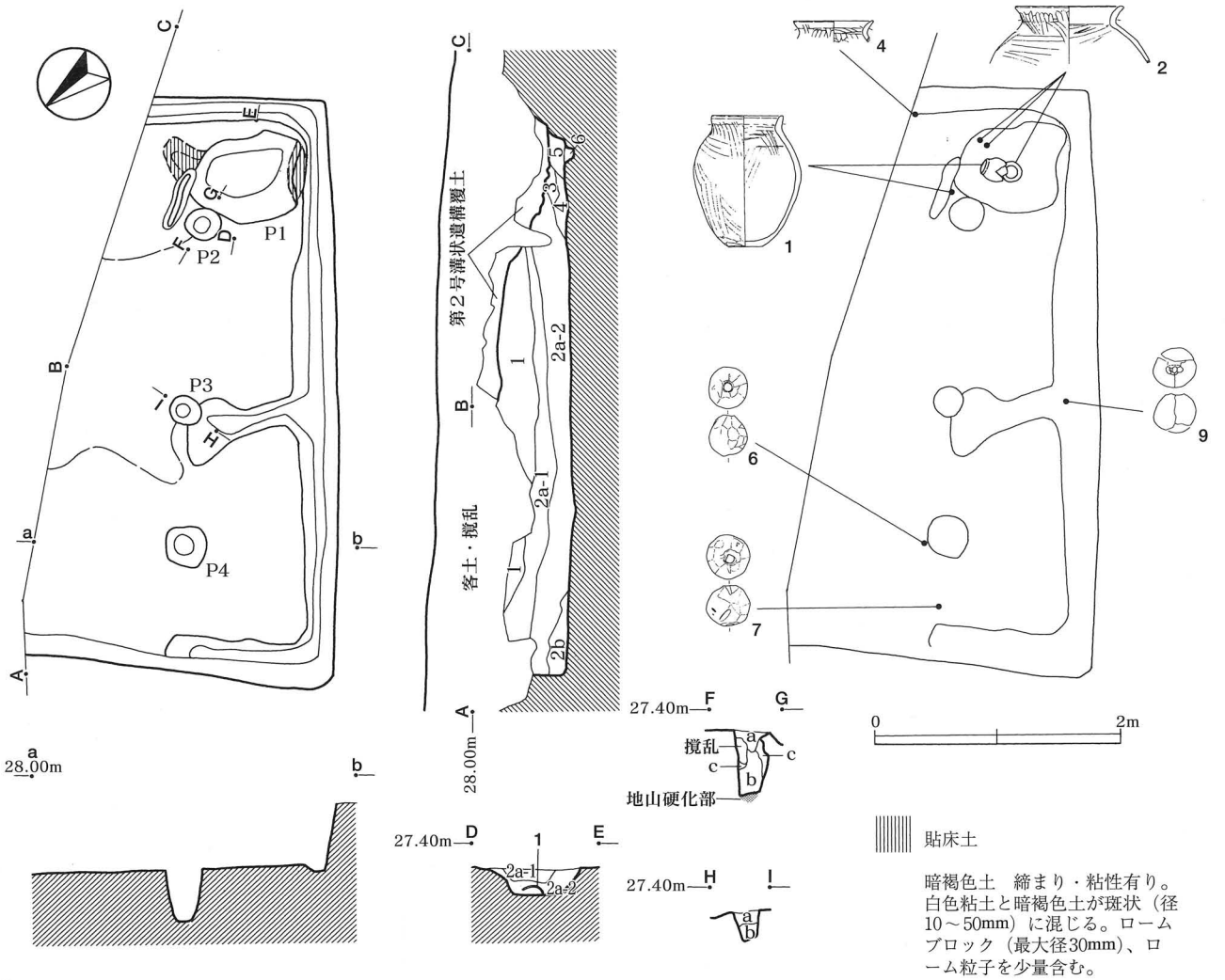
2～4は杯形土器で、**4**の外面の一部には煤が付着している。**7**は甑形土器。素口縁で底孔は底部が抜けた形の単孔である。**5**は底部、**6**は甕形土器の胴部の破片で、**6**の外面の一部には煤の付着が認められる。

8は円柱状をした管状土錘。**9**は砂岩の円礫を使用した敲石で、平坦な一面と二側面に敲打痕が、他の二側面に磨滅部がみられる。**10～12**は滑石製遺物である。**10**は片面に自然面を多く残し、反対面は複数の剥離面から構成される石核状の大型品である。自然面側の一部には階段状の削り面が存在し、段部には刃痕が残る。**11**, **12**は薄手の剥片を素材とし、**11**は二側縁が、**12**は一側縁が折れ面である。**11**の一部には削りが認められる。

第３号住居址

位置　①区の第２号住居址の南東約20ｍの所に位置する。北東側約1/2が調査区外にかかっていて、その部分は未調査である。南東端には第２号溝状遺構が、本住居址の壁と覆土の上部を壊す形で重複している。また、第２号溝状遺構との重複部分には、両遺構の覆土まで掘り込まれた攪乱が存在した。

規模と形態　南東ー北西方向の壁間が4.8ｍの方形の平面形をしており、壁の高さは46cmを測る。ピットは４ヶ所検出されたが、南西隅に存在するＰ１は貯蔵穴状のもので、長径90cm、短径80cm、深さ47cmの楕円形を呈する。Ｐ２とＰ４は床面からの深さがそれぞれ46cm、45cmの主柱穴と思われるピットで、Ｐ３はその間に存在する深さ25cmの小ピットである。なお、ｐ２の底面の地山ローム層は、硬化し白っぽく変色していた。壁に沿って深さ５cm以内の浅い周溝が巡るが、北西壁の途中で途切れている。また、南西壁中央部の周溝からは、住居址中央に向かって周溝と同様の浅い床溝が延びており、Ｐ３に接続している。床面は地山ローム層からなり、Ｐ１から床溝の間が硬化している。Ｐ１の北東壁と南西壁の上部からその周辺の床面にかけては、深さ15～20cm程地山ローム層を掘り込んだ上に、白色粘土と暗褐色土が斑状に混じった土を充填した貼り床になっ



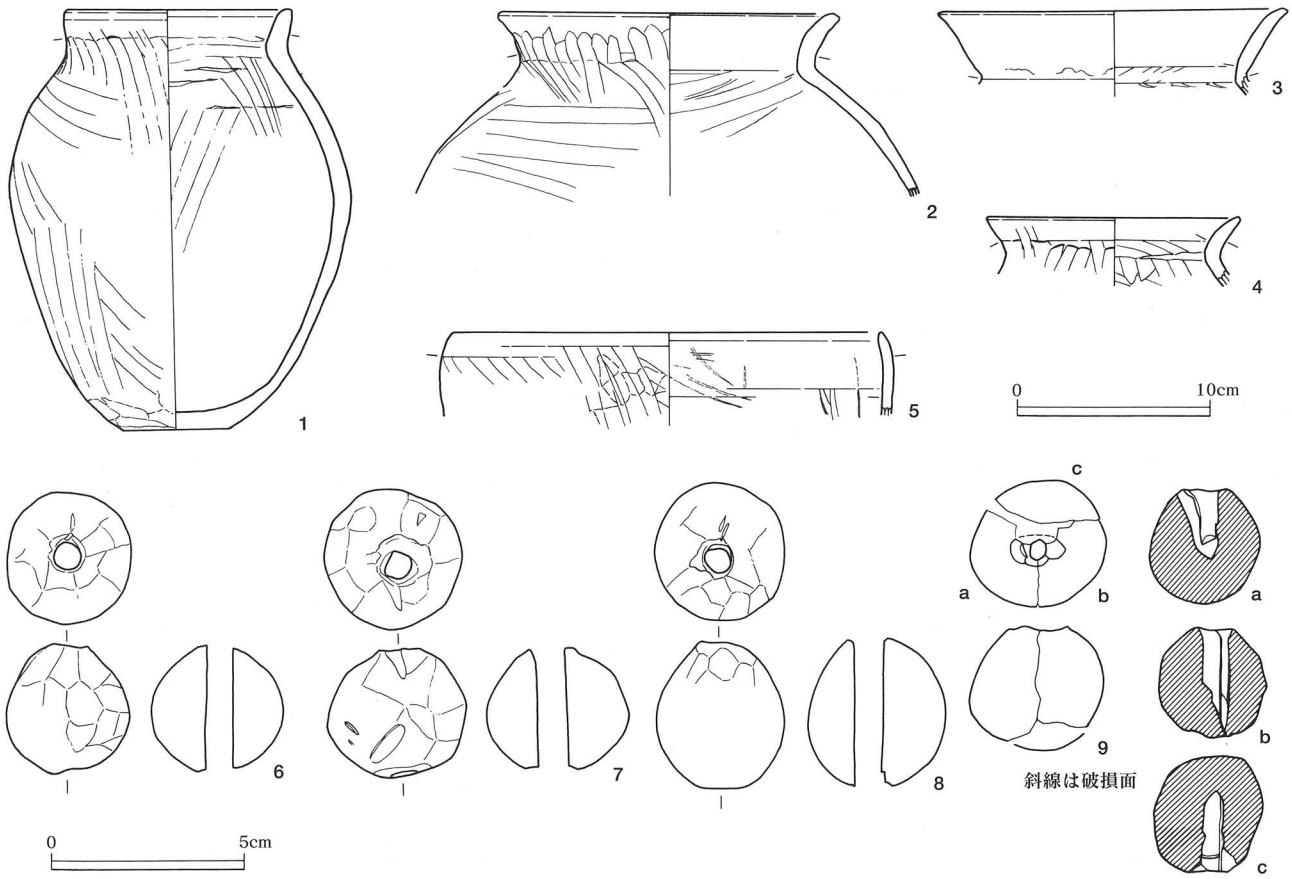
第19図　第３号住居址実測図

第３号住居址土層説明

１層：黒褐色土層　締まり・粘性やや有り。黒褐色土を主体に暗褐色土が混じる。ローム粒子を含み、焼土・炭化物粒子も少量含む。
2a-1層：暗褐色土層　締まり・粘性やや有り。褐色土と暗褐色土が混じる。ローム粒子を含み、ハードロームブロック（最大径15mm）、焼土・炭化物粒子を少量含む。
2a-2層：明褐色土層　締まり・粘性やや有り。褐色土とロームを主体に若干暗褐色土が混じる。ハードロームブロック（最大径30mm）、ローム粒子を多く含み、焼土・炭化物粒子も含む。
２ｂ層：暗褐色土層　締まり・粘性やや有り。2a-2層土に黒褐色土が混じったもの。
３層：明褐色土層　締まり・粘性有り。褐色土に白色粘土・砂粒を多く含む。ローム・焼土・炭化物粒子をやや多く含む。
４層：暗褐色土層　締まり・粘性有り。暗褐色土を主体に褐色土、ロームが混じる。ローム・焼土・炭化物粒子をやや多く含み、砂粒も少量含む。
５層：褐色土層　締まり・粘性有り。3層土に暗褐色土が混じる。
６層：暗黄褐色土層　締まり・粘性やや無し。ロームブロック（最大径20mm）と褐色土が混じる。
（ピット覆土）
ａ：明褐色土　2a-2層と同質（P2には砂・白色粘土粒子が混じる）。
ｂ：明褐色土　締まり・粘性やや無し。ロームと褐色土が斑状（径10～20mm）に混じる。ローム・炭化物粒子を若干含む。
ｃ：暗黄褐色土　締まり・粘性やや無し。ロームを主体に若干の褐色土が混じる。
（竈袖材）
褐色土　締まり・粘性有り。褐色土・暗褐色土・白色粘土が斑状（径10mm）に混じる。ロームブロック・焼土・炭化物粒子を僅かに含む。

写真20　第３号住居址全景

写真21
Ｐ１土器出土状況



第20図　第３号住居址出土遺物

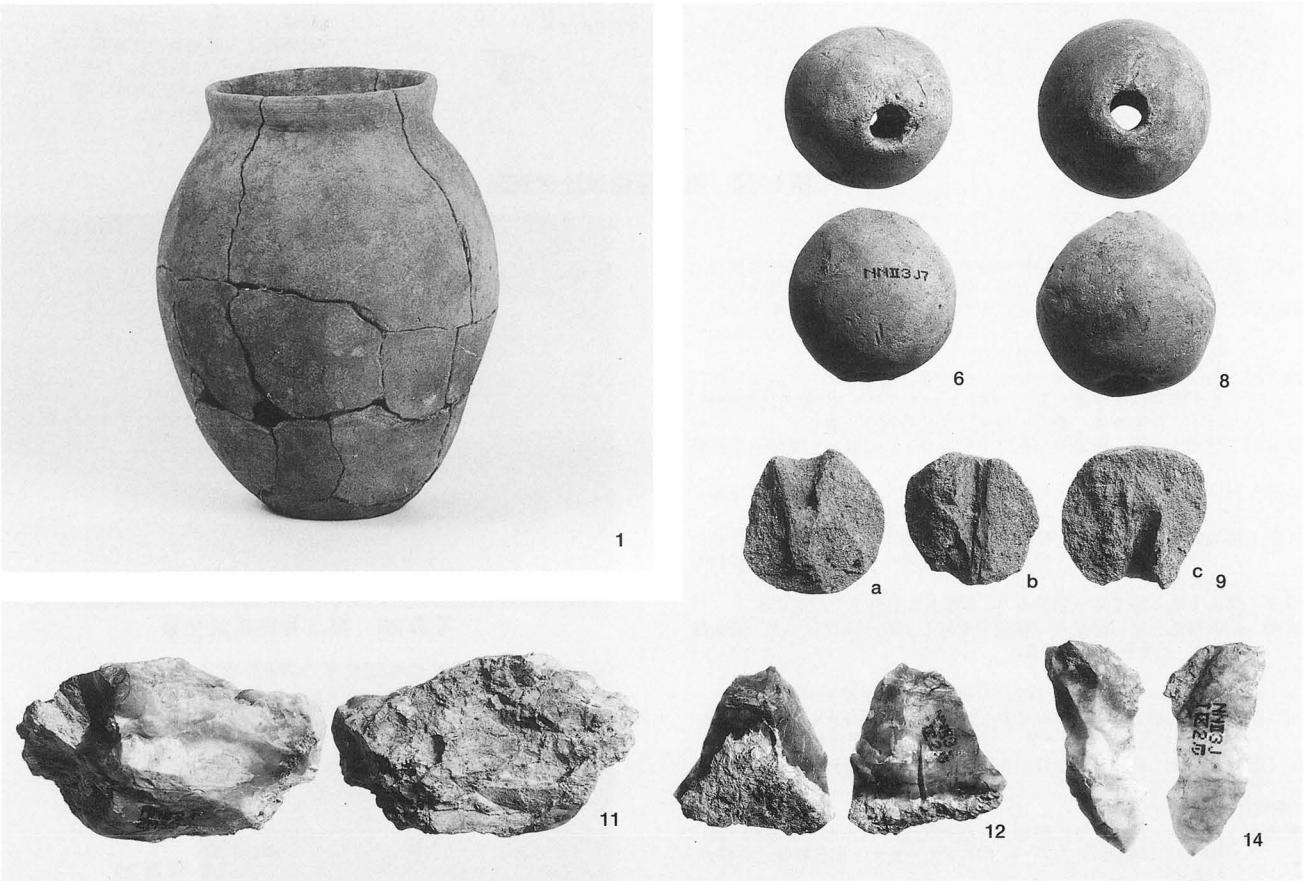
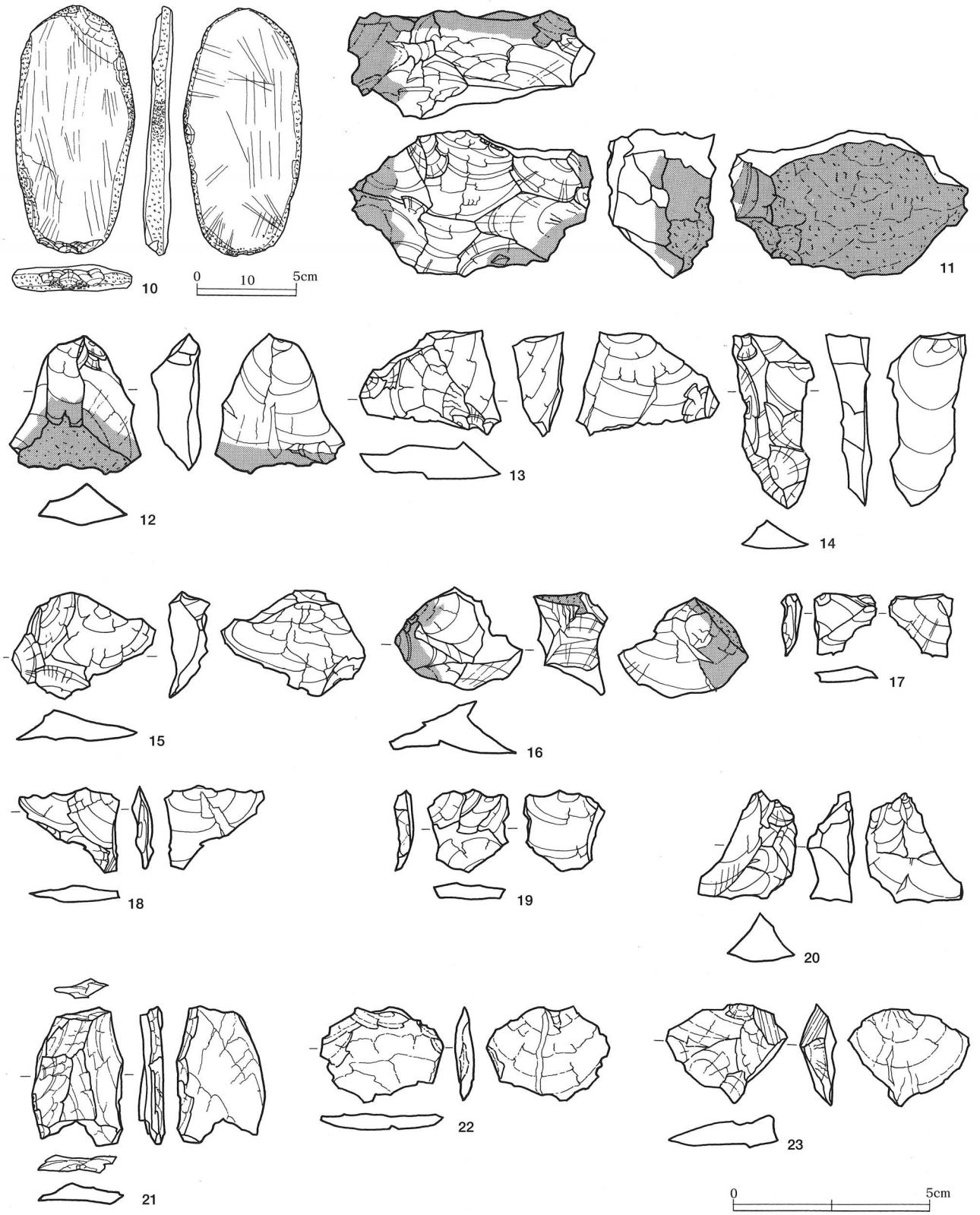


写真22　第３号住居址出土遺物



網点は石灰質部分

第21図　第3号住居址出土遺物

ており、北東側の貼り床上には、褐色土と暗褐色土と白色粘土を斑上に混じえた竈の袖が部分的に残っていた。

覆土と遺物の出土状態　覆土は床面全体を覆う褐色系の２層と、その上位の黒褐色土層の１層に大きく分けられる。２層は混じる土の違いや量によって更に、床面上壁際に堆積する暗褐色の２ｂ層、中央部床面上と２ｂ層を覆う明褐色土の2a-2層、その上位の暗褐色土の2a-1層に分層できた。残存していた竈袖北東側、竈内と思われる部分には、Ａ－Ｂ－Ｃ土層断面図に示したように、３～５層とした、白色粘土粒子や砂粒、焼土・炭化物粒子を含んだ土層が堆積していた。Ｐ１には2a-1層、2a-2層が床面から連続して落ち込んでおり、Ｐ２、Ｐ３の上部にも2a-2層と同質なａとした覆土が認められた。一方、周溝や床溝内の覆土は、床面上覆土とは異なるロームブロックと褐色土が混じった暗黄褐色土であった。

Ｐ１の底面直上からは**1**，**2**の土師器がひびは入りながらも原形を保った状態で検出されている。また、**1**には床面直上出土の、**2**には２層出土の小破片が接合している。竈内と思われる個所の壁際、周溝覆土の６層上面からは**4**の土師器が出土している。

玉随製の石器については、**11**の石核が攪乱内から、剥片は２層及び攪乱内から、砕片は１，２層から検出された。また、ペグマタイト製の剥片・砕片も１，２層及び攪乱内からの出土である。両石材の石器とも散漫な分布状態で検出されている。

出土遺物　本住居址からは、土師器片162点、弥生土器片128点、球状土錘４点、玉随製の石核１点、剥片８点、砕片４点、ペグマタイト製の剥片２点、砕片13点、チャート製の剥片１点、砕片２点、滑石製遺物１点が検出されている。

1～5は土師器で、**1～4**が甕形土器、**5**は大型の椀形土器であろうか。**6～9**は球状土錘であり、**7**の外面には棒状物質の圧痕がみられる。また、**9**は焼成不良で脆く、取り上げ時に３つに分割破損してしまったものであるが、その破損面の観察により、穿孔もしくは穿孔後の調整のために施されたと思われる、断面が丸い棒状工具による刺突痕が３単位確認できた。３つの内の１つは孔の途中で止まっている。

10は頁岩製の楕円形の扁平礫を素材にした敲石で、全側面に敲打痕がみられ、表裏面は磨滅し、擦痕も確認できる。長軸方向の端部には細かい剥離痕が観察されるが、刃部として作出されたものか、使用時の敲打によって生じたものかは判然としない。この剥離部と長軸と平行する一側面の中央部は特に敲打痕が密にみられる。

11～19は同一母岩と思われる玉随製の石器である。この石材は玉随のまわりに石灰質物質が付着しているもので、図中網点が掛かっている部分が乳白色をした石灰質部であり、半透明の白・灰・深緑・赤茶色が混在した玉随部との境界は割と明瞭に区別できる。

11は石核で、裏面に石灰質部の自然面を残し、複数の剥離面からなる打面が設けられている。剥離は打面方向からだけではなく、周縁の各方向から行われており、亀甲状を呈する。**12～15**は主要剥離面がほぼ残っている剥片で、**12**，**14**が縦長、**13**，**15**が横長のものである。**12**には自然面を残す石灰質部がみられる。**16～19**は折れ面を有する剥片で、**17**，**18**は一側縁が、**19**は両側縁が折れ面になっている。これらの剥片の背面は、石核の剥離作業面と同様、剥離の方向が異なる複数の剥離面から構成されている。図化はしなかったが、この他同一母岩の砕片４点が出土している。

20は赤色をしたチャート製の剥片であり、他に灰色のチャート製砕片が２点出土している。**22**，**23**はペグマタイトの石英質部製の横長剥片で、一側縁が折れ面になっている。この他13点の同石材の砕片が出土している。これらは節理面や折れ面を主体に構成された小石片で、主要剥離面がほとんど残っていないか、把握できないものである。**21**は滑石製遺物で板状の剥片を素材としたもので、周縁は複数の折れ面で構成されている。

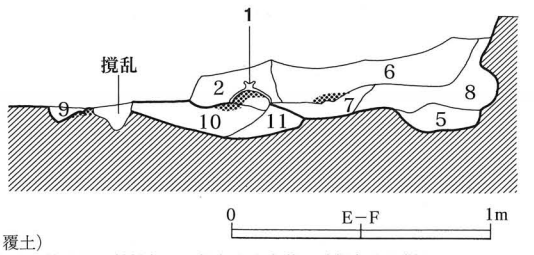
第４号住居址

位置　トレンチ調査区のほぼ中央に位置する。当初トレンチによって一部が確認されたもので、遺構の範囲だけトレンチを拡張して調査にあたった。遺構確認面において、他のトレンチと同様多数の攪乱が認められたが、幸いにもその多くは住居址覆土の下部までは及んでいなかった。床面まで達していた攪乱は、南東隅を壊していた大規模な攪乱と、竈手前の床面を掘り抜いていた長径1.3ｍの攪乱の２ヶ所である。

規模と形態　南北辺6.3ｍ、東西辺6.5ｍの方形の平面

第4号住居址土層説明

1層：暗褐色土層　締まり・粘性やや無し。暗褐色土主体。ローム粒子を多く含み、焼土・炭化物粒子も含む。
2層：褐色土層　締まり・粘性やや有り。褐色土を主体に暗褐色土が混じる。ロームブロック（径10mm）を少量含み、ローム・焼土・炭化物粒子を含む。竈周辺では砂・白色粘土粒子を含む。
3層：赤褐色土層　締まり・粘性やや無し。褐色土と暗褐色土と焼土が混じる。焼土粒子を含む。
4層：暗褐色土層　締まり・粘性やや有り。暗褐色土を主体にロームが混じる。炭化物粒子をやや多く含み、部分的に炭化物・黒褐色土が集中。
5層：暗黄褐色土層　締まりやや有り、粘性有り。ロームと褐色土が斑状（径10～20mm）に混じる。ハードロームブロック（径20mm）、ローム粒子を少量含む。周溝・床溝覆土。
6層：暗灰褐色土層　締まり・粘性有り。褐色土と白色粘土が斑状（径10～20mm）に混じる。ローム粒子を含み、焼土・炭化物粒子も少量含む。竈天井材。
7層：暗褐色土層　締まり・粘性やや有り。暗褐色土を主体に褐色土が混じる。ローム粒子を多く含み、焼土・炭化物粒子を少量含む。
8層：暗褐色土層　7層と同質だが、ローム粒子が少なく暗い色調。
9層：黒褐色土層　締まり・粘性無し。均質な黒褐色土にローム粒子を多く含む。焼土・炭化物粒子を少量含む。
10層：褐色土層　締まり・粘性やや無し。褐色土に多量のロームブロック（最大径15mm）と焼土粒子が混じる。炭化物粒子も含む。
11層：褐色土層　締まり・粘性やや無し。褐色土に多量のロームブロック（最大径15mm）とローム粒子が混じる。焼土・炭化物粒子も含む。
12層：暗黄褐色土層　締まり・粘性有り。褐色土にハードロームブロック（最大径50mm）、ローム粒子を多量に混じる。貼床土。



（ピット覆土）
a：褐色土　締まり・粘性無し。褐色土を主体に暗褐色土が混じる。ロームブロック（最大径20mm）、ローム粒子をやや多く含み、焼土粒子が僅かにみられる。2層土に近似。
b：暗黄褐色土　締まり・粘性無し。褐色土に多量のロームブロック（最大径10mm）、ローム粒子が混じる。
c：褐色土　締まり・粘性やや無し。暗褐色土と褐色土とローム粒子が混じる。焼土・炭化物粒子を少量含む。
d：暗褐色土　締まり・粘性やや無し。暗褐色土を主体に褐色土が混じる。ローム・焼土・炭化物粒子を含む。
e：明褐色土　締まり・粘性やや無し。褐色土を主体にローム、ローム粒子が混じる。
f：暗黄褐色土　締まり・粘性無し。ロームであるが、地山より締まりが無い。
（竈袖材）
白褐色土　締まり・粘性有り。砂粒を含んだ白色粘土と褐色土が斑状（径10～15mm）に混じる。ローム粒子を少量含む。

第22図　第4号住居址実測図

写真23　第４号住居址全景

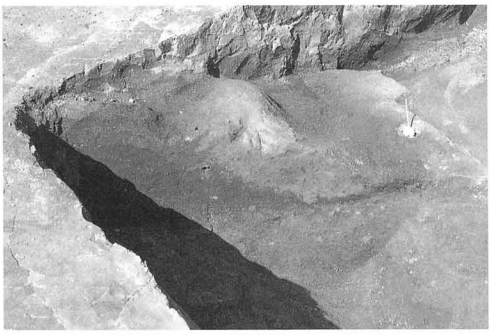


写真26　北西隅３，４層

写真27　北東隅貼床焼け込み

写真24　竈周辺

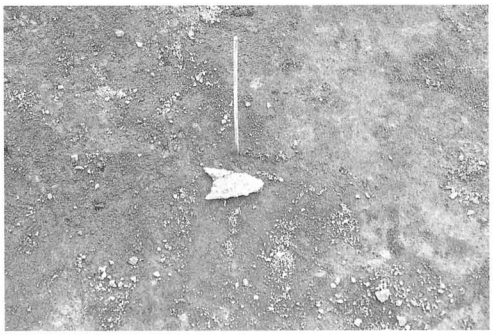


写真28　鉄鏃出土状況

写真25　床溝と壁ピット（北西部）

写真29　滑石製遺物（56）・刀子出土状況

写真30　炭化材Ａ・Ｂ検出状況

写真31　炭化材Ｃ検出状況

写真32　炭化材Ｄ検出状況

形で、壁の高さは40cmを測る。床面は地山ローム層と、12層とした褐色土にハードロームブロックが多量に混じった暗黄褐色土の貼床部からなる。住居址の四隅に存在する貼床の掘り方は、中央側から隅に向かって緩やかに傾斜する形態で、壁付近では床面から約10cmの深さになる。床面壁際には深さ約10cmの周溝が全周巡っており、その周溝から延びる深さ10～20cmの床溝が7ヶ所存在する。床溝は東側、西側に2ヶ所づつ、北側に2ヶ所、南側に1ヶ所設けられており、東西両側のものはちょうど貼床部を区切る形になっている。また、これら周溝・床溝の覆土は、貼床土を切る形で堆積しており、周溝・床溝の掘り方と貼床の掘り方は段差無く連続する。

床面上で検出されたピットは計5ヶ所で、そのうちの貼床部に設けられたＰ１～４は主柱穴と捉えられる。床面からの深さはＰ１が100cm、Ｐ２が104cm、Ｐ３が99cm、Ｐ４が122cm。Ｐ５としたピットは南壁際の中央部に位置する長径60cm、深さ19cmの皿状のものである。また、壁を穿ったピットが、東壁に1ヶ所、西壁2ヶ所、北壁に3ヶ所検出された。いずれもほぼ直立する壁面から下方斜めに掘り込まれており、東西両壁北寄りのものは床溝の延長上に、北壁の2ヶ所は、同壁やや東寄りに設けられた竈の両側に位置する。

竈の残存していた袖は、白色粘土と褐色土が斑状に混じった土で築かれており、壁から袖先端部までは1.1ｍを測る。また、壁際では周溝の覆土上に袖が築かれている。一方、燃焼部の下には南北方向86cm、東西方向72cm、深さ10cmの皿状の掘り方が存在する。その掘り方内にはロームブロックと焼土・炭化物粒子を含んだ10・11層が堆積し、火床面や袖先端部はその上面に設けられている。なお、掘り方の底面は赤化は認められないものの、被熱のためかボロボロに劣化しており、古い火床面であった可能性がある。その場合、竈は作り替えられていることになる。火床面は掘り方内の10層上面とさらに南側の地山ローム層が、長さ88cmにわたって焼け込んだものである。

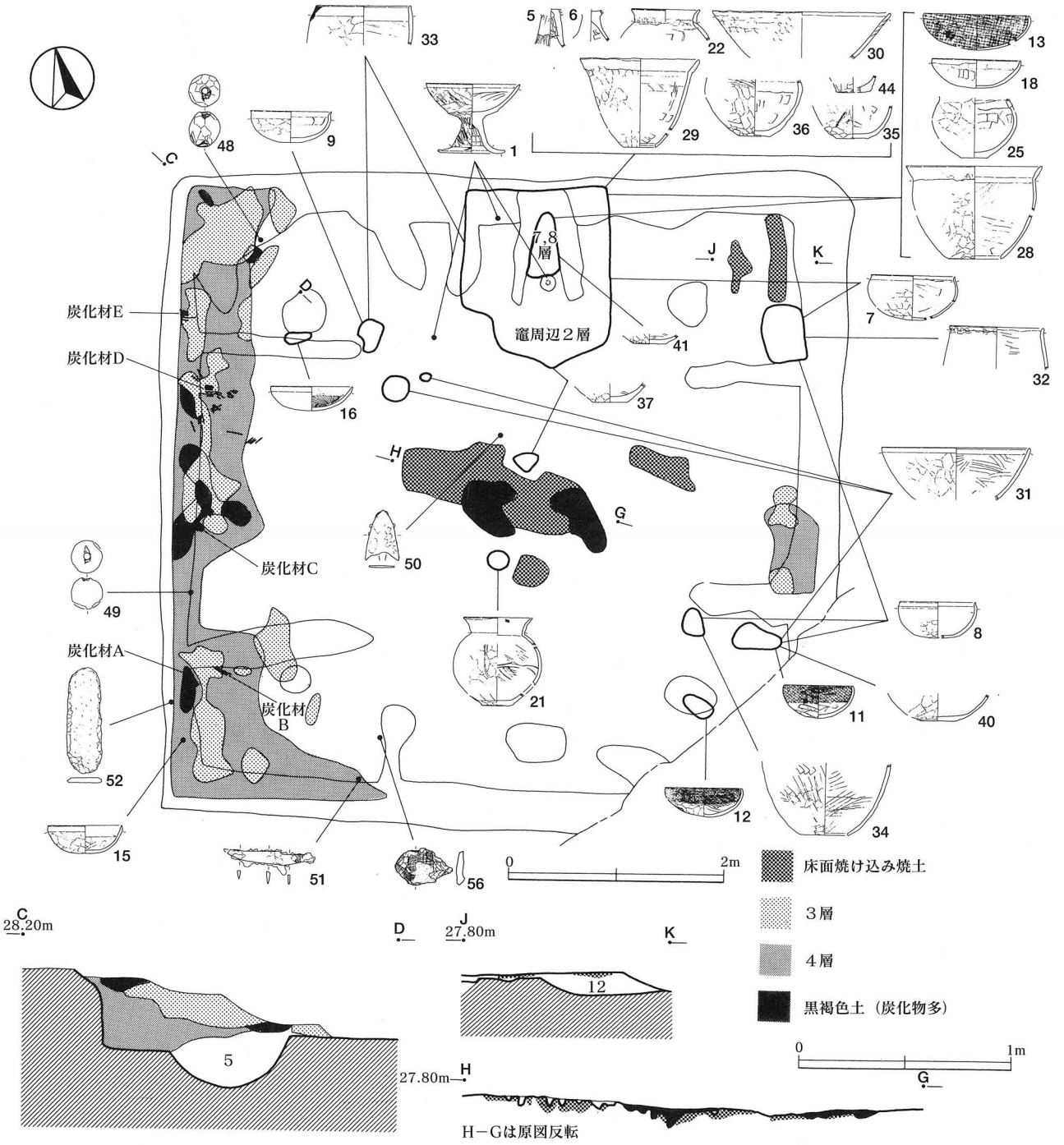
覆土と遺物の出土状態　床面上と壁際を2層とした褐色土層が覆い、その上位には1層とした黒褐色土層が堆積する。東西壁際の2層下床面上には、3層とした焼土層と4層とした炭化物粒子を含んだ暗褐色土層が存在し、両層中には炭化材や炭化物粒子を多く含む黒褐色土がブロック状に存在する。また、3層と4層が重なるところでは、4層が下位になっている。一方、床面が焼け込んでいる箇所が、中央部に3ヶ所、北東隅に2ヶ所認められる。中央部の1ヶ所は長さ2.1ｍ、幅75cmにわたって、ローム層の床面が焼け込んだものである。断ち割り断面によって、振幅5～8cmの細かい凹凸にローム層上面が劣化し、その凸部が赤化している状況と、凹部に炭化物を多く含む黒褐色土が部分的に入り込んでいる状況が観察された。北東隅の2ヶ所は燃焼材の形態を反映したものか、貼床土である12層上面が細長い形に（幅18cm程）赤化している。以上の覆土の状況は住居廃棄以後に燃焼現象があったことを物語る。

周溝と床溝の覆土は5層としたロームと褐色土が斑状に混じった暗黄褐色土で、3，4層が上に堆積する箇所でも、焼土・炭化物の混入はみられない。主柱穴についてはＰ１，２で断ち割り調査を実施したが、Ｐ１では貼床土12層がピット覆土の一部を覆っている状況が確認され、柱を立ててから貼床土が貼られたことが理解される。一方、ピット覆土の最上層であるａやｃには焼土粒子が含まれており、柱は抜かれたものと思われる。

竈火床面の煙道部側端には、**1**の高杯形土器の杯部を逆位に据えた支脚が残されていた。この支脚は杯部内に袖材と同質の粘質土を充填することによって固定されており、充填された粘質土の火床面側は被熱のため赤化していた。また、焚き口手前の火床面直上には9層とした均質な黒褐色土層が薄く堆積していた。竈内の燃焼部から沿道部にかけては7，8層とした暗褐色土層が堆積し、その上位には崩落した天材と思われる6層とした褐色土と白色粘土が斑状に混じった土層がのっていた。竈は2層に覆われていたが、竈周辺の2層中には竈構築材が供給源と思われる白色粘土粒子や砂粒が含まれており、この竈周辺2層と竈内の7，8層中から多くの土師器破片が集中して検出されている。

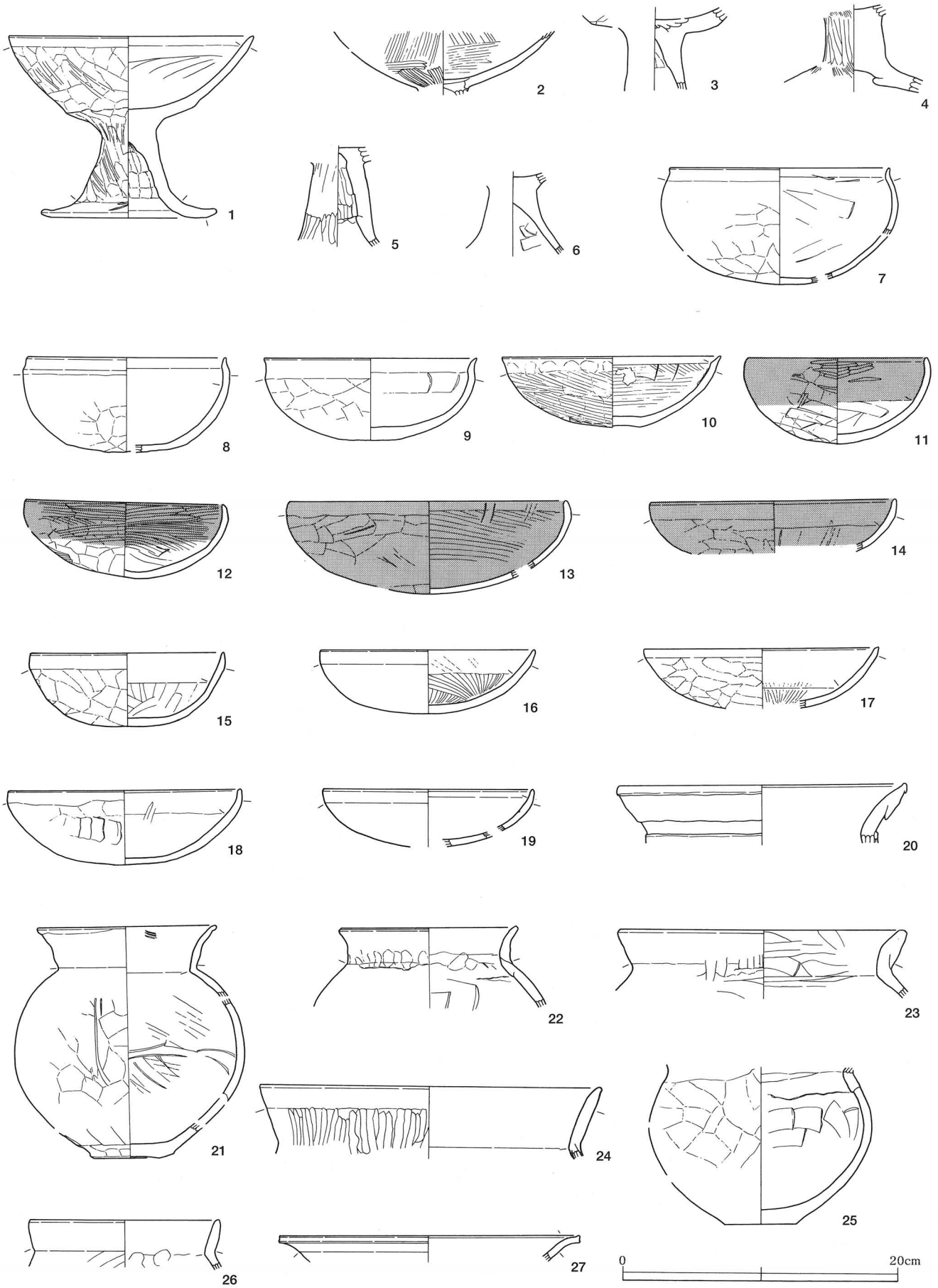
出土遺物（第24～26図）　土師器片1,408点、須恵器片3点、弥生土器片1点、球状土錘2点、鉄鏃1点、刀子1点、板状石製品片7点、滑石製遺物13点が検出された。

1～44は土師器である。**1～6**は高杯形土器で、**1**は竈の支脚に転用されていた杯部と、竈内7層、竈周辺

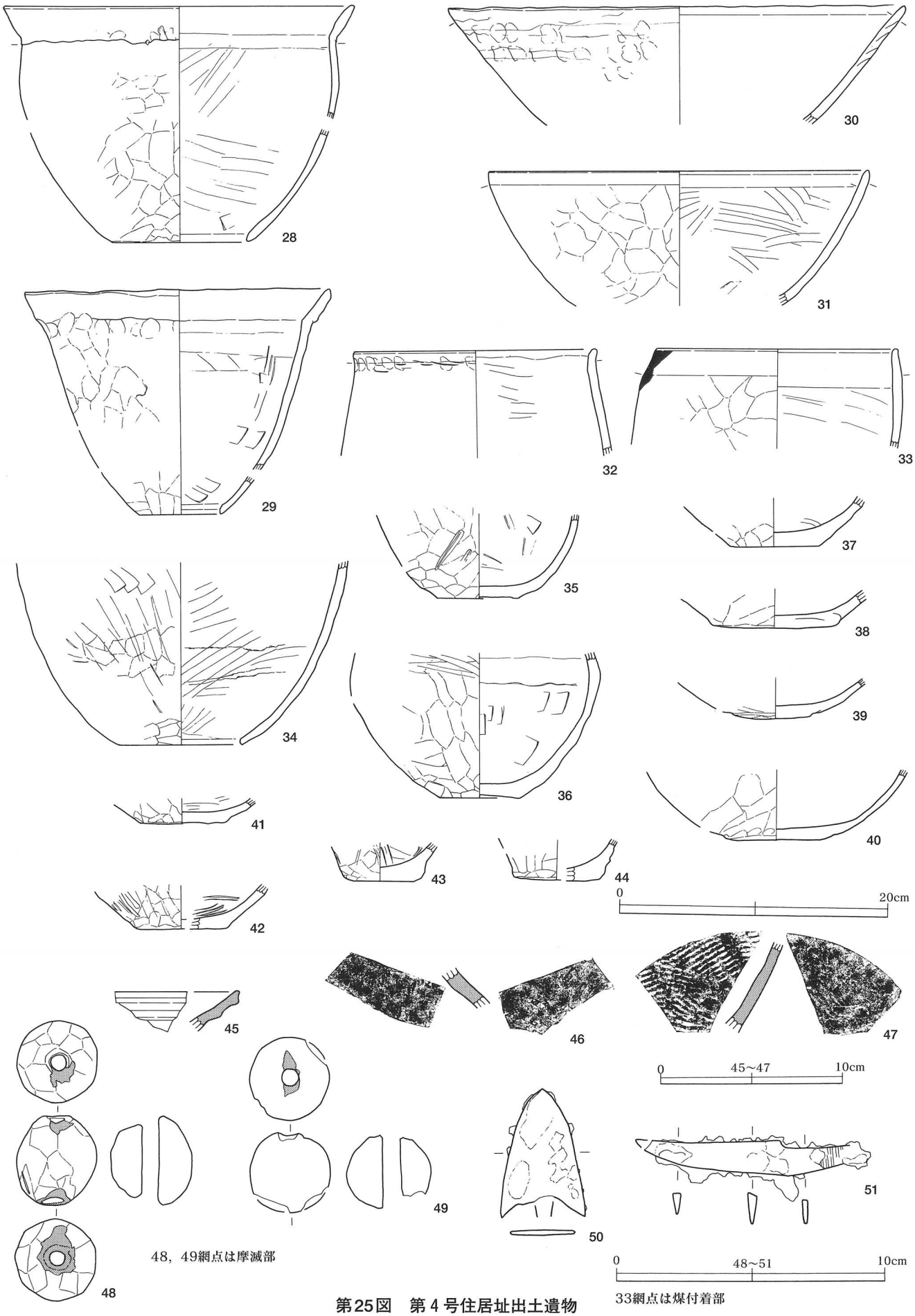


第23図　第４号住居址遺物出土状況図

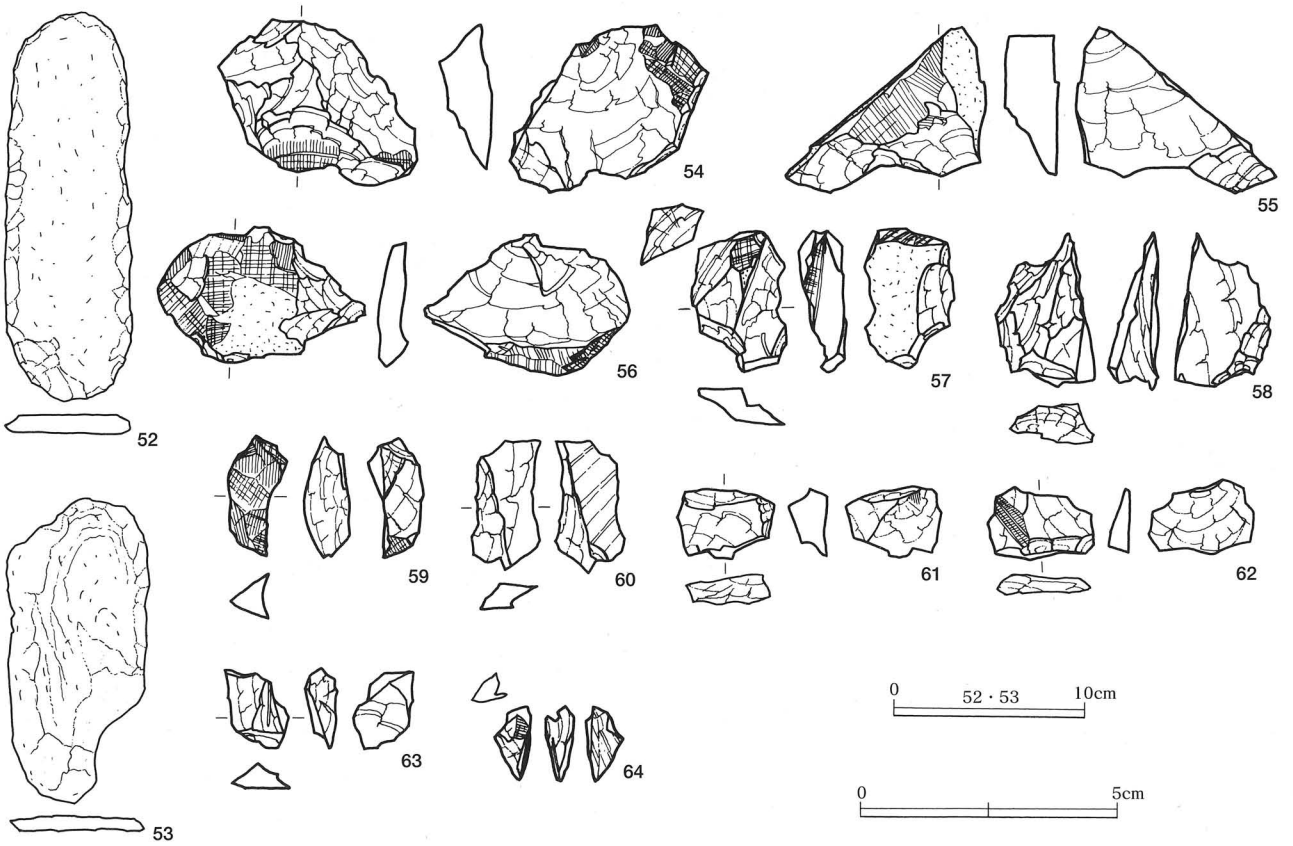
２層及び床面直上から出土した脚部が接合し、杯部の内面は被熱による剥落が顕著である。**7**，**8**は椀形土器、**9**～**19**は杯形土器で、**7**～**10**は口唇部内面に稜を持つ。**11**～**14**の内外面には赤色塗彩が施されている。**20**は複合口縁の壺形土器。**21**～**27**は甕形土器。**27**の口縁部破片はヨコナデによって、口唇部外面が面取り状に、内面が若干つまみ上げ状に整形されている。この**27**は表面は橙褐色に焼成されているが内部は白っぽく、また胎土に細かい雲母粒子が目立つ点で、他の個体とは趣を異にする。須恵器の製作技法を一部模倣した土器であろうか。**28**，**29**，**34**は甑形土器で、孔はいずれも底が抜けた形の単孔である。**29**の同一個体と認定した破片の中には、第５号住居址覆土から出土した底部破片１点が含まれる。**30**～**33**は甑形土器と考えられる土器で、**30**は輪積



第24図　第４号住居址出土遺物



第25図　第4号住居址出土遺物



第26図　第４号住居址出土遺物

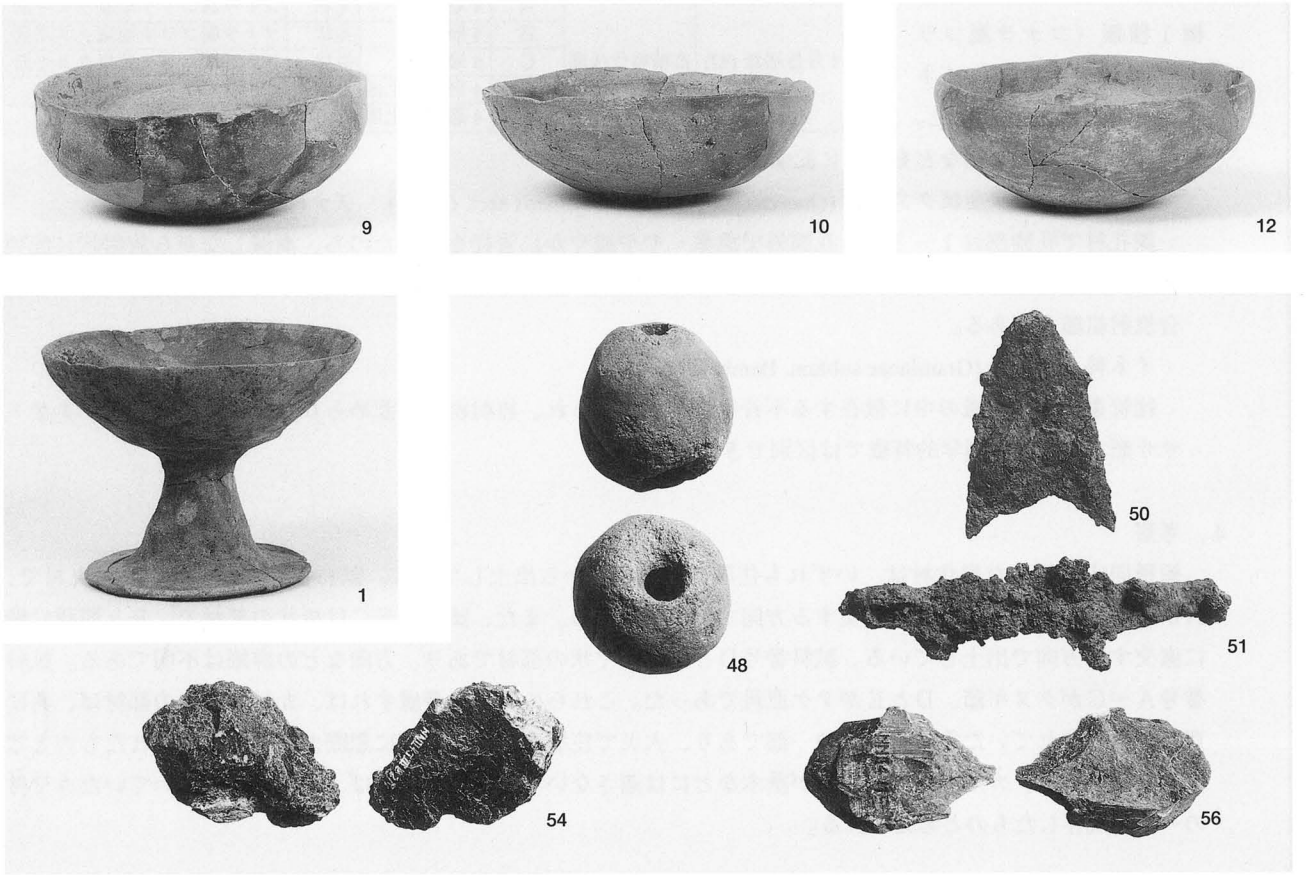


写真33　第４号住居址出土遺物

野中遺跡第２次調査第４号住居址から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

野中遺跡第２次調査で検出された第４号住居址は、出土遺物などから古墳時代後期の住居跡と考えられている。壁際床面上に堆積していた４層は、ロームを斑状に含む土層で、部分的に炭化物や炭化物起の黒褐色土が集中して見られ、その上位には焼土を多く含む３層が堆積している。これらの所見から、第４号住居址は、いわゆる焼失住居跡であり、炭化物のうち炭化材は、住居構築材などの一部が炭化・残存したものと考えられている。

本報告では、住居構築材に由来すると考えられる炭化材について樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

１．試料

試料は、第４号住居址から出土した炭化材５点（資料番号Ａ～Ｅ）である。このうち、２点（試料番号Ｄ・Ｅ）はカヤ状の炭化物である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表１に記した。

２．方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

３．結果

樹種同定結果を表１に示す。炭化材は落葉広葉樹１種類（コナラ属コラナ亜属クヌギ節）とイネ科タケ亜科に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

表１ 樹種同定結果

出土遺構	時代時期	試料名	出土層位	形状	樹種
第４号住居址 (4J)	古墳時代後期	A	４層上面	丸状	コナラ属コラナ亜属クヌギ節
		B	４層上面	丸状	コナラ属コラナ亜属クヌギ節
		C	４層中面	板状	コナラ属コラナ亜属クヌギ節
		D	４層中～上面	カヤ状	イネ科タケ亜科
		E	４層中～上面	カヤ状	イネ科タケ亜科

・コナラ属コラナ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*)　ブナ科

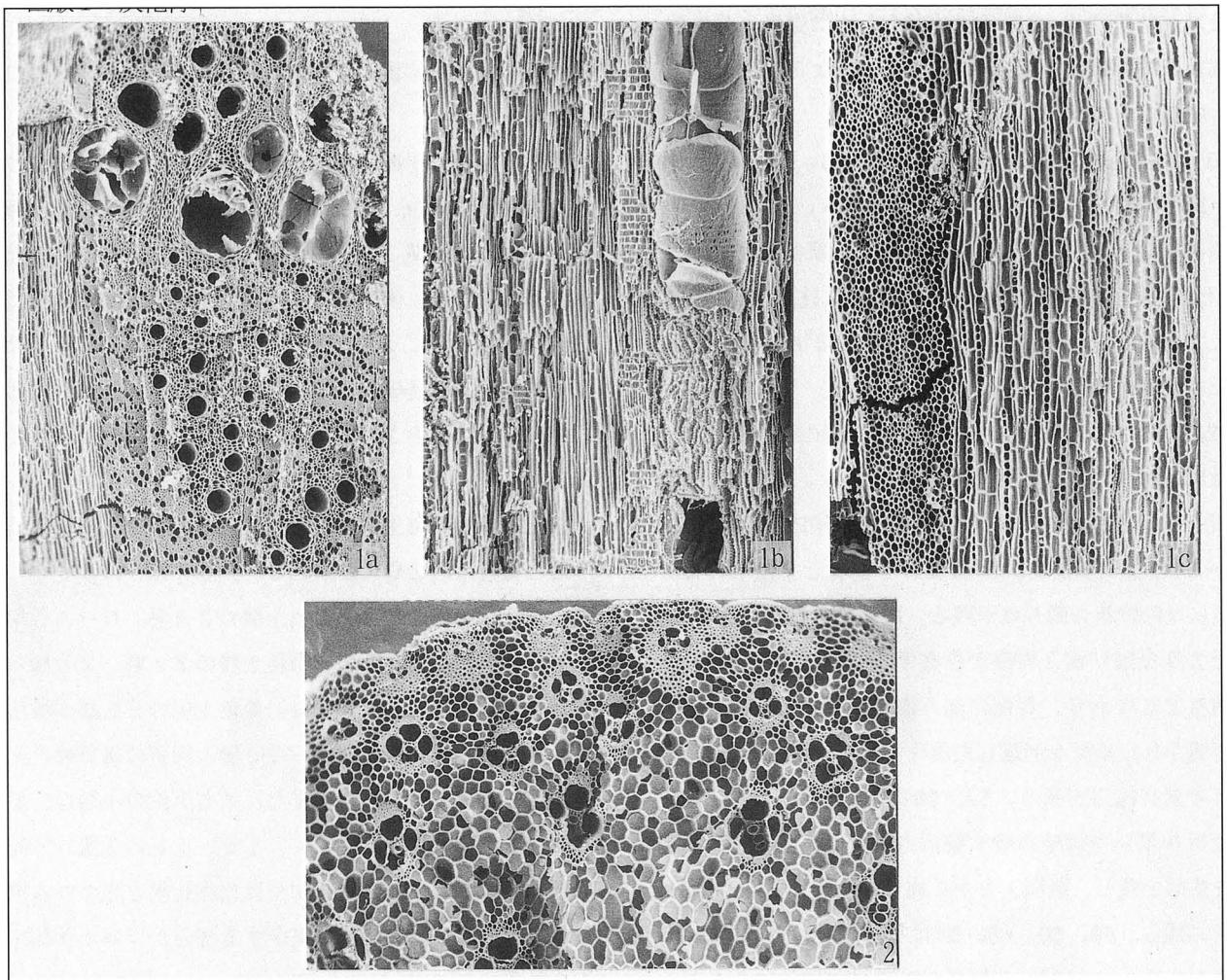
環孔材で孔圏部は１～３列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～２０細胞高のものと複合放射組織とがある。

・イネ科タケ亜科 (Gramineae subfam. Bambusoideae)

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められ、放射組織は認められない。タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

４．考察

樹種同定を行った炭化材は、いずれも住居西側の壁際から出土している。試料番号ＡとＢは、共に丸材で、Ａが壁とほぼ平行、Ｂが壁と直交する方向で出土している。また、試料番号Ｃは板状の部材で、Ｂと同様に壁に直交する方向で出土している。試料番号ＤとＥはカヤ状の部材であり、方向などの詳細は不明である。試料番号Ａ～Ｃがクヌギ節、ＤとＥがタケ亜科であった。これらの結果を考慮すれば、丸材と板状の部材は、共に窓際で利用されていた垂木や板状の一部であり、火災で住居が崩壊した際に窓際から住居内に倒れたものと考えられる。一方、カヤ材はタケ亜科が垂木などには適さないことを考慮すれば、屋根などを葺いていたカヤ材の一部が残存したものと考えられる。



1．コナラ属コナラ亜属クヌギ節（試料番号B）
2．イネ科タケ亜科（試料番号D）
a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a, 2
200 μm：b, c

図版1　炭化材

関東地方では、これまでにも多くの遺跡で住居構築材について樹種同定が行なわれている（高橋・植木, 1994）。それらの結果を見ると、古墳時代ではクヌギ節・コナラ節が圧倒的に多く利用されており、今回の結果とも一致する。この結果から、第4号住居址では、火災とその後の埋積過程で消失した部材を含めて、クヌギ節を主とする種類構成であったと推定される。

住居構築材に確認された種類は、その遺跡周辺で行われた古植生の調査結果とも一致することが多く、基本的には遺跡周辺で入手可能な種類を利用していたと考えられている（高橋・植木, 1994）。このことから、本遺跡周辺には落葉広葉樹のクヌギ節が分布していた可能性が高い。

また、茨城県や千葉県では、古墳時代住居構築材として沿海地でアカガシ亜属などの常緑広葉樹が多く、内陸で落葉広葉樹が多く利用される傾向がある（高橋・植木, 1994）。これは、沿海地と内陸部で植生が異なっていたことを示す可能性がある。今後さらに多くの資料を蓄積し、詳細を明らかにした。

引用文献

高橋 敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択. PALYNO, 2, p.5-18, パリノ・サーヴェイ株式会社

み痕を残す粗いつくりである。**33**の口縁部外面の一部には煤が付着する。**35～42**は壺もしくは甕形土器の胴下部及び底部破片と思われる。**43，44**はミニチュア土器の底部であろうか。

45～47は須恵器甕形土器の破片である。**48，49**は球状土錘でいずれも開孔部が摩滅している。特に、**48**は両開孔部とも同一方向に偏って著しく摩滅している。**50**は短茎長三角形鏃に分類される鉄鏃（註）。茎部は欠損している。**51**は鉄製刀子で、柄部に紐状のものを巻いた木質部が残る。

52，53は点紋粘板岩ホルンフェルス製の板状製品で、周縁は剥離または敲打で整形されている。この他に**53**と同一母岩と思われる板状の破片が５点出土している。**54～64**は滑石製遺物。**54**は剥片を素材としたもので、背面には階段状の削り痕が残る。腹面にも打点付近に擦れたような削り痕と刃痕が存在する。**55**も厚手の剥片を素材としており、背面に削り面がみられる。**56**は削りが施された素材を剥離した剥片であり、剥片末端にはもとの素材縁辺が残る。**57，58**は剥片を素材とし、周囲は折り取りや調整剥離で整形されている。**57**は背面に自然面を残し、腹面上方から施された削り痕と刃痕が段状に残る。**59，60，63，64**は折り取られた調整剥片と思われる。**59**は削りが施された素材の縁辺にあたり、**63，64**には折れ面打点側の稜付近に刃痕が残る。**61，62**は小型の剥片の末端に折れ面が認められるもので、**61**の腹面打点付近には擦れたような削り痕が残る。**62**の背面には階段状になった削り痕と刃痕が存在するが、工具は背面の上方から入っている。

炭化材について　西壁際の４層中～４層上面にかけて炭化材が検出された。いずれも小片であったが、その内遺存状態の良いものを選び、Ａ～Ｅと名付けて取り上げ樹種同定を行った。Ａ，Ｂは丸材で、Ａは径20mm、Ｂは径20mm、長さ150mmを計る。Ｃは板材と思われ、Ｄ，Ｅはカヤ状の炭化材である。分析の結果、Ａ，Ｂ，Ｃはコナラ属コナラ亜属クヌギ節、Ｄ，Ｅはイネ科タケ亜科に同定された。詳細については、38頁に掲載したパリノ・サーヴェイ株式会社の報告を参照されたい。

（註）鉄鏃の分類名は、霞ヶ浦町郷土資料館の千葉隆司氏に御教示いただいた。

第６号住居址

位置　③区に位置する。北西側の大部分が調査区外にあたる。

規模と形態　平面は方形をしていると思われ、調査された南東辺は6.3ｍを測る。壁の高さは70cm。床面は地山ローム層で構成され、壁に沿って深さ10cm未満の周溝が巡る。また、南西部寄りの周溝からは床溝が中央部に延びている。ピットは２ヶ所検出されている。Ｐ１は長径104cm、短径67cm、深さ53cmの隅丸長方形の貯蔵穴状のもので、Ｐ２は径22cm、深さ28cmの小ピットである。

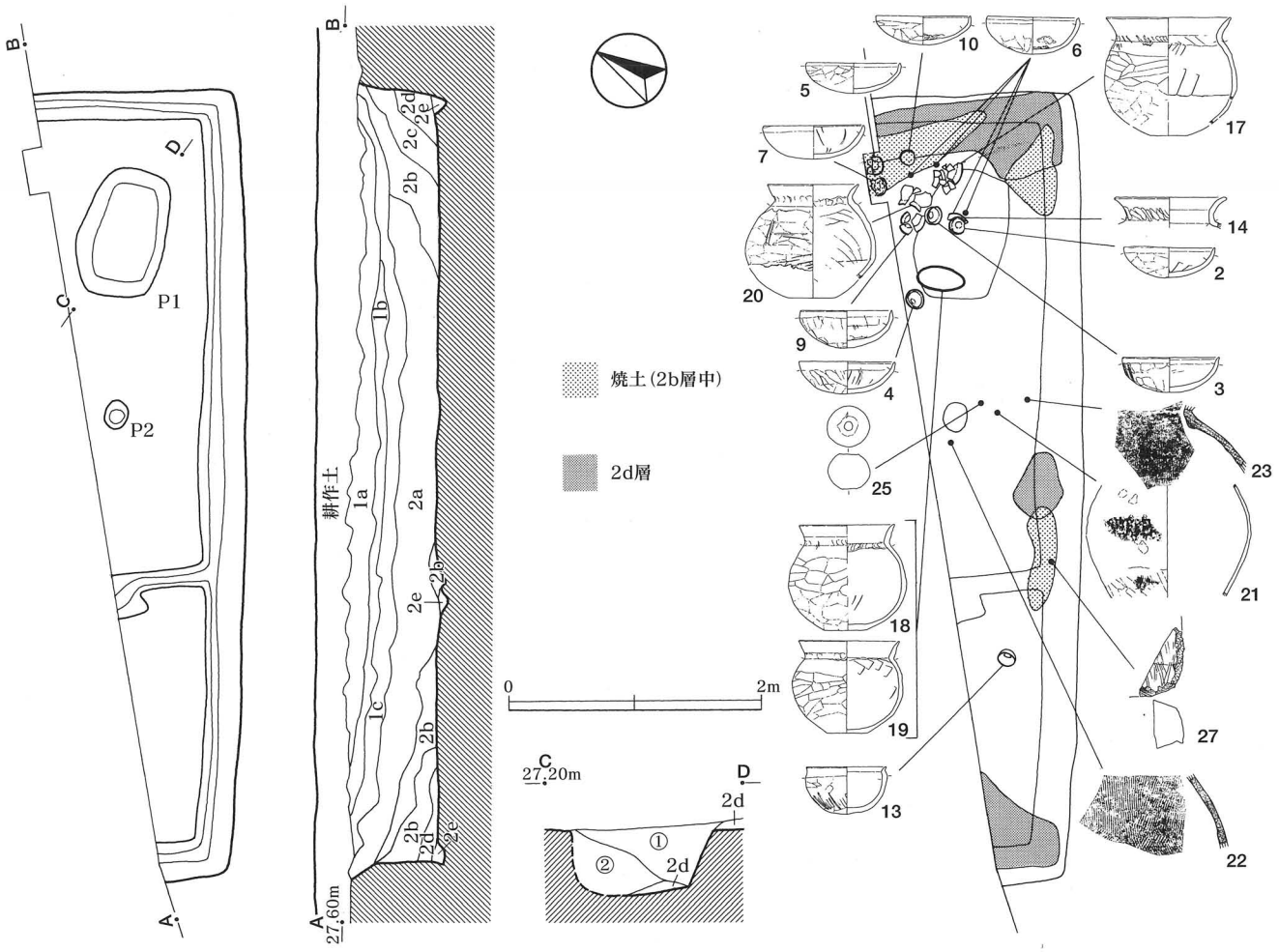
覆土と遺物の出土状態　覆土は大きく黒・暗褐色系の１層と褐色系の２層に分かれる。壁際には、床面上から順に炭化物を多く含む暗褐色土層の２ｄ層、ロームと褐色土が斑状に混じった暗黄褐色土層の２ｃ層、２ｃ層と同質だがロームの割合が少ない褐色土層の２ｂ層が堆積し、２ｂ層と中央部床面を、２ｃ層と同質の暗黄褐色土層の２ａ層が覆っていた。また、その上位の１層は、混じる土質の違いによって１ａ、１ｂ、１ｃの３層に分層される。２ｂ層中には炭化物や炭化物起源と思われる黒褐色土、それに焼土粒子が集中する部分がブロック状にみられる。

Ｐ１の底面上には２ｄ層が薄く存在し、その上を床面中央方向から流れ込むような形で、ロームを主体にした締まりの無い②層が堆積し、さらに上位には焼土・炭化物粒子を多く含むロームと褐色土が混じったやはり締まりの無い①層が覆っている。周溝、床溝では、床面上に堆積する覆土とは異なる、２ｅ層とした褐色土にハードロームブロックが混じった明褐色土が覆土となっていた。

Ｐ１①層からその北西側床面直上、及び２層にかけて、土師器の完形もしくは完形に近い杯形土器と、甕形土器の大型破片がが集中して検出された。**10**を除く杯形土器は口縁を上に向けており、つぶれて破砕していたものもあったものの、ほぼ原型を保った状態で出土している。

出土遺物（第28，29図）　土師器片356点、須恵器片６点、球状土錘１点、土器片利用研磨具１点、砥石１点、滑石製遺物６点が検出されている。

１～21は土師器。**１～12**は杯形土器である。**４**の内



第27図　第6号住居址実測図

第6号住居址土層説明

1a層：暗褐色土層　締まり・粘性やや有り。褐色土（下部に多い）と暗褐色土が混じる。ローム粒子も含む。
1b層：黒褐色土層　締まり・粘性有り。黒褐色土と暗褐色土、それに若干の褐色土が混じる。ローム粒子を含む。
1c層：暗褐色土層　締まり・粘性やや有り。黒褐色土と暗褐色土と褐色土が混じる。ローム粒子を含む。
2a層：暗黄褐色土層　締まりやや有り、粘性有り。ロームと褐色土が斑状（径5～50mm）に混じる。ハードロームブロック（径30mm）、粗いローム粒子を含む。
2b層：褐色土層　締まりやや有り、粘性有り。ロームと暗褐色土が斑状（径10～30mm）に混じる。ハードロームブロック（最大径20mm）、粗いローム粒子を含む。炭化物・黒褐色土・焼土粒子が集中する個所有り。
2c層：暗黄褐色土層　2a層と同質。
2d層：暗褐色土層　締まり・粘性やや有り。ロームと暗褐色土が混じる。炭化物を多く含み、部分的に黒褐色土がみられる。
2e層：明褐色土層　締まり・粘性有り。褐色土にハードロームブロック（最大径30mm）、ローム粒子を多く含む。周溝・床溝覆土。
（ピット覆土）
①層　明褐色土層　締まり・粘性無し。ロームと褐色土が混じる。ロームブロック（最大径10mm）、焼土・炭化物粒子を多く含む。2c層の二次堆積か?
②層　暗黄褐色土層　締まり・粘性無し。ロームを主体に若干の褐色土が混じる。焼土・炭化物粒子はほとんど含まない。

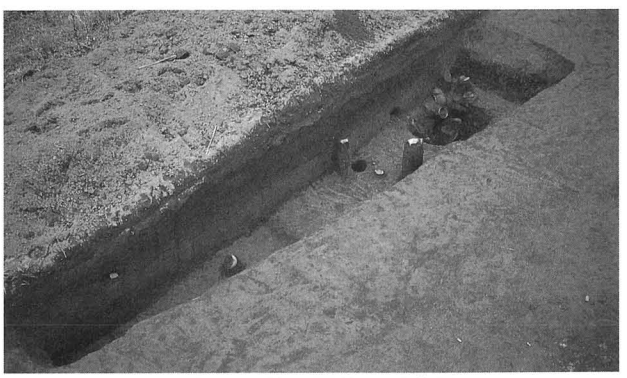
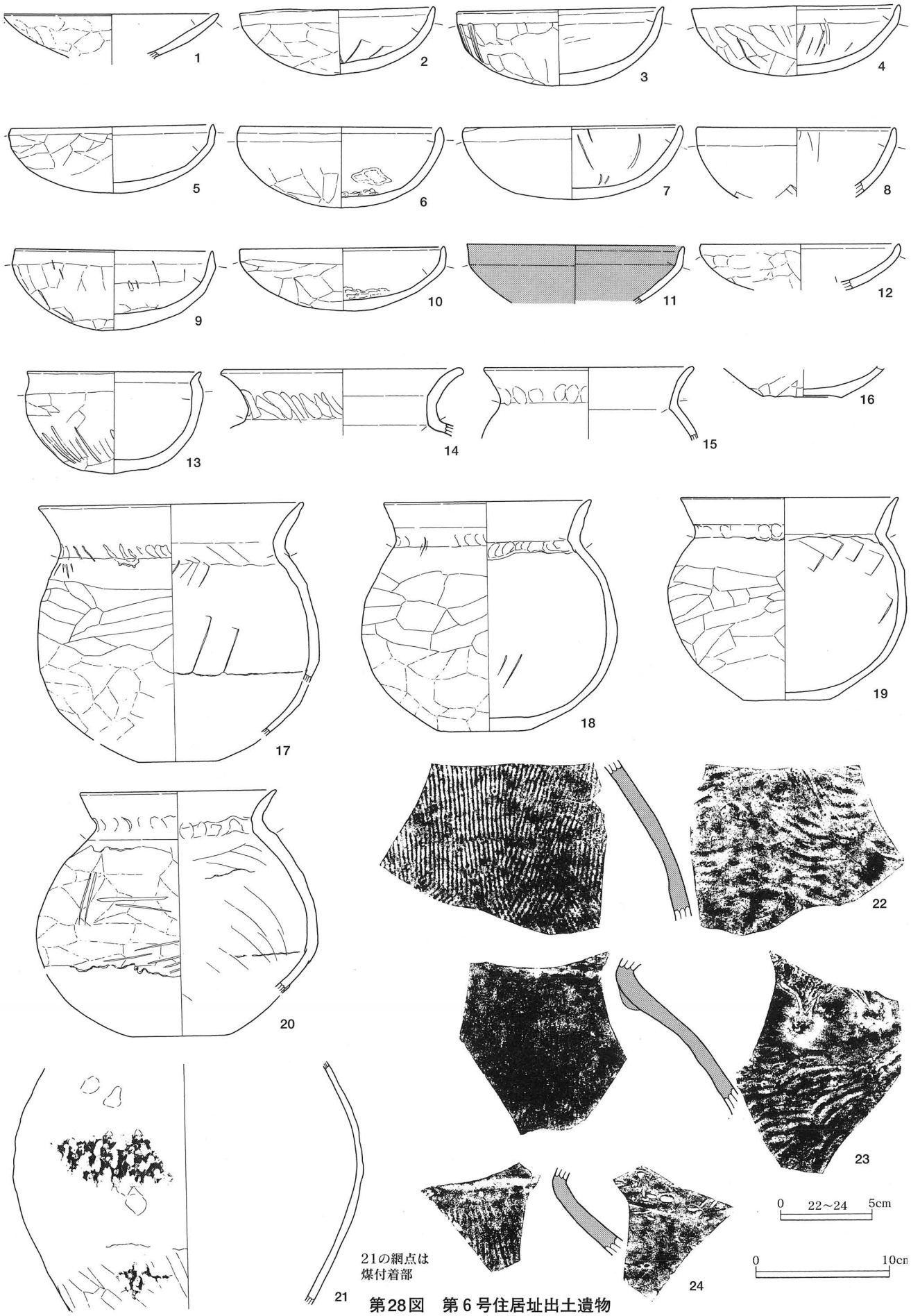
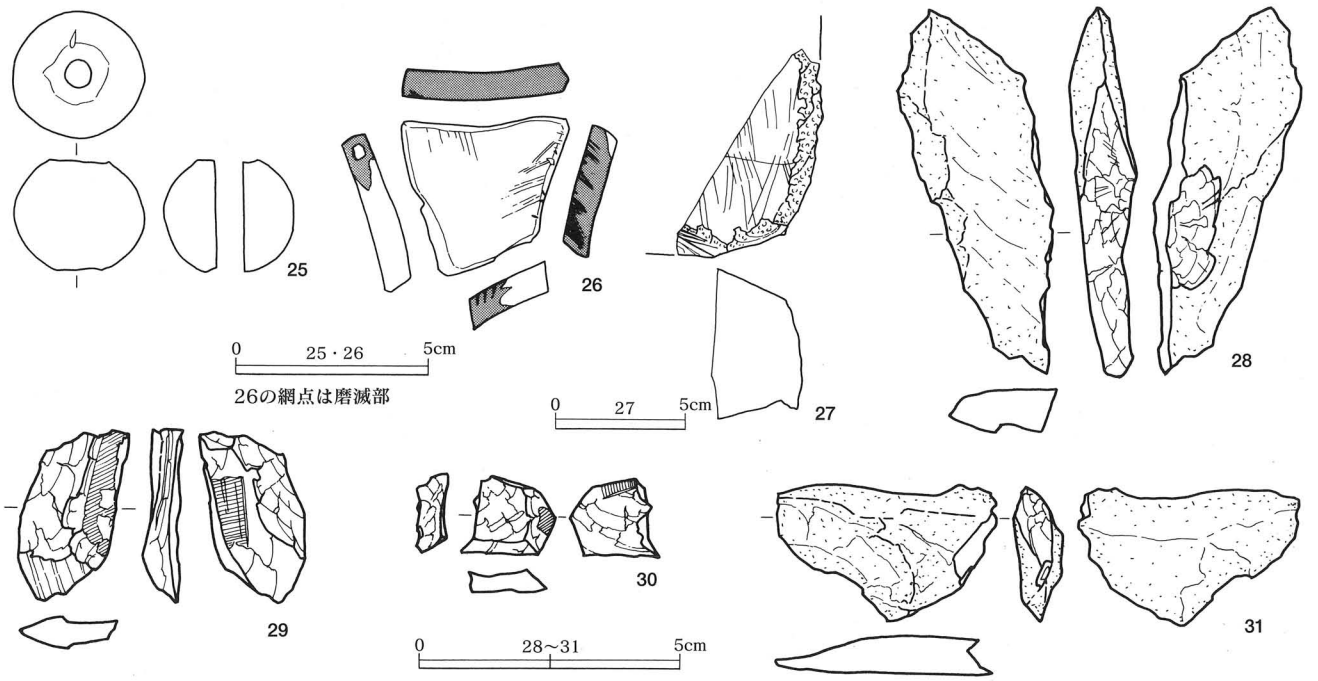


写真34　第6号住居址全景

写真35　第6号住居址P1付近土器出土状況



第28図　第6号住居址出土遺物



第29図　第6号住居址出土遺物

写真36　第6号住居址出土遺物

面には暗文状の磨き整形が部分的にみられる。**2**の口縁部外面の一部には煤の付着がみられ、**11**の内外面には赤色塗彩が施されている。**4**，**6**，**10**の内面は被熱により剥落が顕著で、**6**，**10**の内面には褐色の付着物がみられる。

14，**15**，**17～20**は甕形土器である。**14**は口唇部付近が強く外反するもの、**17～20**は口縁が直線的に開く形態である。**17～20**は肩部に撫で、胴中部以下に横方向の削り整形が施されている。底部付近や**20**の胴部には、削りの後撫でが加えられているが、部分的であり、削りの痕跡を良く残す。**16**は底部破片。**21**は甕形土器の胴部破片と思われ、胴部最大径付近と胴下部外面の一部に煤の付着が認められる。

25は球状土錘で、開孔部は削りにより面取りがなされている。**26**は土器片を利用した研磨具である。磨滅部は４面の破損断面にみられ、表面と破損断面の稜部には擦痕も観察できる。**27**は凝灰質砂岩製の砥石欠損品である。砥面は一面で、側面と裏面は剥離面上に敲打が施され整形されている。**28～31**は滑石製遺物。**28**，**31**は自然石が折り取られたもの。**29**，**30**は剥片を素材としたもので、一側縁が折れ面になっている。**29**の両面には、折れ面側から施された削り痕が認められ、削りの末端は段や刃痕で止まっている。**30**には腹面打点付近に削り痕が残る。この他滑石製の砕片２点が出土している。

第７号住居址

位置　③区に位置する。北西側約1/4が調査区外に入っており、その部分についてはトレンチによって遺構の範囲確認だけをおこなっている。また、住居址とほぼ重なるように風倒木痕が存在する。風倒木痕の方が古く、住居址床面の大部分には貼床が施されていた。

規模と形態　北西ー南東方向2.85ｍ、北東ー南西方向３ｍの隅丸方形の平面形をし、壁の高さは30cmである。南東壁際では地山ローム層もしくは風倒木痕上面がそのまま床面となっていたが、他の部分は貼床が施されていた。貼床の掘り方は地山ローム層や風倒木痕を床面から約10cm程さらに掘り下げたもので、８層とした褐色土とロームが斑状に混じった土が貼られていた。風倒木痕は貼床が施されていない南東壁際の床面上で、倒木と一緒に巻き込まれたと考えられる暗褐色土が半円形に巡る帯状に検出されたことによって確認されたものである。当初は住居址に伴う施設と考えていたが、炉址の断ち割り調査や貼床土の掘り下げによって、住居址中央に長径２ｍ以上、短径1.8ｍの範囲に広がる、住居構築前の風倒木痕であることが判明した。

炉址は床面中央やや南東寄りの所に存在する。炉址の部分には貼床が存在せず、風倒木痕のロームマウンド部上面が長径約40cmにわたって焼け込んでいた。焼け込み面は振幅約６cm程の凹凸状に劣化しており、その凸部が赤化していた。ピットや周溝等他の施設は検出されていない。

覆土と遺物の出土状態　床面上には６層とした暗褐色土層が覆い、中央部ではその上に黒褐色土層の３層と、６層と同質の暗褐色土層である１層が下から順に堆積している。一方、壁際には２，５，７層とした褐色土層や４層とした暗褐色土層がみられ、褐色、暗褐色が互層になるように堆積する。また、炉址とその周辺の床面直上には、９層とした多くのローム粒子や焼土粒子を含む黒褐色土層が、長径80cmの範囲にわたって薄く貼り付くようにみられる。南隅の７層中からは炭化材が、炉址北西側の床面直上からは炭化物の集中箇所が検出されている。

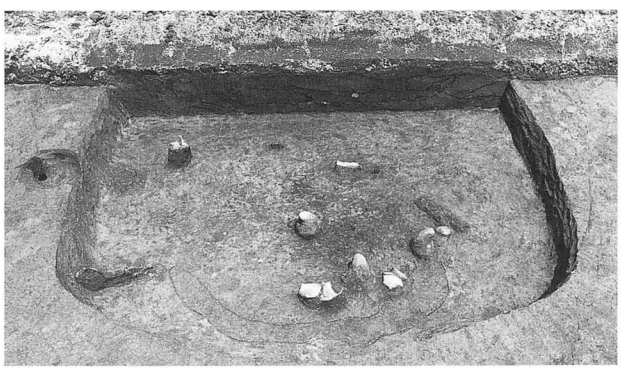


写真37　第７号住居址全景

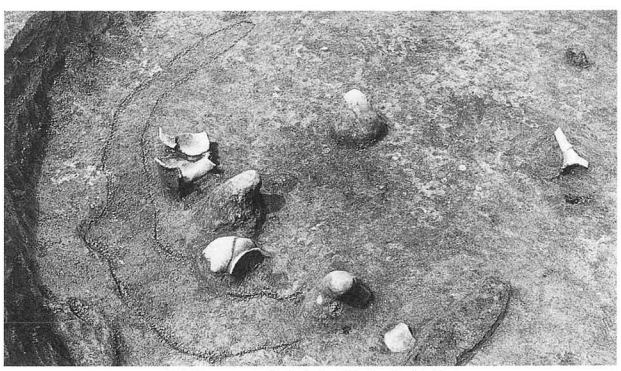
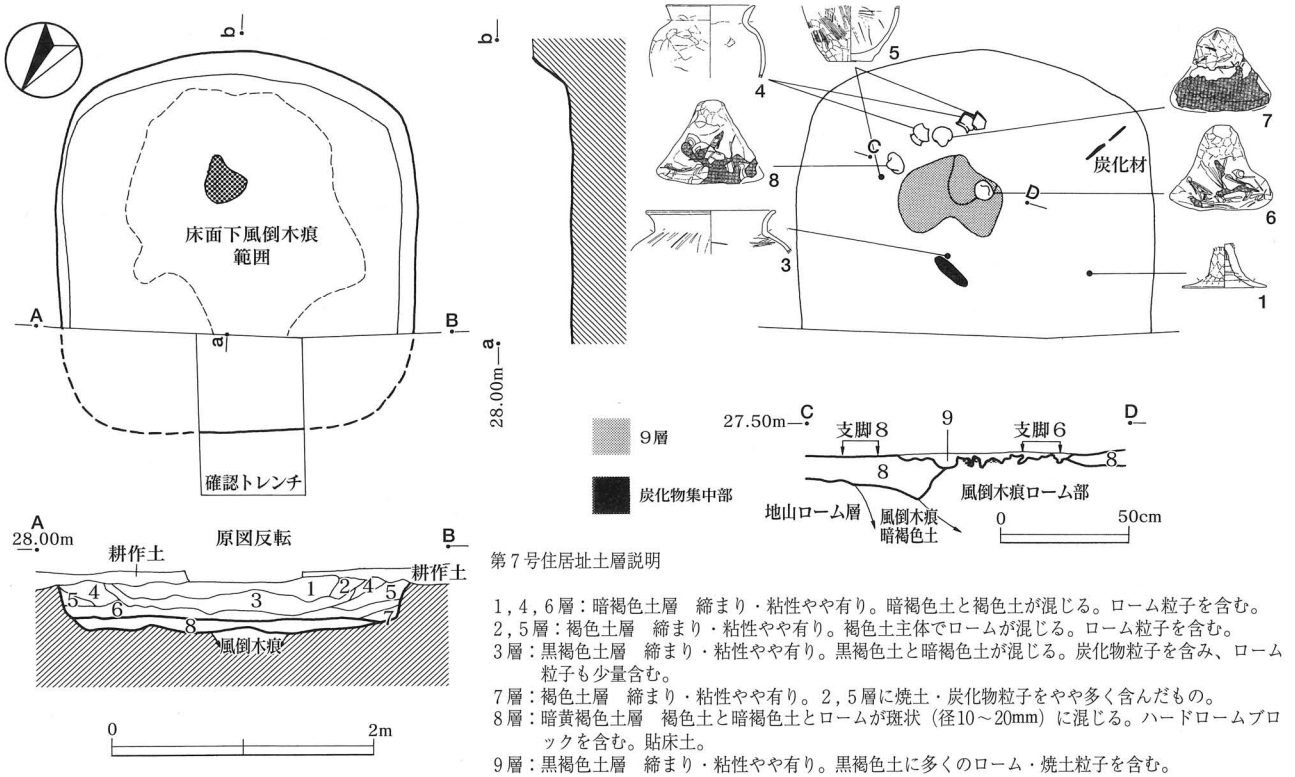


写真38　土製支脚出土状況



第7号住居址土層説明

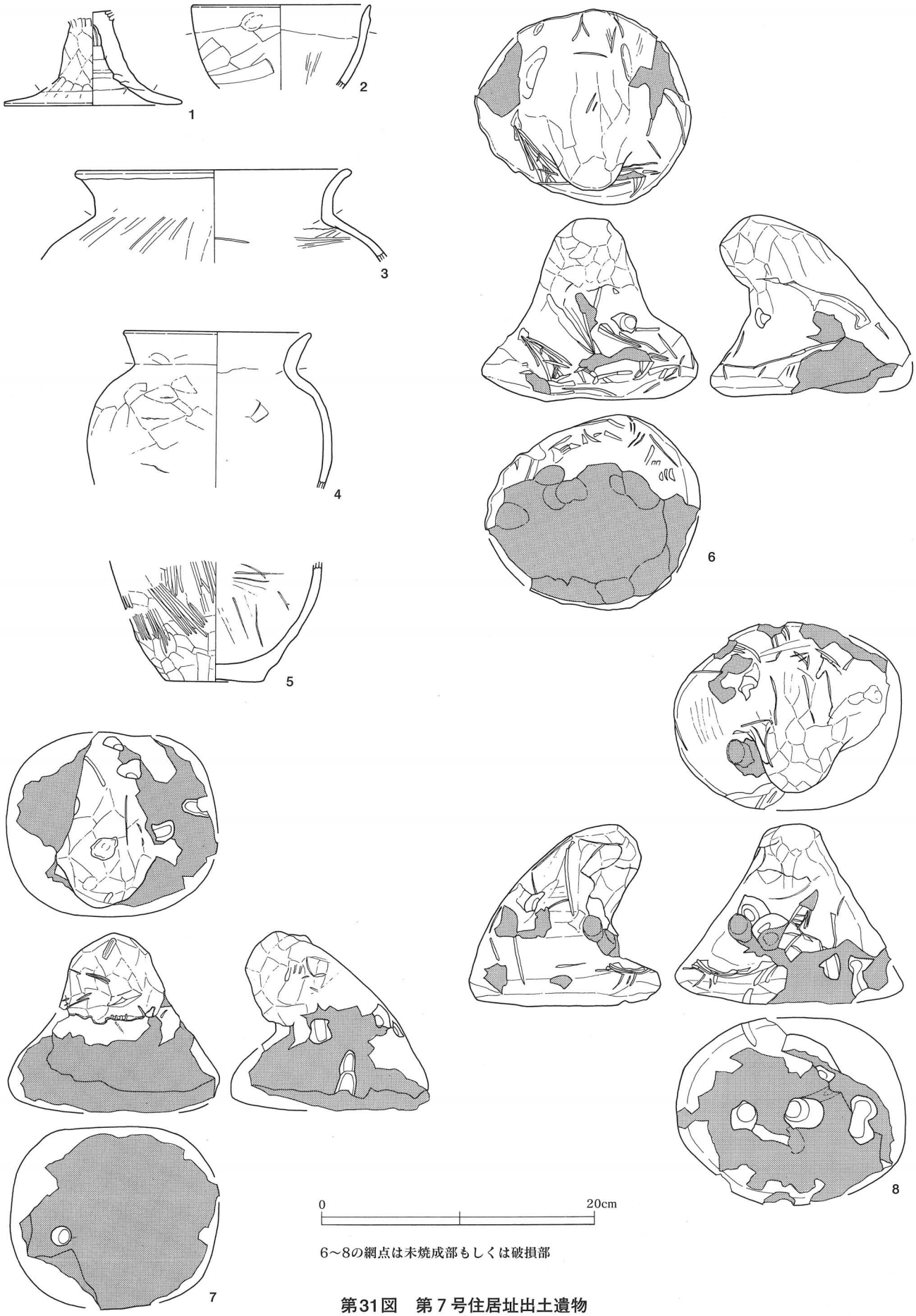
1，4，6層：暗褐色土層　締まり・粘性やや有り。暗褐色土と褐色土が混じる。ローム粒子を含む。
2，5層：褐色土層　締まり・粘性やや有り。褐色土主体でロームが混じる。ローム粒子を含む。
3層：黒褐色土層　締まり・粘性やや有り。黒褐色土と暗褐色土が混じる。炭化物粒子を含み、ローム粒子も少量含む。
7層：褐色土層　締まり・粘性やや有り。2，5層に焼土・炭化物粒子をやや多く含んだもの。
8層：暗黄褐色土層　褐色土と暗褐色土とロームが斑状（径10～20mm）に混じる。ハードロームブロックを含む。貼床土。
9層：黒褐色土層　締まり・粘性やや有り。黒褐色土に多くのローム・焼土粒子を含む。

第30図　第7号住居址実測図

本住居址では、炉址を取り囲むように**6**，**7**，**8**の土製支脚が出土している。**6**は炉址上にあたる9層上面、**7**，**8**は炉址からやや離れた床面直上から正位の状態で出土している。**7**の支脚先端は炉址の方を向いていたが、**6**，**8**の先端は外側を向いていた。また、床面直上出土の**4**の土師器甕は、**7**の支脚を挟む形で2点の大型破片に分かれて検出された。

出土遺物（第31図）　土師器片73点と土製支脚3点が出土している。**1**～**5**は土師器。**1**は高杯形土器、**2**が鉢形土器、**3**，**4**が甕形土器で、**5**が底部破片である。**3**の甕形土器は口唇部付近が強く外反するのに対し、**4**の甕形土器は直線的に開く口縁部を持つ。また、**4**は被熱による外面の剥落が顕著である。

6～**8**は土製支脚で、いずれも安定感のある楕円形の下部から徐々に細くなっていき、先端部が前屈する形態である。全体的には焼成は不良。被熱硬化しているのは表面のみで、内部や底面は未焼成な白色粘土である。破損により内部断面が観察できた**7**では、表面から5mm程が橙褐色または褐色に被熱硬化しており、続く12mm程は被熱によって橙色に変色はしていたが脆弱であった。底部については未焼成なため本体と汚れ土との明確な区別がつきにくく、クリーニングでは白色粘土以外の土は汚れ土として落としている。また、底面とした白色粘土表面には炭化物粒子の付着がみられた。これらの状況からは、当初支脚は未焼成のまま炉で使用され、使用に伴う炉の熱によって焼成が進んだものと考えられる。被熱硬化した表面には、茎状の植物圧痕が残り、先端部付近には撫で整形の痕跡がみられる。内部には茎状の圧痕は認められなかったが、これは未焼成なため圧痕として残らなかっただけで、胎土に植物質のものを混入していた可能性がある。先端部にすれは認められない。また、径1.5～3cmの孔がそれぞれの個体に1～複数個みられるが、穿孔部位や方向に統一性は認められず、いずれも貫通はしていない。表面が被熱硬化している部位に位置する孔でも、孔内表面には被熱による硬化もしくは橙色化した痕跡は認められず、使用前の制作時に開けられた可能性は低い。なお、図示した**7**，**8**は完形品ではないが、取り上げ時に破損・崩壊させてしまった分があり、検出時点では両者ともほぼ完形であった。



6～8の網点は未焼成部もしくは破損部

第31図　第７号住居址出土遺物

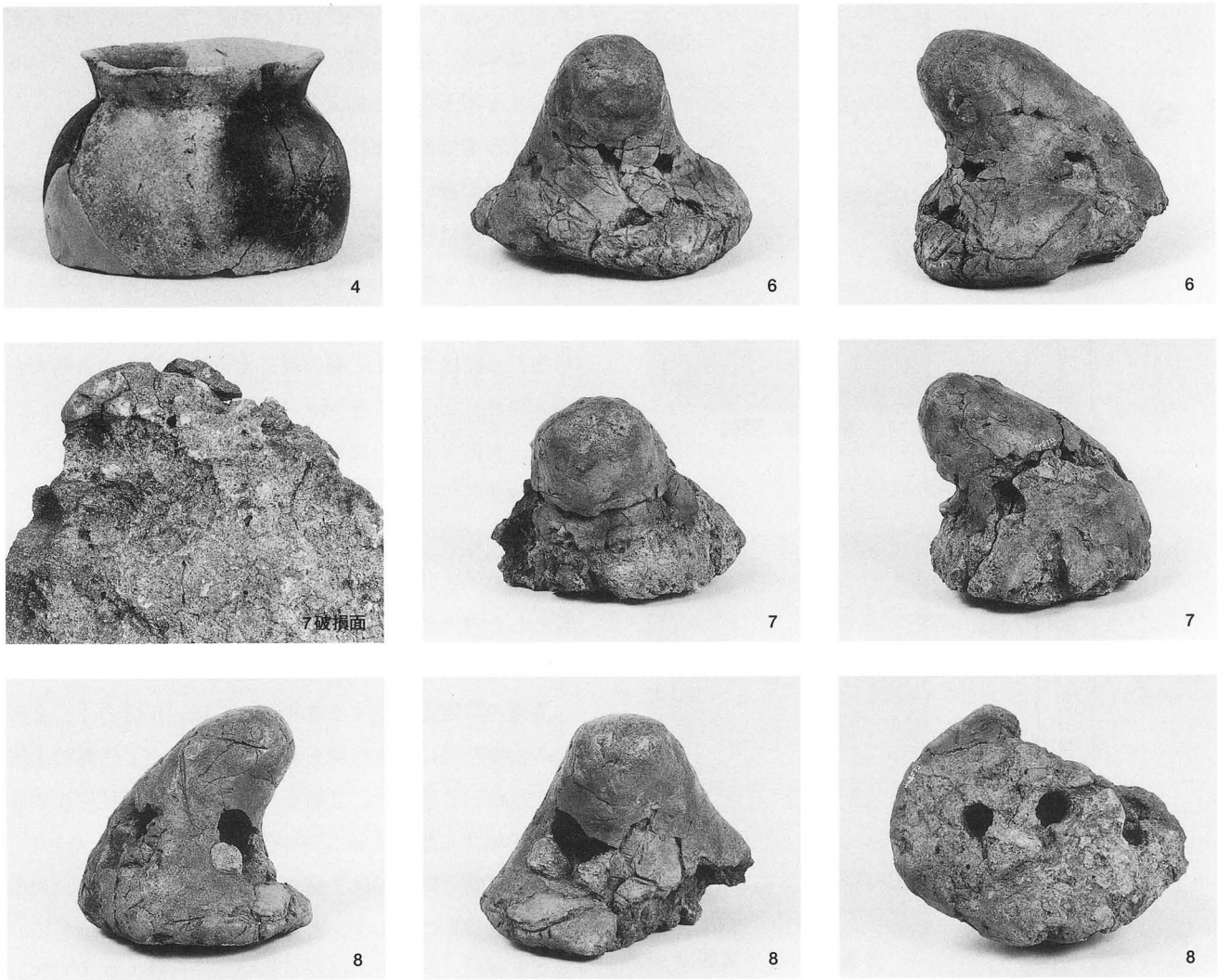


写真39　第７号住居址出土遺物

第１号溝状遺構

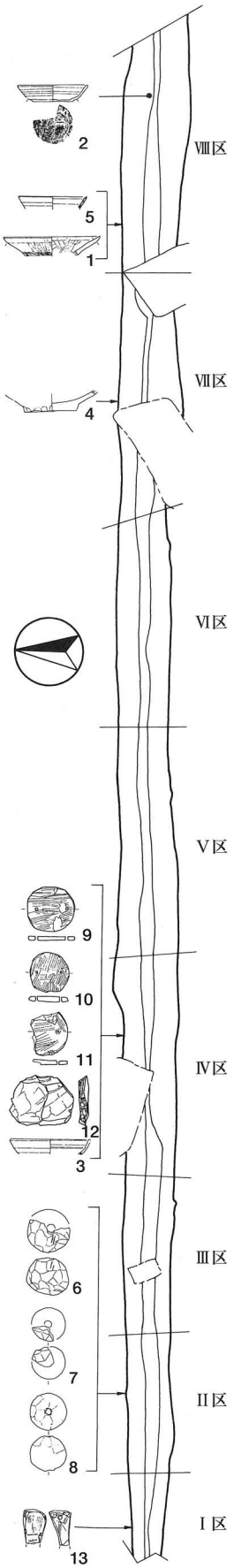
位置　①区と②区にわたって位置し、①区の南西角から真東に向かって真っ直ぐに延びている。東端では調査区外に延びており、西端でも調査区外に続いている状況が確認されたが、延長線上に位置する隣接したトレンチでは確認されていない。但し、調査区西端では確認面からの深さが浅くなっており、トレンチ部では遺存していない可能性がある。

本溝状遺構は第32図に示したように、西から便宜的にⅠ～Ⅷ区の８つの区に分けて調査をおこなったが、記述にあたってもこの区の呼称を用いる。ちなみにⅥ区とⅦ区の境が調査区の①区と②区の境に対応する。

Ⅲ，Ⅳ，Ⅶ区に底面まで達した攪乱が存在し、Ⅶ区とⅧ区の境界部には、立木保存のための未調査部がある。

規模と形態　地山ローム層を掘り込んだものであるが、Ⅱ層がみられる東端の断面観察では、Ⅱ層上面から掘り込みが認められた。Ⅰ区西端では幅1.1ｍ、深さ30cm、Ⅲ区では最大幅2.2ｍ、最深54cm、Ⅴ区では最大幅2.6ｍ、最深56cm、Ⅷ区では最大幅３ｍ、最深85cmと東にいくほど幅が大きくなり、確認面からの深さが深くなる。また、確認面の高さは西の方が高いため、底面の標高値ではもっと差が大きく、西端より東端の方が１ｍ程低い。

断面は基本的に平坦な底面から壁面が直線的もしくは外側に反り気味に立ち上がる形態であるが、Ⅱ，Ⅳ，Ⅶ区では底面から壁面への変換点に10cm程の段がみられる。また、両壁面を中心に計168ヶ所のピットが検出されている。これらのピットの規模は、最大径85cm、最深85cm、最小径13cm、最浅６cm、平均径30.4cm、平



第32図
第１号溝状遺構全体図

写真40　Ⅷ区

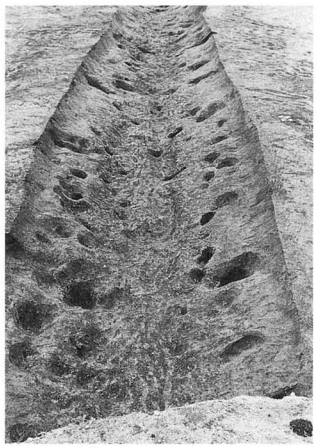


写真41　Ⅴ・Ⅵ区

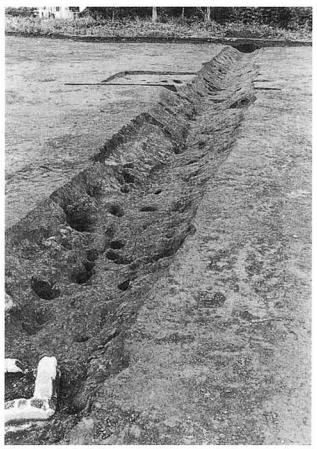


写真42　Ⅲ・Ⅳ区

均深25.8cmである。ピットは斜面になっている壁面部でも基本的に垂直に掘られており、平面分布としてはⅧ区に１ヶ所と少ない他は各区に分散している。

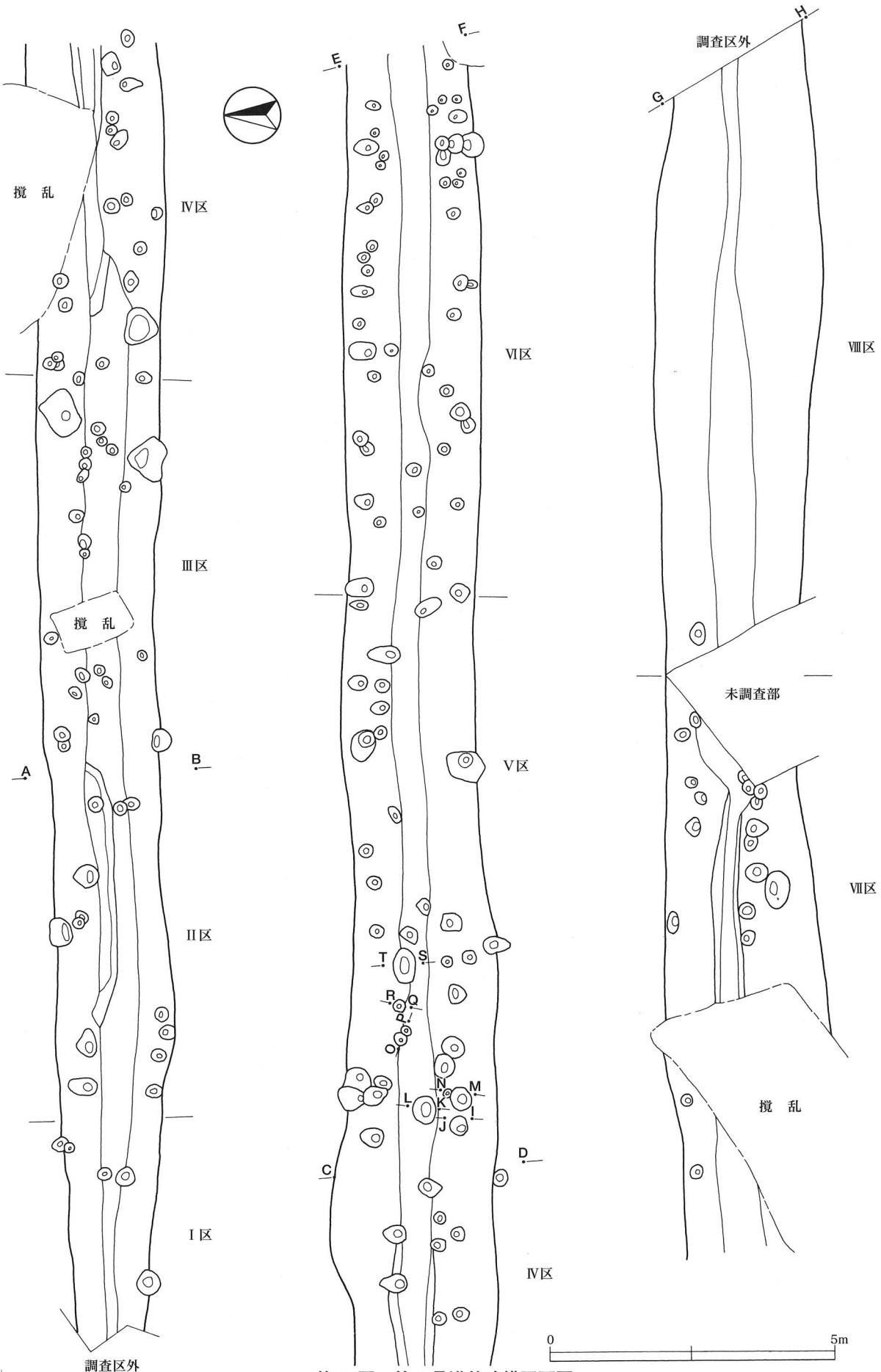
覆土と遺物の出土状態　底面と壁面上には２層とした褐色土層が覆い、その上位に黒・暗褐色系の１層が堆積する。１層はさらに上位から黒褐色土層の１ｃ層、暗褐色土層の１ａ層、１ａ層より黒味が強い暗褐色土層の１ｂ層に分層される。１ｃ層はⅠ区では認められず、東端にあたるⅧ区では１ｃ層の更に上位に、褐色土と暗褐色土が斑状に混じった暗褐色土層が部分的に認められる。また、Ⅳ区とⅤ区の境界部では、壁面上部の２層土の一部が硬化していた。

ピットについてはⅤ区に存在する８ヶ所を断ち割り調査した結果、２層土に近似するａや１ｂ層土に近似するｂとした覆土が多く認められ、重複している例では覆土に切り合い関係が確認された。

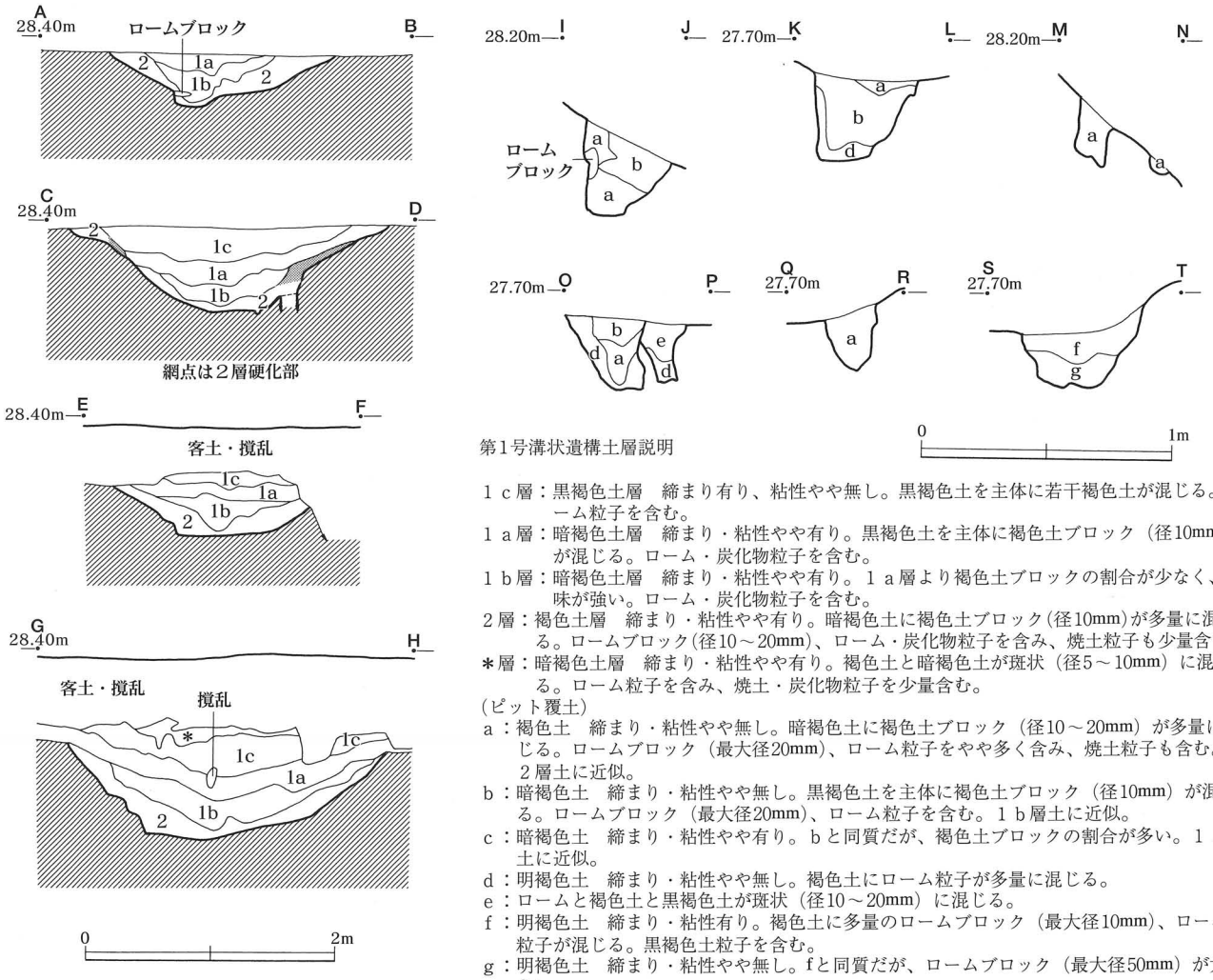
遺構の時期を推定する遺物としては、Ⅳ区の１，２層から古墳時代に特有な滑石製双孔円盤３点と円盤の未製品１点が、Ⅱ区の１，２層から古墳時代住居址出土のものと類似する球状土錘３点が検出されている。しかし、滑石製遺物と同じⅣ区２層からは、**3**の平安時代に相当する轆轤成形による土師器杯形土器の破片も出土していることから、本遺構の時期を平安時代以降と推定しておく。なお、轆轤成形の杯形土器は他にも、Ⅷ区の１ａ層上面から**2**の土師器大型破片が、同区１層から**5**の須恵器片が出土している。

出土遺物（第35図）　土師器片352点、須恵器片５点、弥生土器片26点、球状土錘３点、砥石１点、滑石製遺物４点が検出されている。

1～4は土師器で、**2**，**3**が轆轤成形の杯形土器、**1**が高杯形土器、**4**が底部破片である。**5**は轆轤成形の須恵器杯形土器。**6～8**は球状土錘で、欠損品である**7**の孔部には、棒状工具で刺突したと思われる階段状の痕跡が観察され、同破損面には長径７mm、幅3.5mmの種子圧痕状の窪みが認められる。**9～11**は滑石製の双孔円盤で、**11**は欠損品。いずれも表裏側面が研磨されている。**12**も滑石製遺物で形状から円盤の未製品と考えられる。板状の剥片を素材にし、周縁を剥離や折り取りによって調整している。側縁の一折れ面には削り痕が観察される。**13**は凝灰質砂岩製の穿孔が施された砥石欠損



第33図　第１号溝状遺構平面図



第1号溝状遺構土層説明

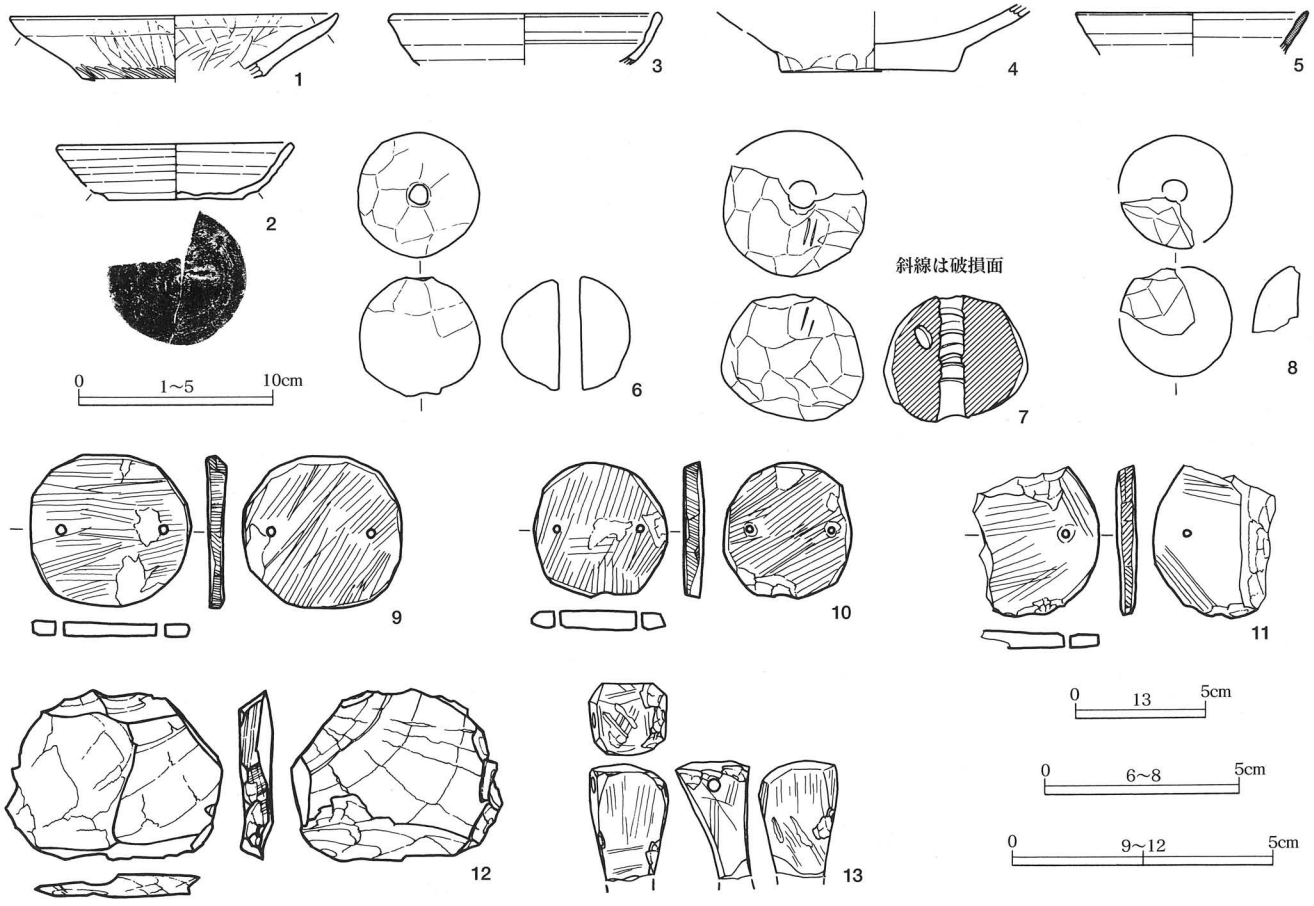
1ｃ層：黒褐色土層　締まり有り、粘性やや無し。黒褐色土を主体に若干褐色土が混じる。ローム粒子を含む。
1ａ層：暗褐色土層　締まり・粘性やや有り。黒褐色土を主体に褐色土ブロック（径10mm）が混じる。ローム・炭化物粒子を含む。
1ｂ層：暗褐色土層　締まり・粘性やや有り。1ａ層より褐色土ブロックの割合が少なく、黒味が強い。ローム・炭化物粒子を含む。
2層：褐色土層　締まり・粘性やや有り。暗褐色土に褐色土ブロック(径10mm)が多量に混じる。ロームブロック(径10～20mm)、ローム・炭化物粒子を含み、焼土粒子も少量含む。
＊層：暗褐色土層　締まり・粘性やや有り。褐色土と暗褐色土が斑状（径5～10mm）に混じる。ローム粒子を含み、焼土・炭化物粒子を少量含む。
(ピット覆土)
ａ：褐色土　締まり・粘性やや無し。暗褐色土に褐色土ブロック（径10～20mm）が多量に混じる。ロームブロック（最大径20mm)、ローム粒子をやや多く含み、焼土粒子も含む。2層土に近似。
ｂ：暗褐色土　締まり・粘性やや無し。黒褐色土を主体に褐色土ブロック（径10mm）が混じる。ロームブロック（最大径20mm)、ローム粒子を含む。1ｂ層土に近似。
ｃ：暗褐色土　締まり・粘性やや有り。ｂと同質だが、褐色土ブロックの割合が多い。1ａ層土に近似。
ｄ：明褐色土　締まり・粘性やや無し。褐色土にローム粒子が多量に混じる。
ｅ：ロームと褐色土と黒褐色土が斑状（径10～20mm）に混じる。
ｆ：明褐色土　締まり・粘性有り。褐色土に多量のロームブロック（最大径10mm)、ローム粒子が混じる。黒褐色土粒子を含む。
ｇ：明褐色土　締まり・粘性やや無し。ｆと同質だが、ロームブロック（最大径50mm）が大きい。

第34図　第1号溝状遺構断面図

写真43　第1号溝状遺構G－H土層断面

写真44　第1号溝状遺構I－Jピット断面

品で、破損面以外全面が砥面となっている。被熱による赤化が認められる。



第35図　第１号溝状遺構出土遺物

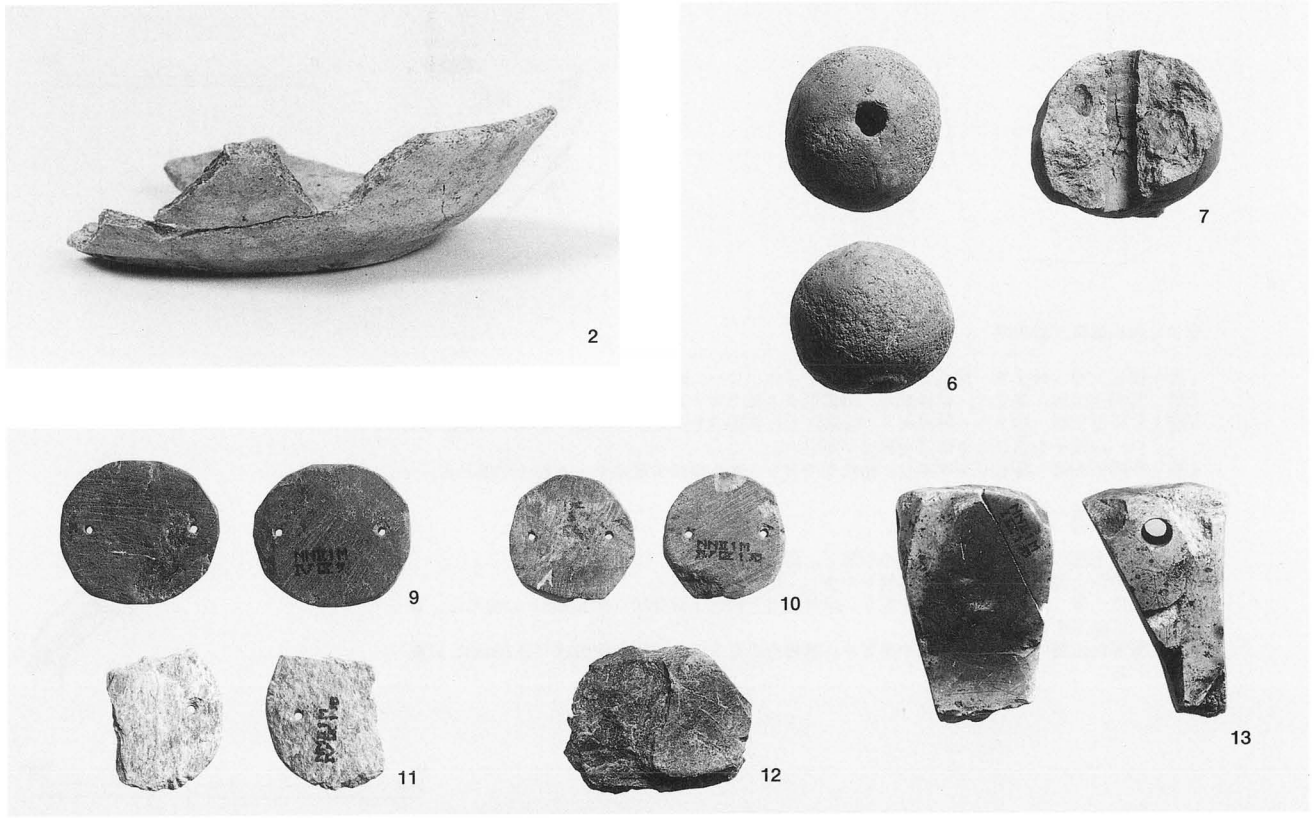
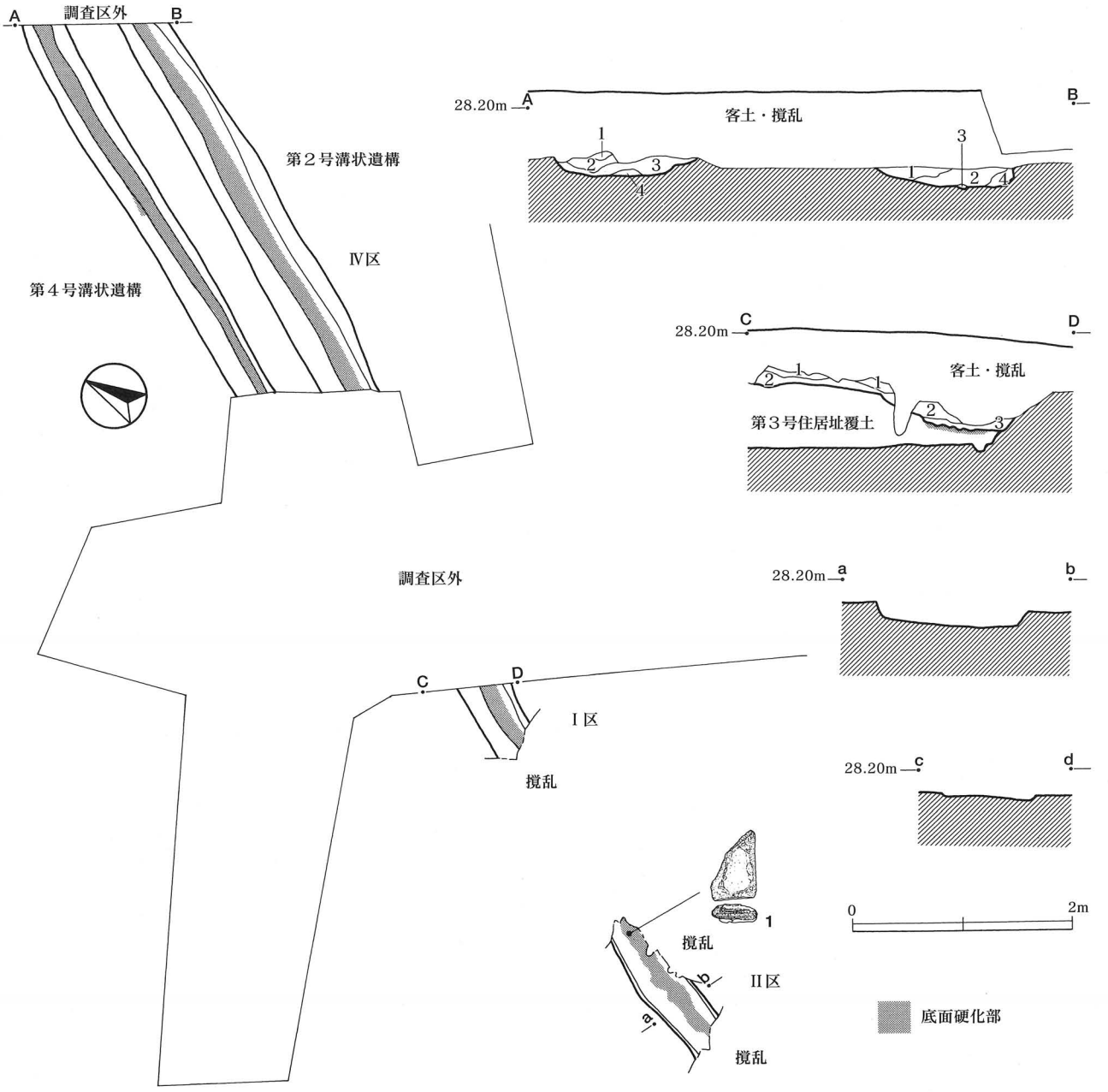


写真45　第１号溝状遺構出土遺物



第２号溝状遺構土層説明

１層：褐色土層　締まり・粘性有り。褐色土を主体にローム粒子を少量含む。
２層：暗褐色土層　締まり・粘性有り。暗褐色土主体でローム粒子を少量含む。
３層：暗褐色土層　締まり・粘性有り。暗褐色土と黒褐色土が斑状（径10～20mm）に混じる。ローム粒子を含む。下部ほど締まりが強い。
４層：明褐色土層　締まりやや無し、粘性やや有り。褐色土に少量のローム粒子が混じる。

第４号溝状遺構土層説明

１層：褐色土層　締まり有り、粘性やや無し。均質な褐色土。
２層：暗褐色土層　締まり有り、粘性やや無し。均質な暗褐色土。
３層：褐色土層　締まり・粘性やや有り。暗褐色土と褐色土が斑状（径10mm）に混じる。ローム粒子を含む。
４層：暗褐色土層　締まり・粘性やや有り。暗褐色土を主体に褐色土が斑状（径10mm）に混じる。

0　10m

第36図　第２・４号溝状遺構実測図

第２，４号溝状遺構

位置　第２号溝状遺構は①区南東部から②区南東部にかけて検出され、第４号溝状遺構は第２号溝状遺構の西隣に位置する。両者はほぼ平行してつくられており、関連性が考えられるため一緒に報告する。

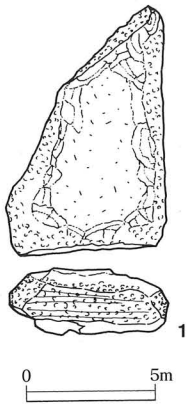
第２号溝状遺構はおおよそ南北方向に延びており、途中①，②区を分ける調査区外部分と、①区内の２ヶ所の大規模な攪乱によって、調査部分は４つに分割される。①区側は北から南へ順にⅠ，Ⅱ，Ⅲ区、②区側はⅣ区と便宜的に呼称して調査をおこなったが、ここでもその呼称のもと記述を進める。Ⅰ区は第３号住居址の南東部と重複しており、同住居址の壁と覆土の上部を壊していた。Ⅰ，Ⅳ区は北－35度－東方向に延びているが、Ⅱ区で若干東寄りに曲がり、Ⅱ，Ⅲ区では北－20度－東の方向になる。②区北端は遺構外に延びており、南端のⅢ区では、壁の立ち上がりが途中でなくなる。

一方、第４号溝状遺構は②区だけで確認され、北側はやはり調査区外に延びる。

規模と形態　第２号溝状遺構は、Ⅳ区で幅1.5～1.9ｍ、深さ20～25cm、Ⅰ区で幅1.4ｍ、深さ35cm、Ⅱ区で幅1.4ｍ、深さ15cm、Ⅲ区で幅95cm、深さ４cmの規模を持つ。検出面はⅠ区が一番低いため、底面の標高値で比べるとⅠ区、Ⅳ区、Ⅱ区、Ⅲ区の順に高くなっている。Ⅰ区とⅢ区の底面の標高差は約70cm程になる。一方、第４号溝状遺構は幅1.1～1.8ｍ、深さ10～18cmの規模を持ち、北端より南端の底面の方が10cm程高い。

両遺構とも地山ローム層を掘り込んだもので、断面は底面が平坦で広いⅢ状の形態をしていた。底面中央部には幅30～70cmの硬化部が両遺構の全域で認められる。

写真46　第２号溝状遺構Ⅳ区・第４号溝状遺構（右）



第37図　第２号溝状遺構出土遺物

硬化部が認められることから、両遺構とも道の痕跡と思われる。ちなみに第２号溝状遺構Ⅳ区の硬化部中心線と、第４号溝状遺構の硬化部中心線との距離は2.5～2.8ｍであり、底面は第４号溝状遺構の方が10cm程高い。

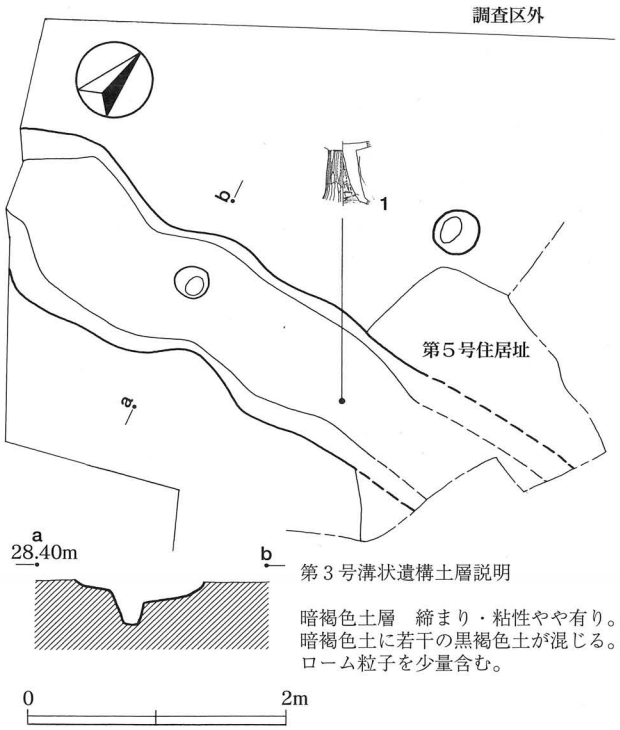
覆土と遺物の出土状態　両遺構の覆土については、図示したような土層が観察されたが、第２号溝状遺構Ⅰ区の断面観察では上位の１，２層が掘り込み外にも連続している状況が確認されている。出土した遺物のほとんどが土器の小片で、遺構の時期認定ができる資料はなかったが、第２号溝状遺構が古墳時代の第３号住居址の覆土を切ってつくられていることから古墳時代以降であることは確実である。

出土遺物（第37図）　第２号溝状遺構からは、土師器片64点、弥生土器片135点、板状石製品１点、チャート製の砕片１点が検出され、第４号溝状遺構では、土師器片５点、須恵器片１点、弥生土器片３点、チャート製の砕片１点が出土している。

１は点紋粘板岩ホルンフェルス製の板状石製品で、周縁には敲打にる調整が施されている。

第３号溝状遺構

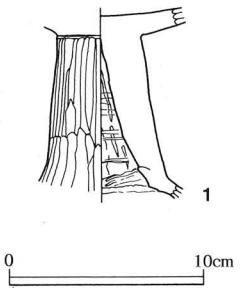
位置　①区の北西端に位置する。調査区がちょうど北西側に出っ張った所にあたり、おおよそ東西方向に延びる形で、長さ約4.5ｍにわたって検出された。西端は調査区外に延びており、弥生時代の第５号住居址の覆土上部に掘り込まれた東部では、端が攪乱によって切られている。



第38図　第３号溝状遺構実測図

規模と形態　幅87cm～1.3ｍ、深さ10～20cmの皿状の断面形態をした溝状遺構で、底面から径25cm、深さ26cm（底面から）のピットが１ヶ所検出されている。第５号住居址と重複する部分では、同住居覆土１層が地山になっており、それ以外ではローム層を掘り込んでいた。なお、本溝状遺構から北に約１ｍ離れた所に、径36cm、深さ28cmのピットが検出されたが、本遺構との関係は不明である。

覆土と出土遺物（第39図）　覆土は暗褐色土の単一層であった。遺構内からは土師器片57点、弥生土器片２点が検出されている。**1**は土師器高杯形土器の脚柱状部の破片で、覆土中から出土している。



第39図　第３号溝出土遺物

第１号土坑

位置　①区の中央南西寄りに位置する。

規模と形態　ローム層を地山とする掘り方は、テラス状の掘り込みを挟んで２つの土坑が連結した形態をしており、長軸4.4ｍ、幅2.4ｍを測る。南東側の掘り込みは深さ80cm、テラス状部の深さは22cm、北西側の掘り込みの深さは53cmであり、両側の掘り込みの底面と壁面にはかなり凹凸がある。北西側の掘り込み内と隣接する遺構外からはそれぞれ２ヶ所のピットが検出されている。Ｐ３，Ｐ４とした掘り込み内のピットは、底面から

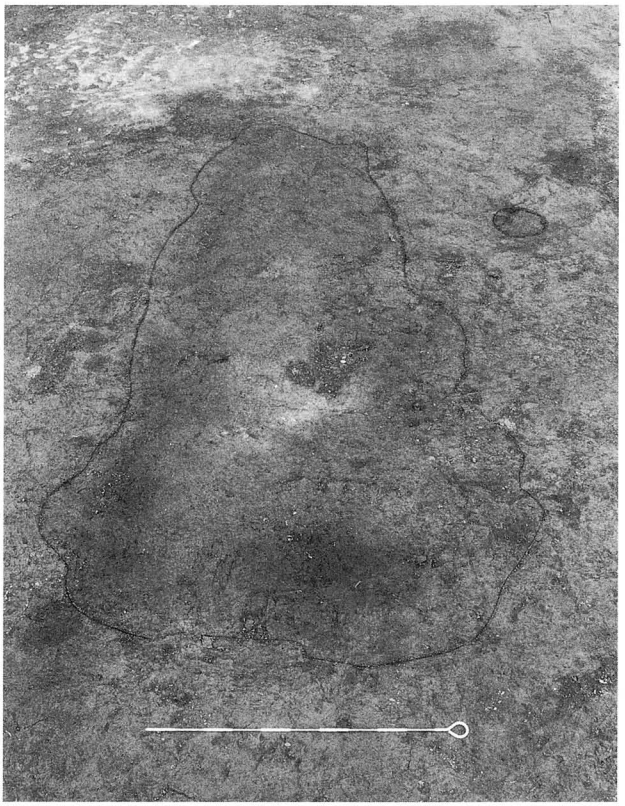


写真47　第１号土坑確認面

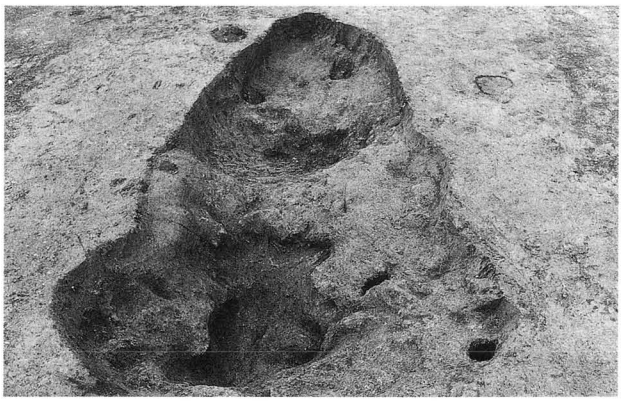
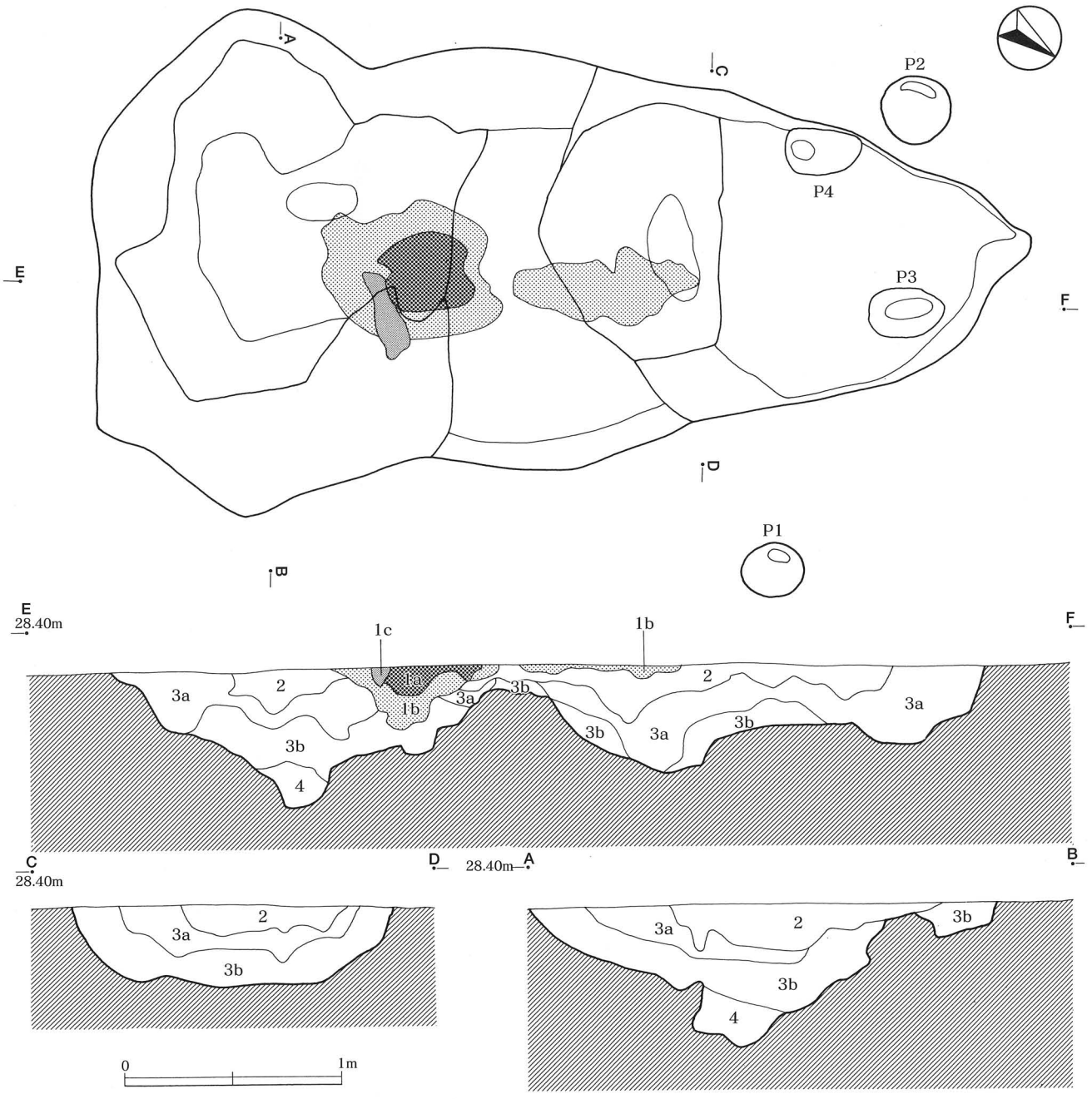


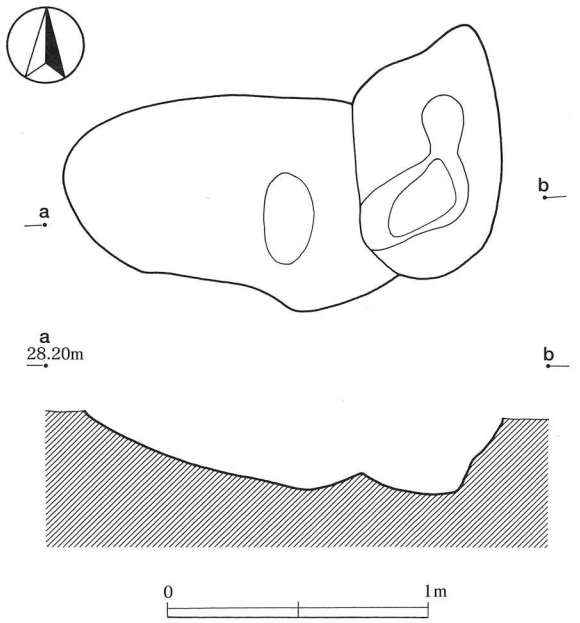
写真48　第１号土坑完掘全景



第１号土坑土層説明

１ａ層：赤褐色焼土層　締まりやや有り、粘性やや無し。焼土を主体に褐色土が少量混じる。炭化物粒子を少量含む。焼け込み焼土。
１ｂ層：暗赤褐色土層　締まり有り、粘性やや有り。赤味を帯びた褐色土に多量の焼土粒子が混じる。炭化物粒子を少量含む。
１ｃ層：暗赤褐色土層　締まり有り、粘性やや有り。1b層土に白色粒子が混じる。
２層：褐色土層　締まりやや有り、粘性有り。赤味を帯びた褐色土を主体に暗褐色土が混じる。
３ａ層：暗褐色土層　締まりやや有り、粘性有り。赤味を帯びた褐色土と暗褐色土が混じる。ローム粒子を少量含む。南東側では暗褐色土の黒味が強く、割合も多い。
３ｂ層：明褐色土層　締まりやや有り、粘性有り。ロームと褐色土が混じる。暗褐色土も若干混じる。ローム粒子を含む。
４層：褐色土層　締まりやや無し、粘性有り。褐色土と暗褐色土が混じる。ロームブロック（最大径30mm）、ローム粒子をやや多く含み、炭化物粒子を少量含む。
（ピット覆土）
Ｐ１：明褐色土　締まり・粘性有り。赤味を帯びた褐色土とロームが混じる。ローム粒子を含む。
Ｐ２：明褐色土　締まり・粘性やや有り。明褐色土にローム粒子が多く混じる。

第40図　第１号土坑実測図



第２号土坑土層説明

褐色土層　締まり・粘性有り。ローム・黒褐色土粒子を含む。
下部にはロームブロック（最大径20mm）がみられる。

第41図　第２号土坑実測図

の深さが10cm以内の浅い皿状のものであり、遺構外のＰ１，Ｐ２はそれぞれ30cmと29cmの深さを測る。

覆土　両掘り込みとテラス状部の底面上には３ｂ層とした明褐色土層が堆積し、その上位には暗褐色土の３ａ層、褐色土層の２層が順にみられる。また、南西側掘り込み３ｂ層下の最深部には４層とした褐色土層が堆積する。一方、テラス状部にかかった土坑中央部の覆土最上部には、２ヶ所の焼土層が検出されている。南東寄りの長径90cm、厚さ15cmの焼土層は、焼土が主体である１ａ層の周囲に２層土に多量の焼土粒子が混じった１ｂ層がみられるもので、２層を中心とする覆土が焼け込んだものと考えられる。さらにこの焼土層内には、１ｂ層土に白色粒子が混ざった１ｃ層とした焼土がブロック状に存在する。白色粒子が何かは不明である。北西側の焼土層は１ｂ層に対応するもので、長径90cm、厚さ約６cmを測る。

遺物としては、縄文土器の小片１点が３ａ層から出土しているのみである（第４図３）。この土器片だけでは遺構の時期を縄文時代以降としか想定できない。時期・性格とも不明としておく。

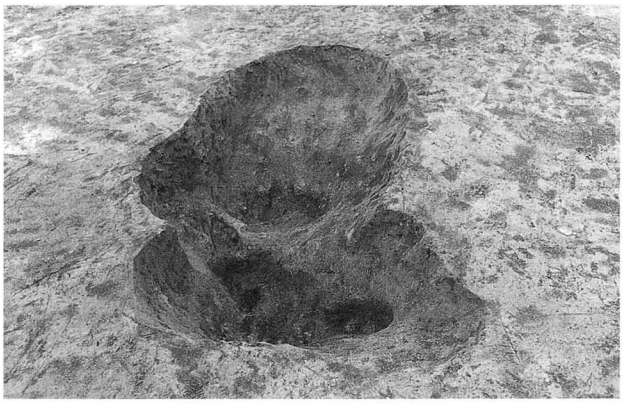


写真49　第２号土坑全景

第２号土坑

位置　①区の南端、第３号土坑の東方約３ｍ、第２号溝状遺構Ⅲ区の西方約１ｍの所に位置する。

規模と形態　ローム層を地山にする二つの楕円形の掘り込みが連なった形態である。西側の掘り込みは東西1.1ｍ、南北85cm、深さ32cm、東側の掘り込みは南北１ｍ、東西56cm、深さ32cmを測り、二つ合わせた東西長は1.7ｍになる。断面は両掘り込みとも底面から壁が緩く立ち上がる皿状の形態である。

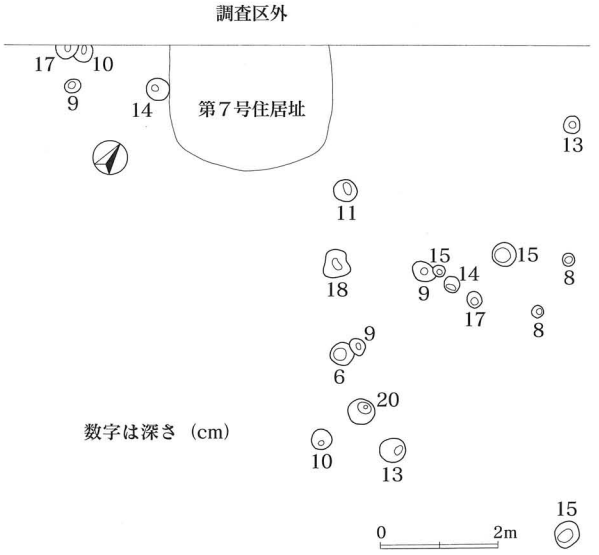
覆土と出土遺物　覆土は単一の褐色土であり、２つの掘り込みで違いは無い。土師器と須恵器の小片各１点が覆土中から出土している。この出土遺物から古墳時代以降の遺構とした。

③区ピット群

位置　③区南西部から、20基のピットが検出された。このピット群は北西側の調査区外にも広がっているものと思われる。その内１基は第７号住居址に接しており、ピット同士の重複も３例存在する。ピットの配置については部分的に直線的な配列も認められる。

規模と形態　ピットの規模は、最大径50cm、最小径22cm、最深20cm、最浅６cm、平均深12.6cmである。いずれのピットもローム層を地山とする。

覆土　各ピットとも共通した単一覆土で、黒褐色土と暗褐色土が斑状に混じった土が堆積していた。遺物の出土は無い。



ピット群土層説明

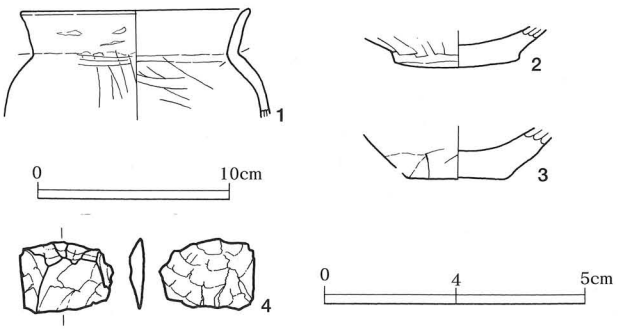
黒褐色土　締まり・粘性やや有り。黒褐色土と暗褐色土が斑状（径10～20mm）に混じる。ローム粒子を含む。下部ほど暗褐色土の割合が多い。

第42図　③区ピット群実測図

第１号住居址出土の古墳時代遺物

第１号住居址は前述したように弥生時代の遺構であるが、覆土上層にあたる１層や攪乱内から、古墳時代に該当する土師器片54点と滑石製遺物１点が検出されており、ここで報告する。（第43図）

1～3は土師器。**1**は口縁が直線的に開く形態の甕形土器で、**2**，**3**は底部破片である。**4**は滑石製遺物で、背面打面側に細かい剥離痕を残す小型の剥片である。

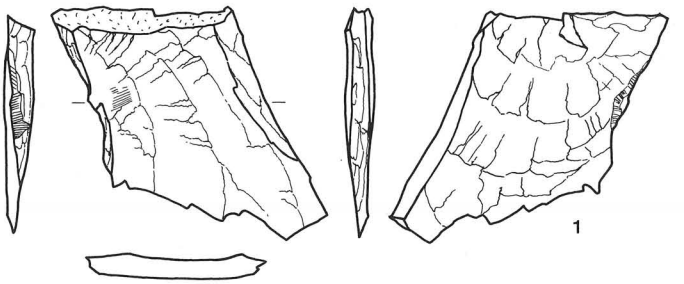


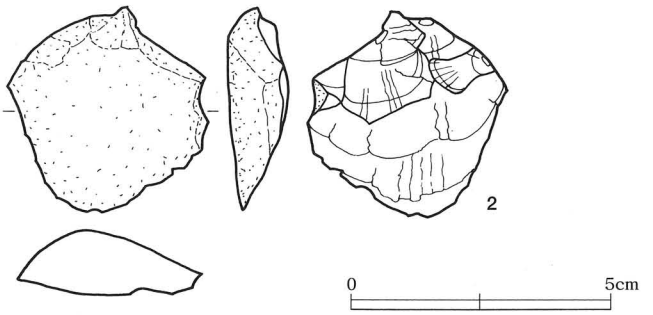
第43図　第1号住居址出土の古墳時代遺物

遺構外出土の古墳時代以降及び時期不明遺物

遺構外からは、前述した縄文土器片４点、弥生土器片73点以外に、土師器片119点、安山岩製の剥片１点、滑石製遺物１点が出土している。（第44図）

1は滑石製遺物で、横長の板状剥片の両側縁が折り取られたもので、一折れ面と背面の打点付近に削り痕が残る。**2**は背面に自然面を残す安山岩製の剥片。なお、遺構外出土の土師器はいずれも小片である。





第44図　遺構外出土遺物

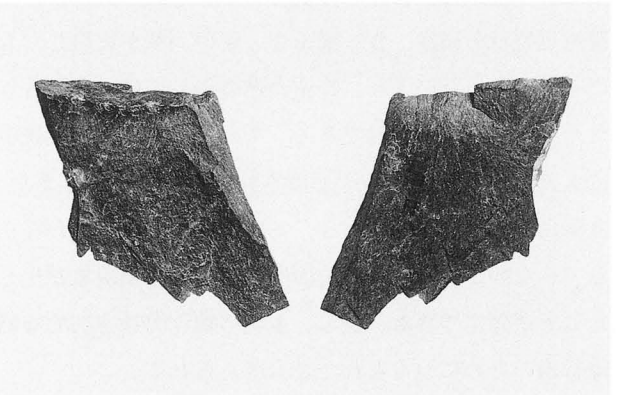


写真50　遺構外出土滑石製遺物

Ⅳ　まとめと若干の考察

1.　観察所見に基づく遺構・遺物の基礎的検討

野中遺跡では弥生時代と古墳時代の集落址が検出されたわけであるが、まとめとして、いくつかの遺構や遺物について、集落址分析の前提となる基礎的事項を整理しておく。

第３号土坑に関わる現象・行為の復元

弥生時代の第３号土坑は、現状では類例の無い性格不明の遺構である。ここではその性格を考察するための基礎的作業として、焼土層など燃焼に関わる痕跡や遺物の在り方から、遺構に関わる現象や行為を復元しておきたい。

燃焼現象

燃焼現象に関わる痕跡としては、焼土層や炭化物粒子を多く含む土層、底面の劣化などがあげられる。被熱のためかボロボロに劣化した底面直上には、多量の炭化物粒子や炭化物起源と思われる黒褐色土が混じる４層が堆積しており、４層を覆う褐色土層の３ａ層中には、３ｂ層とした多量の焼土が混じった赤褐色土が４層に接してブロック状に存在していた。

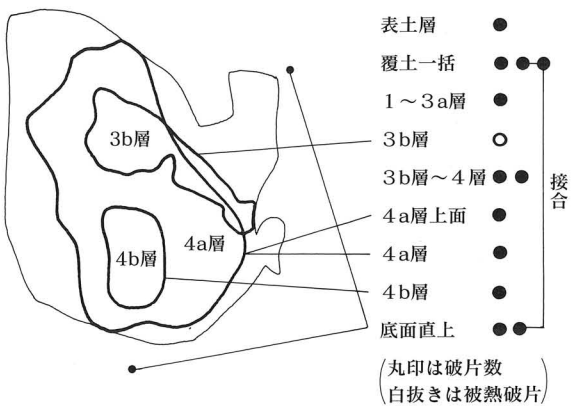
これら層位的に密接した痕跡群は、底面を火床面、４層を燃焼材の痕跡、３ｂ層を３ａ層の一部が被熱したものと捉えることにより、特定の燃焼現象に伴って形成された一連の痕跡と理解できる。その場合、３層は燃焼中に人為的要因が関わって形成された土層となる。また、底面に劣化が認められ、３，４層以下に別の土層が存在していないことから、土坑の廃絶直後に燃焼現象が生じたことが想定できる。但し、土坑の掘り方は意図的な燃焼行為のためにつくられたとも考えられる。

遺物の遺棄・廃棄

土器について　弥生土器片は底面直上から覆土を中心に146点が出土しており、同時期の第１号住居址に比べれば遺構の面積の割に多くの土器片が残されていた。しかし、いずれの土器片も小片であり、同一個体と認定した破片群も接合するものは少なく、出土位置が異なる場合が多い。

例として**2～12**とした同一個体の破片群の出土位置を第45図に示した。層位的には底面直上や覆土中、更にその上位の表土層から分散して出土している。但し、１～３ａ層、覆土一括として取り上げたものが、３ａ層や３，４層から出土した可能性を含むことを考慮すれば、主体となる出土層位は燃焼現象に関わる層位（３層～底面直上）と捉えられる。一方、平面的には、底面直上出土の２点が南北両端の離れた位置から検出されているのをはじめ、堆積範囲が分離している３ｂ，４ｂ両層から出土しているなど、やはり分散した状況が認められる。

また、焼土層である３ｂ層から出土した破片（**9**）の、内外面や破損断面には、他の同一個体破片には認められない、被熱による橙色化と剥落が認められる。この痕跡は、燃焼現象中もしくはそれ以前に土器が遺棄・廃棄されたことと、同一個体の土器が燃焼現象が生じた時点で、すでに破片に分割されていたことを示唆する。さらに、接合する破片が少ないことを考え合わせると、別の場所で破損した土器片群の一部が、当遺構に二次的に廃棄さ



第45図　第３号土坑出土同一個体土器資料（２～12）出土位置図

れたものである可能性が高い。

石器・土製品について　**93**の土製紡錘車、**94**の土製品、それに**96**のペグマタイト製の石核？は、完形のまま検出されたもので、覆土一括で取り上げられた石核？を除く土製品２点は、燃焼現象に関わる層位から出土している。

一方、焼土層である３ｂ層が上位に被さる４ａ層中及びその上面から出土した**95**の敲石は、８片に分かれた状態で検出された。但し、土器の場合と異なり、８片は一ヶ所にかたまって残されており、全て接合している。また、表面には被熱による淡い赤化が認められ、破片によって若干赤化具合が異なるため、破損後の被熱も考えられる。しかし、破損面では表面付近に帯状の赤化が認められるだけで、中央部は赤化していないため、必ずしも当初から破損していたものとはいい難い。出土状況も合わせて考えると、燃焼現象による被熱により、燃焼中に破砕したものと捉えるのが妥当であろう。

土坑に残された燃焼現象が意図的なもので、しかも遺物がその燃焼行為に伴って残されたものであると仮定するならば、土器については細片を散布する二次的な廃棄行為が、石器・土製品については完形のままでの廃棄行為が行われたことになる。その場合にはやはり儀礼的行為として考えるべきか。

高杯形土器の住居址間接合について

遺跡内における土器の住居址間接合資料の在り方は、住居址の同時性や前後関係を捉える上で、一つの手掛かりになる［土井・塩野崎1984］。今回の調査においては、古墳時代の第２号住居址と第３号住居址から出土した、土師器高杯形土器の破片が接合している。野中遺跡の古墳時代住居址の変遷については、第１次調査区も含めて検討しなければならないが、ここではその前提作業として、上記の接合事例に関わる行為を復元し、両住居址の時間的関係を整理しておきたい。

２住**1**とした当該高杯形土器は、第18図に示したように、脚～杯下部の接合資料と杯部口縁の接合資料に分かれる。脚～杯下部の資料は、２住の竈支脚として遺棄されていた脚部の大型破片を中心に、同住居址竈周辺の２層出土の小破片２点と、３住２層出土の小破片１点が接合したものである。杯部口縁の資料は、２住竈周辺の２層出土の小破片１点と、３住２層出土の小破片１点が接合している。両資料の３住出土の破片には、赤色塗彩が良く残っているのに対し、２住の破片には赤色塗彩の痕跡は僅かしかみられない。２住の支脚に用いられていた脚部破片については、竈での使用に伴う被熱によって塗彩が剥がれた状況が想定され、支脚転用時には３住出土の破片とはすでに分割されていたと捉えられる。また、２住２層出土の杯下部破片は、３住２層出土の杯下部破片を介して支脚破片と接合している。失われた部位の破片を考慮しても、破片形状から３住２層出土破片の分割より後に、２住２層出土破片が支脚破片から分割された状況は考え難い。

そこで問題となるのが、２住２層出土の杯下部破片の赤色塗彩剥落の要因である。２住には住居廃絶時以後の燃焼現象を示す痕跡は認められないため、竈周辺から出土した状況を考慮すれば、やはり小破片の状態で竈の火による被熱を受けた可能性が高い。杯部口縁の２住２層出土破片についても、同様な状況が考えられる。つまり、２住では支脚に転用した脚部以外の破片も住居使用中に存在していたことになる。

さて、３住出土の破片については、覆土下層にあたる２層の出土であり、３住使用時から廃絶後覆土の堆積が進行した段階までの間に、住居址内に遺棄・廃棄もしくは住居址周辺から混入したものと捉えられる。混入とした場合には様々な状況が想定され、２住との時間的関係は限定できない。

一方、３住内に遺棄・廃棄されたものとするならば、当該高杯形土器は、２住使用中に２住において破損・分割され、その一部が、３住内に持ち込まれたか、３住内で破損・分割され、その内脚部破片やいくつかの小破片が、使用中の２住に持ち込まれたかのどちらかが想定される。その場合、３住は２住と併存もしくはそれ以前に廃絶されたことになる。

以上の復元は、転用と廃棄という行為によってのみ破片が意図的に動かされる、という前提に立っている。それでも住居址間の時間的関係は限定できなかった。しか

し、もっと多くの住居址間接合資料があれば、傾向は掴めるであろう。今回は支脚という確実に住居使用時に伴う資料が接合したため、検討を加えてみた次第である。

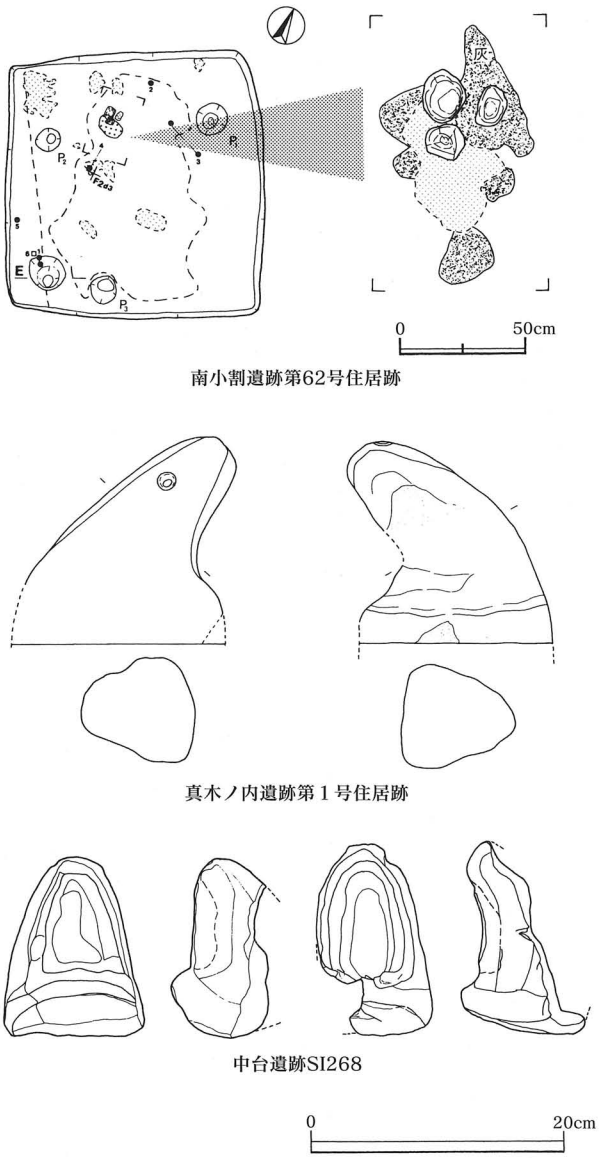
土錘の摩滅について

今回の調査では古墳時代の遺構を中心に計11点の土錘が出土したが、いずれも孔が開いた管状土錘で、内10点は球状の形態をしたものである。その中で古墳時代の第４号住居址から出土した２点の球状土錘（**48, 49**）には開孔部の摩滅が認められる。特に**48**は両開孔部とも同一方向に偏って著しく摩滅している。この摩滅形状は、川村勝氏が観察した現在霞ヶ浦で使われている土錘のうち、「開孔部端が抉れるように摩滅」した引網の事例に類似し［川村1992］、当該土錘も漁網に装着され、負荷がかかる状況で引きずられた可能性が考えられる。

但し、他の９点には摩滅は認められず、茨城県内における台地上の遺跡から出土する古墳時代の管状土錘には、開孔部の摩滅がほとんど認められないという指摘［川村1992］に、傾向としては一致する。

土製支脚について

野中遺跡の第７号住居址からは、炉址を囲んで３点の土製支脚が出土した。その性格を理解するために、まずは茨城県内の古墳時代に該当する竈に付随しない土製支脚の類例をあたってみる。（第46図）



第46図　茨城県内の土製支脚例

野中遺跡例と同様、炉址付近に３点の支脚状土製品が検出された例として、茨城町南小割遺跡第62号住居跡［中村・江幡1998］と土浦市向原遺跡第51号住居址［中野1987］がある。南小割遺跡では、「四角錘（ママ）状の支脚土製品に伴って、同様な形状の熱を受けた２個の粘土塊」が炉址の北部から「三角形を成す位置関係で出土」している。また、「内二点は、据えられていた状況での内側に当たる部分が、特に被熱硬化しているのが認められ」「一個体は、直径にして約10cmほどで、形状が方形に近く上位は球形状」とも記載されている。向原遺跡でも「土製支脚片」３点が「炉址内より出土している」。実測図をみると円錐形をした先端部の破片で、「非常にもろい」との記述がある。報告書では３点を「三足状の支脚と思われる同一個体」としているが、接合関係は無いようなので、野中例のようにそれぞれ別個体の可能性も考えられる。一方、土浦市の真木ノ内遺跡第１号住居跡からは、炉址付近ではないが、「北コーナーから約1.7m西方の床面から」「３方から坩を取りまく様に支脚３個が立位の状態で出土」している［柴1987］。この支脚は、安定した底部から三角錐状に細くなった先端が前屈するもので、実見した所焼成は不良であった。

この他、つくば市の中台遺跡ＳＩ268出土の２点の土製品？がある［黒澤秀1995］。実測図をみると、底部から先細りになった先端が前屈するもので、前屈面が窪ん

でいる。なお、火処については、中台遺跡ＳＩ268は炉を有し、真木ノ内第１号住居跡は不明。出土住居址の時期は、報告書によると南小割例と向原例は古墳時代前期、真木ノ内、中台例は中期（和泉式期）とされている。

まず、野中、南小割例から炉で使用された支脚であることはほぼ間違い無いであろう。更に、真木ノ内例も加えるなら、基本的に３個セットで機能していたものと思われる。形態的には、「被熱および風化が激しいため現存しているものはかなり小さくなっている」南小割例を除いて、細部に違いはあるものの、いずれも錐形のもので先端が前屈するものが多い。これは竈に使用される柱状の土製支脚とは区別される、炉用土製支脚の形態的特徴である可能性がある。また、炉付近からの出土ではない真木ノ内例や、炉からやや離れた個体もみられた野中例は、支脚が固定式ではなく、必要に応じて移動可能なものであったことを想定させる。なお、「風化が激しい」「粘土塊」と記述された南小割例や、「非常にもろい」向原例、それに焼成不良な真木ノ内例は、野中遺跡例と同様、未焼成のまま使用された状況が推定される。

茨城県の古墳時代前期においては、「粗製器台」が炉の器台として使用されていた可能性が、鶴見貞雄氏によって指摘されている［鶴見1993］。今回の類例は前期と中期のもので、「粗製器台」との関係が注目される。但し、「粗製器台」との併用を考えても、当該期の炉を持つ住居址数に比べて土製支脚の検出例は少ない。その要因としては、実際支脚を使う場面が限られていた場合、焼成不良で遺存しにくいため、石など他の材質を用いていた場合（註）などがあげられる。今後は集落内における出土住居址の性格等を検討しなくてはならないであろう。課題とする。

（註）白石真理氏は、ひたちなか市武田遺跡群西塙遺跡第97A号住居跡から出土した甕形土器について、底部のヨゴレの観察や被熱した石類の存在から、「石等を利用して、三ヶ所から底部を支えた状況で煮炊きが行われたこと」を推定している［白石1995］。

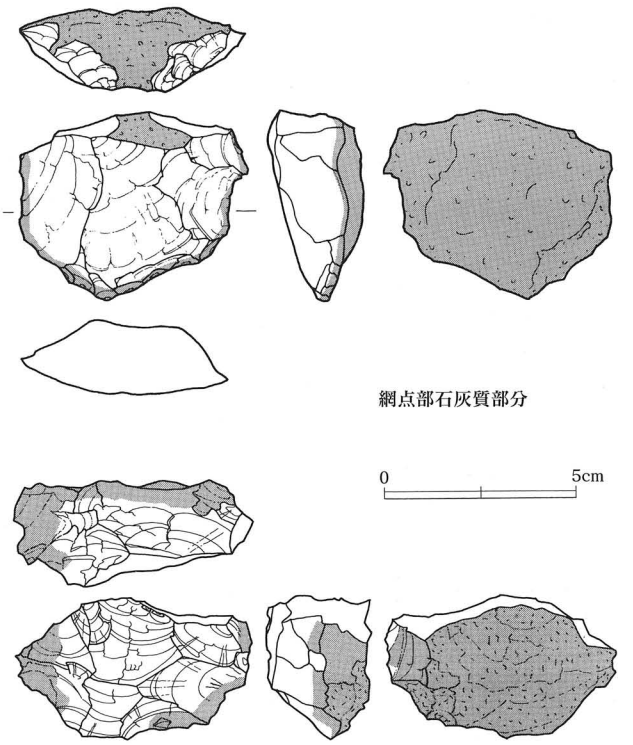
玉随及びペグマタイト製遺物について

玉随製遺物

古墳時代の第３号住居址の覆土中や攪乱内からは、玉随製の石核１点、剥片８点、砕片４点が出土している。これらの石器は接合はしていないが、石質から同一母岩から生じたものと捉えられる。また、石核作業面の剥離は周縁多方向から行われており、剥片の背面が同様に剥離の方向が異なる複数の剥離面で構成されていることに対応する。剥片の形態は一定ではなく、側縁に折れ面を有するものもある。剥片には折れ面を除く明瞭な調整痕や使用痕は認められず、また、同石材を素材とした石鏃等の剥片石器や玉類は検出されていない。用途は不明である。

これら石器の帰属時期については、まず、出土した住居址の時期である古墳時代が考えられる。しかし、Ⅲ－２でも述べたように、同住居址中からは弥生土器の破片が多く検出され、付近に弥生時代の遺構や活動地点が存在した可能性がある。遺物の大きさを考えると、弥生土器に付随していたものが、土器と一緒に混入した場合も想定される。

また、これらの石器が弥生時代に属する可能性を示す他遺跡の事例としては、美浦村の根本遺跡の事例が上げられる［中村1996］。弥生時代後期に該当する根本遺跡第28号住居址の柱穴内から、流紋岩製の石核３点とともに、玉随製の石核１点が出土している（註）（第47図）。



第47図　根本遺跡出土石核（上、中村1996に加筆）（下は野中遺跡例）

根本遺跡の石核も、裏面に石灰質の付着物による自然面を残し、上面に打面が作出されたもので、やはり剥離は周縁の各方向から行われている。石灰質物質の付着がみられる点といい、野中遺跡例に類似する。なお、根本遺跡でも同材の剥片石器や剥片は検出されていない。

他石材の剥片類が検出された例としては、茨城県高萩市の赤浜遺跡で、弥生時代中期に該当する竪穴遺構内から、赤色チャートを主体とする1,800余点の円礫、石核、剥片、砕片が出土している［川崎・金子1972］。安山岩製の「両刃石斧」や「石核斧」は検出されているが、石鏃やその未製品の出土は無い。また、石材の主体となるチャート製の剥片に調整を加えた剥片石器が出土したという記述はみられない。報告者は石器の素材を想定している。

ここでは弥生時代もしくは古墳時代に属する遺物という指摘に止めておく。

ペグマタイト製遺物

今回の調査では、ペグマタイトの石英質部を使用した石核？1点、剥片2点、砕片13点が検出されている。

石核？（第3号土坑**96**）としたものは、特定の打面を作出せずかなり無作為に周縁から打撃を加えたもので、定型的な剥片を取ったものとは思われない。また、剥離面には節理による凹凸が顕著で、剥離の際途中で折れたり、砕けたりしたものが多かったと想像される。それは同材の剥片の形状を留めていたものが小型で少ないことや、砕片とした折れ面や節理面が多くみられる小石片の存在と対応する。**96**が石核として機能していたとするならば、定型的な剥片剥離を目的としたものではなく、当初から砕片を得るためのものであった可能性がある。

なお、土浦市原田遺跡群の西原遺跡第3，4号住居跡において、同様な石英質の砕片（アプライト礫細片）が、炉址周辺から集中して出土している［江幡1994］。この出土状況を炉の熱による石の破砕行為と結び付けるならば、やはり目的は定型的な剥片ではなく、砕片の獲得であったと思われる。

石核？は弥生時代の第3号土坑から出土したもので、剥片や砕片は全て古墳時代の第3号住居址の覆土や攪乱内から出土している。玉随製遺物と同様に、第3号住居址出土の剥片、砕片は弥生時代に属する可能性がある。このペグマタイト製の遺物は、他の報告書でアプライト、石英片などと表記されているものとほぼ同質のものと思われ、前述の西原遺跡をはじめ茨城県南地域の弥生時代後期遺跡から多く検出されている。しかし、古墳時代遺構から出土した例は、管見の限りでは、美浦村陣屋敷遺跡の2軒の住居址から出土した「石英片」3点のみであり［中村1992］、両住居址とも弥生時代の住居址と重複しており、確実に古墳時代に属するとはいえない状況である。

現状では、弥生時代に伴う可能性が強い遺物として捉えておく。

（註）根本遺跡の報告書［中村1996］では、チャート製としたものであるが、今回遠藤好氏に玉随であることを御教示いただいた。

滑石製遺物について

滑石製遺物は計29点出土しており、その内の3点は双孔円盤の製品で、他は滑石製品製作過程で生じる未製品や素材、それに調整剥片と捉えられる。

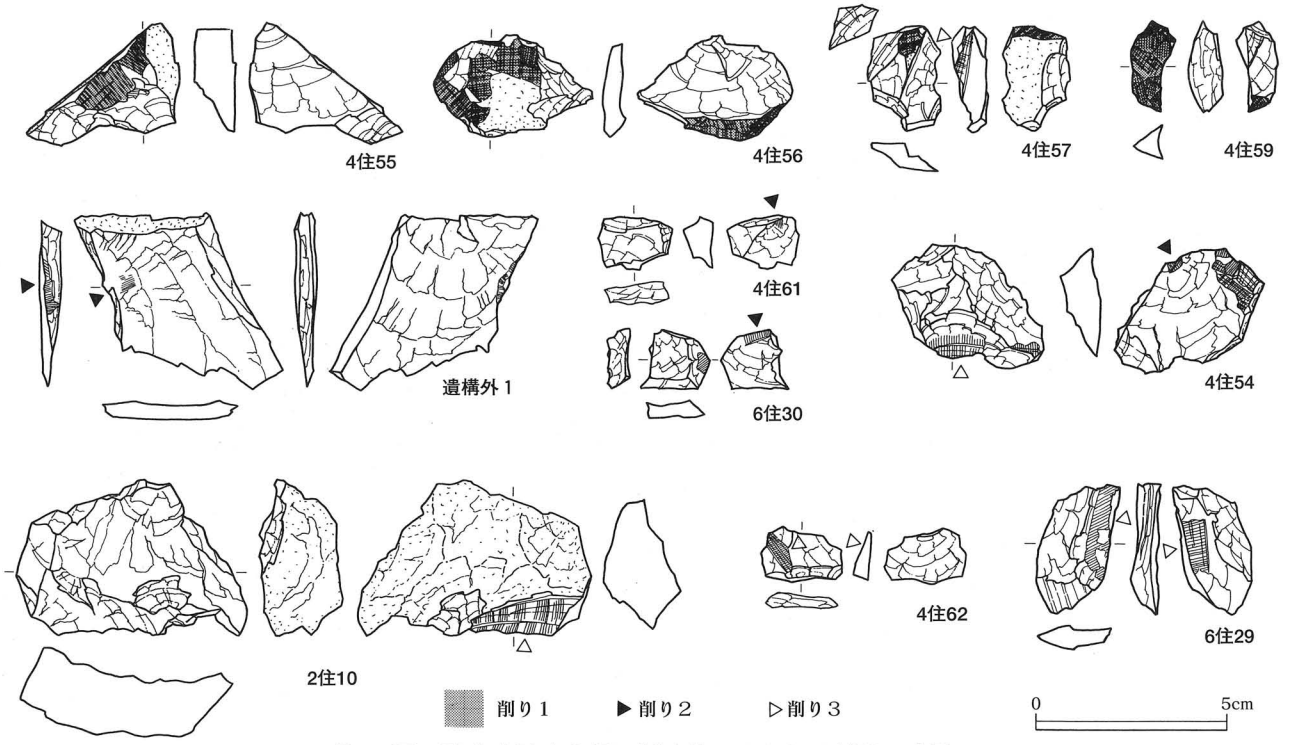
今回の調査で検出された滑石製品は、双孔円盤のみであるが、第1次調査では剣形、臼玉等、他の滑石製品が出土しており、未製品としたものを除き今回出土した素材や調整剥片がどの器種の製作過程において生じたものかを限定することは難しい。また、遺物の全体数も少ないことから、体系的に製作工程を復元することにも無理がある。そのため、ここでは器種を限定しない、加工痕の削りと、やや大型の素材の形状について観察所見をまとめ、今後の滑石製遺物研究の基礎的情報としたい。

削り痕について

遺物に残された加工痕は、剥離、折り取り、削り、研磨、穿孔である。この内金属工具によって施されたと思われる削りは、以前筆者が「削りa」としたものに相当するが［中村1996］、今回改めて3つに分類する（第48図）。

削り1　稜を持った平坦な面として削りの単位が確認できるもの。

削り2　剥離面や折れ面の打点付近に擦れたような削



第48図　野中遺跡出土滑石製遺物にみられる削りの痕跡

り痕が残るもの。刃痕が残るものもある。

削り３　削り痕が刃痕もしくは段差で止まっているもので、断面は階段状をしている場合が多い。

削り１は複数の単位から構成される場合が多く、成形を目的としたものと思われる。削り２は、その施されている部位や擦れたような状況から、鑿や鏨状の工具を使った間接打撃による剥離や折り取り時にできた痕跡である可能性が高い。削り３はその評価が難しいが、素材の縁辺からや、表裏面の上方から入っているものが多く、削り２のように間接打撃によって剥離もしくは折り取りを実施しようとした痕跡と思われる。その場合、４住**54**の背面、２住**10**、６住**29**にみられる削りは板状の節理に沿って剥離をしようとした痕跡、４住**57**、４住**62**にみられる削りは節理に直交する形で折り取ろうとした痕跡と捉えられる。おそらく工具が途中で止まったり、力が真っ直ぐ抜けず、剥片端部が階段状に折れてしまったものなのであろう。

素材の形態について

ここで素材として扱うのは、どの器種の素材ともなり得る大きさで、細かい調整加工が施されていないものである。素材も形状から二つに分類できる。

まず一つは、横長の板状剥片を素材にしたもので、遺構外③区出土の**1**とした剥片が該当する。この剥片は両側縁が折り取られているが、背面に大きな剥離面を残し、厚さも一定なことから、恐らくかなり大型の石核から同様な剥片が連続的に剥離されたものと考えられる。

二つ目は、拳大以下の自然石を分割あるいは折り取ったもので、第６号住居址**28**，**31**や第２号住居址**10**が該当する。片面や両面に自然面を残し、厚さも一定ではなく厚身がある。自然面を残す４住**56**や、厚みのある同住**54**，**55**などは、このような素材をさらに加工していったものであろう。

前者の素材の石核となる大型の滑石塊が、当遺跡に搬入されていたかどうかは分からないが、野中遺跡の滑石製品製作のための素材には、母岩の大小と、それに対応した異なる技術によって獲得された二者が認められる。

（註）今回の削り痕の観察にあたっては、阿部芳郎氏に有益な御教示をいただいた。

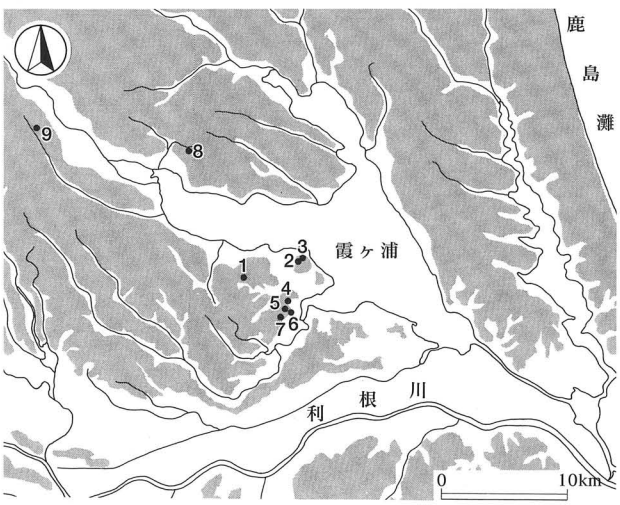
2．古墳時代甕形土器の型式学的検討

はじめに

野中遺跡の古墳時代集落址を解明していくためには、土器編年が基礎となる。

茨城県南部における古墳時代中～後期土師器の広域な編年については、近年、樫村宣行氏によって研究が進められ、住居跡一括資料の編年と大枠での土器の形態変化や器種の消長が捉えられて来ている［樫村1992、1995］。一方、県南部内の限られた地域や遺跡を対象にした編年にも多くの論稿がある［吹野1995、白田1996、大関1996等］。野中遺跡に近接したものとしては美浦村の陸平遺跡群での試みがあるが［中村1992、牛山1996］、現状では隣接した２遺跡の限られた資料を対象にしており、資料の制約から各器種の系統的な変化が充分に追える段階には至っていない。

土器の生産と消費の問題や、土器を介した地域間交流、土器の生活道具としての変遷、それに土器の保有状況からみた遺跡や遺構の性格等を検討していくためには、製作技術による系統的な分析を視点とした地域編年の確立が前提となる。本稿では、野中遺跡及び周辺遺跡出土の古墳時代中～後期前半の甕形土器を対象に型式学的検討を行い、野中遺跡を含む霞ヶ浦南岸地域における編年整備への緒端とする。



1.野中遺跡　2.陣屋敷遺跡　3.根本遺跡　4.池平遺跡　5.秋平遺跡
6.大日山古墳群　7.二の宮貝塚　8.真木ノ内遺跡　9.柴崎遺跡

第49図　分析対象遺跡位置図

分析対象

今回分類基準として用いる整形痕の表記は、観察者によってばらつきがあると考えられたため、分析対象は実見した資料に限っている。野中遺跡とその周辺の霞ヶ浦南岸に位置する６遺跡を主体に、良好な住居址一括資料が出土している土浦市の真木ノ内遺跡、つくば市の柴崎遺跡の資料を加えて検討した。具体的には美浦村野中遺跡第４，６，７号住居址、同村陣屋敷遺跡第１，14a号住居址［中村1992］、同村根本遺跡第25a号住居址，第３号墳［中村1996］、江戸崎町大日山古墳群第17号住居跡［鈴木美1991］、同町二の宮貝塚第１，４，７号住居跡［鈴木美1991］、同町秋平遺跡ＳⅠ—40，86［大賀1999］、同町池平遺跡ＳⅠ—12，22，23，29，35，42，45［大賀1999］、それに真木ノ内遺跡第１号住居跡［柴1987］、柴崎遺跡Ⅲ区第168，175号住居跡［土生1992］の土師器甕形土器である。なお、対象にした土器の整形痕の分類・表記は筆者の判断による。報告書の記載と異なる場合もあるが、その責は筆者にある。

分類

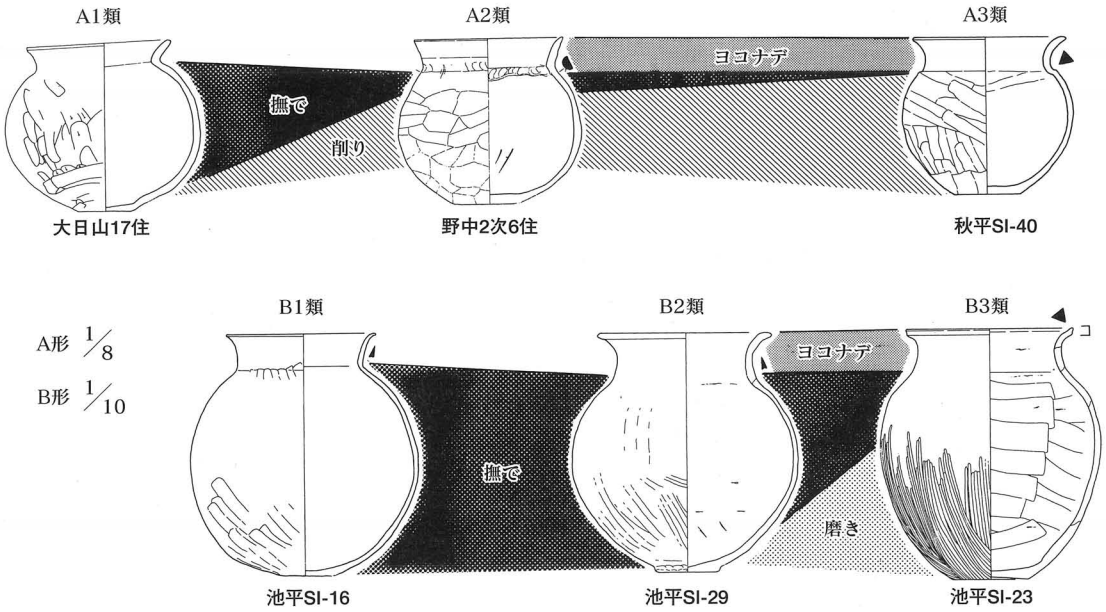
古墳時代土師器の甕形土器には多くのバラエティーがあり、その全てについて系統的な変化を追うのは、現状では困難である。ここでは当地域の古墳時代中～後期前半において主体となる甕Ａ形と甕Ｂ形を抽出し、器形や整形技法を視点に分類を行う。

甕Ａ形　球形の胴部を持ち、口縁部が短めで「く」の字状に開くもの、またそれを祖形にすると考えられるもの。

Ａ１類　胴部外面が斜め方向主体の撫でによって整形されているもの。口縁部内外面はヨコナデや箆撫で、磨きなどによって整形される。

Ａ２類　口縁部がヨコナデ、胴肩部が撫で、胴部が横もしくは斜め方向の箆削りによって整形されているもの。

Ａ３類　口縁部がヨコナデ、胴部が横もしくは斜め方向の箆削りで整形されているもの。口縁



第50図　甕形土器の分類と組列

と胴部の境に段状の稜を形成しているものが多い。

甕Ｂ形　球形もしくは楕円形の胴部を持ち、口縁部の口唇部付近が外反するもの。

Ｂ１類　胴部が斜め方向主体の撫でによって整形され、口縁の頸部からの立ち上がりが外側に開くもの。

Ｂ２類　口縁部がヨコナデ、胴部が斜め方向主体の撫でによって整形され、口縁の頸部からの立ち上がりがやや内傾するか、曲線的なもの。胴部下半の磨きや口唇部の面取り、摘み上げといった、Ｂ３類の特徴の一部が認められるものもある。

Ｂ３類　口縁部がヨコナデ、胴部上半が撫で、胴部下半が磨きによって整形され、口唇部外面に面取り、内面に摘み上げがみられるもの。

Ｂ３類は鈴木正博氏が型式学的特徴として「口縁部端の垂直面」の作出技法に着目し［鈴木正1976］、後に「下野型」の甕［松村1977］、「常陸形甕」［村田1980］、「常陸型甕」［黒澤彰1983］、「常総型甕」［樫村1992］と分類・呼称された土器（以下“いわゆる常陸型甕”と仮称する）の範疇に入るか、もしくはその系統上に位置付けられるものといえる。

野中遺跡出土資料の中では第７号住居址**4**がＡ１類に、第６号住居址**17～20**がＡ２類に、第４号住居址の**21**がＢ１類に該当する。また、第６号住居址の**14**は胴部の整形はわからないが、口縁部形態はＢ１類に相当する。

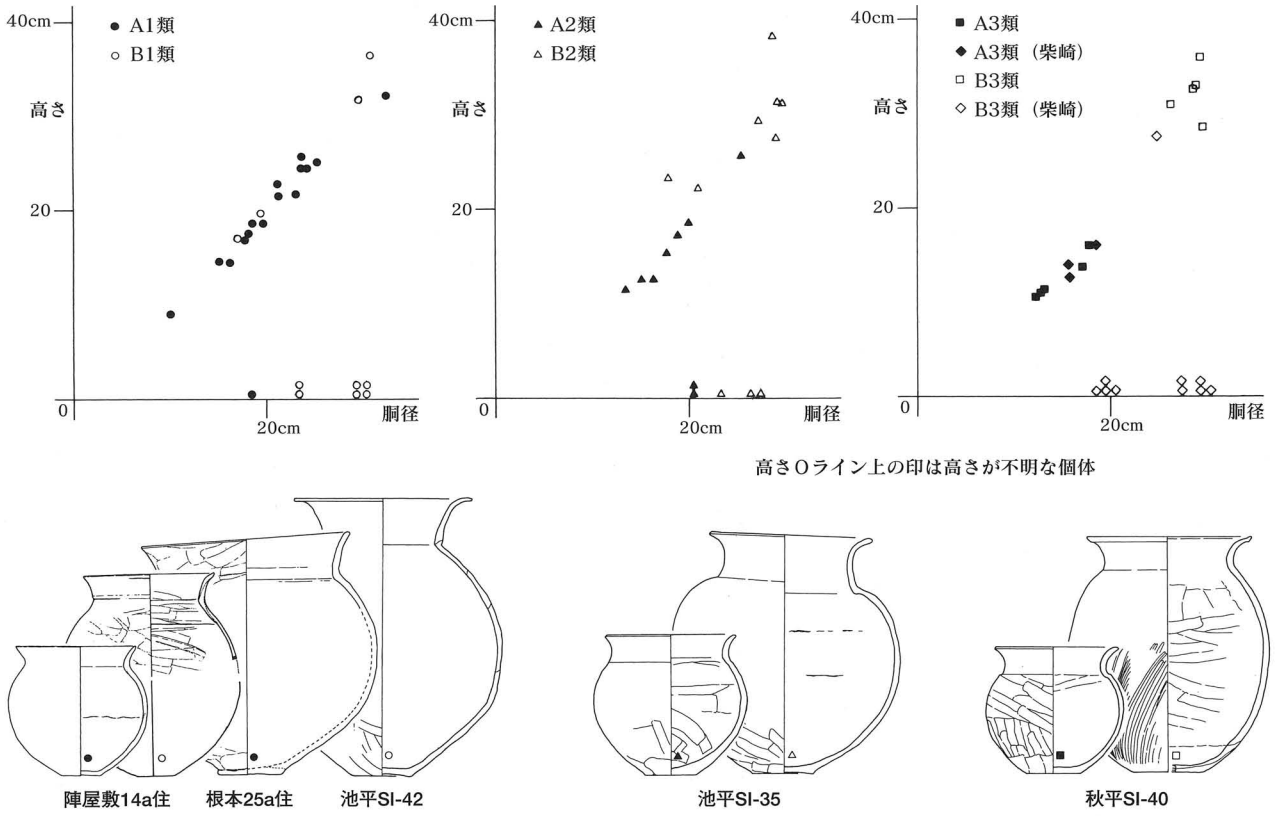
組列と検証

上記の甕Ａ形、甕Ｂ形は型式学的に異なる組列をなすものと思われる。甕Ａ形は胴部整形が撫でから削りへ変化していくとの視点からＡ１類→Ａ２類→Ａ３類という組列が、甕Ｂ形は胴部の撫で整形の継承、器形の類似性という視点からＢ１類→Ｂ２類→Ｂ３類という組列が想定される。

但し、Ｂ３類の口唇部形態については須恵器甕にその技術的祖形を求める意見もあり［黒澤彰1983］、胴部下半の磨きによる整形の出現についても、外的要因を考慮する必要があるかも知れない。また、今回対象としたＢ

	真木ノ内1住	大日山17住	陣屋敷14a住	池平SI22	池平SI42	野中2次6住	陣屋敷1住	二の宮4住	池平SI29	池平SI35	柴崎Ⅲ区175住	柴崎Ⅲ区168住	池平SI23	秋平SI40	秋平SI86
Ａ１類	❹	❺	❹	❶	❶										
Ｂ１類			①	②	②	①	①	③							
Ａ２類						▲4	▲2	▲2	▲1	▲2	▲1				
Ｂ２類								△4	△2	△3					
Ａ３類											■2	■1	■2	■1	■2
Ｂ３類											□1	□1	□2	□1	□1

第51図　類型の共伴関係（数字は該当する類型の個体数）



第52図　甕形土器各類型の法量（土器図版1／10）

3類は胎土に白色及び透明の粗い砂粒や雲母粒子が目立つものが多勢を占める。これは“いわゆる常陸型甕”の胎土の特徴と一致し、B1，B2類にも同様な胎土が多い。対して甕A形では野中遺跡でみられたように径1mm以下の細かい白色、透明砂粒を含む胎土がほとんどであり対照的である。胎土の違いは製作地域の違いを反映している可能性が強く、当霞ヶ浦南岸地域内のみで甕B形の型式学的変化が全て説明できるとは限らない。しかし、甕A形と比較した場合、胴部撫で整形の継承という点で組列化は可能と思われ、類型間の時間的連続性はおおよそ以下で検証される。

組列の検証にあたっては、良好な層位事例が無いため、住居址一括遺物を用いる。第51図は複数個体が出土した住居址をピックアップし、同じ類型が連続するように配列したものである。まず、甕A形と甕B形は各類型にわたって共伴しており、平行する異なる組列であることを保証する。次に、同形内の異なる類型同士は共伴することが少なく、共伴する甕A形と甕B形の類型の組み合わせも想定した順序を乱すものではない。これは各類型の時間的独立性と順序の妥当性を示唆する。

一方、二の宮貝塚4住と柴崎遺跡Ⅲ区175住における同形の異なる類型同士の共伴例は、前者がB1類とB2類の、後者がA2類とA3類の時間的連続性を示すものといえる。また、A1類とA2類の時間的間隙はB1類が両者に共伴することから、B2類とB3類の間隙はA2類が両者に共伴することから、あっても短かいものと想定できる。

また、組列の時間的方向性は、後述するようにA1類が中期に、B3類が後期に想定されることから、ほぼ間違いのないものと思われる。A1類を含む陣屋敷遺跡第14a号住居址の土器は、以前、東京都和泉遺跡の資料との対比から中期に位置づけた［中村1992］。今回分析の対象としたB3類は、甕A形と共伴したものに限っており、いずれも報告書で6世紀後半の年代が与えられている［土生1992、大賀1999］。また、“いわゆる常陸型甕”の初現についての最も古い年代観も6世紀後半であり［村山1985、樫村1992］、B3類が5世紀代とされる中期まで遡る要素はみあたらない。

法量

次に、各類型の法量を検討してみる。Ｂ１類がＡ１類とＡ２類両者と共存するように、甕Ａ形と甕Ｂ形の類型変化の歩調は必ずしも一致しないが、時間的推移の概略が追えるように、Ａ１類とＢ１類、Ａ２類とＢ２類、Ａ３類とＢ３類という組み合わせで高さと胴部最大径による法量グラフを作成した（第52図）。なお、報告書に計測値の記載が無いものについては、実測図から値を割り出している。

Ａ１類とＢ１類の段階では、甕Ａ形が量的に主体を占め、高さ・胴径が20cm前後～30cmまでのものを中心に大小様々な法量のものが存在する。Ｂ１類はやや大きいものに偏る傾向がある。

Ａ２類とＢ２類の段階になると、Ａ２類は高さ・胴径が20cm以下の小さいものに、Ｂ２類は高さ・胴径が20cm以上の大きいものに偏る傾向が認められ、量的にも甕Ｂ形の割合が増えてくる。

Ａ３類とＢ３類の段階では、Ａ３類は高さ・胴径が20cm以下の小型のものに、Ｂ３類は高さ・胴径が30cm前後～40cmまでの大型のものに限られるようになる。両者は法量的にも明確に分離し、形態と法量の対応関係が確立される。但し、この様相は霞ヶ浦南岸地域の資料においてであり、当地域から離れた柴崎遺跡Ⅲ区の資料には、大型とは法量が明確に異なる小型のＢ３類が一定量存在する。なお、系統が充分追えなかったため今回は対象としなかったが、当段階には口縁部ヨコナデ、胴部が縦方向の削りで整形された小型の甕形土器が確実に伴う。また、大型の土器はほぼＢ３類に限られる。

まとめ

霞ヶ浦南岸地域における古墳時代中期～後期前半の主要な土師器甕形土器として、甕Ａ形と甕Ｂ形を抽出し、その変遷を追った。当初甕形土器の主体を占めた甕Ａ形は、胴部の整形が撫でから削りに変化していき、後期には小型のものに限られるようになる。対して甕Ｂ形は胴部の撫で整形を継承していき、“いわゆる常陸型甕”にも比定される大型で規格的なＢ３類が後期に出現する。予測になるが、甕Ａ形は前期以来の甕形土器にその祖形が求められるのに対し、甕Ｂ形は口縁部形態から壺形土器の系統上に位置付けられる可能性がある（註）。

このような中～後期にかけてみられる、煮炊用具とされる甕形土器の系統別の盛衰や法量の規格化は、当然炉から竈への火処の変化と強い関連性を有していると思われる。ちなみに今回対象とした住居址の内、最も古い竈設置例はＡ１類を出土した根本遺跡第25a号住居址である。また、法量の規格化や形態と法量の対応関係の確立、それに甕Ａ形と甕Ｂ形に認められる胎土の違いという現象の背景には、霞ヶ浦南岸地域を越えた土器の生産供給体制の存在も見え隠れする。そういう点で、霞ヶ浦南岸地域から離れた花室川流域の柴崎遺跡で、大型とともに小型のＢ３類が組成に加わる状況は、当類型製作の中心地を考えていく上で示唆的である。

派生する課題は数多くあるが、取り敢えずは当地域の型式学的な土師器編年を整備していかなくてはならない。今後、甕形土器以外の器種を分析することによって、さらに細かい編年単位が設定できるものと思われる。土器の実年代を明らかにしたいという欲求もあるが、焦らずにまずは型式学的検討を進めていこう。

本稿で分析対象とした資料の実見にあたっては、江戸崎町教育委員会の平田満男氏、土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場の関口満氏、つくば市教育委員会の石橋充氏にご多忙中にも関わらず便宜をはかっていただいた。文末ながら明記して感謝の意に代えたい。

（註）陣屋敷遺跡の報告では、Ｂ１類に相当する土器を壺形土器とした［中村1992］。

引用・参考文献

牛山英昭　1996 「第Ⅳ章１．古墳時代陸平遺跡群における土師器編年と根本遺跡出土土器」『根本遺跡』茨城県美浦村・陸平調査会

江幡良夫　1994 『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』住宅・都市整備公団つくば開発局　財団法人茨城県教育財団

大賀健他　1999 『秋平遺跡・池平遺跡・中佐倉貝塚』江戸崎町佐倉地区遺跡発掘調査会

大川清他　1977 『虚空蔵貝塚』美浦村教育委員会

大関武　1996 「「鬼高式」への移行期の土器様相（上）―花室川下流域を中心に―」『研究ノート６号』財団法人茨城県教育財団

大竹房雄他　1986 『常陸笹山』稲敷郡美浦村教育委員会　笹山遺跡発掘調査会

大竹房雄他　1989 『庚申古墳』美浦村教育委員会　庚申古墳発掘調査会

奥冨雅之他　1996 『興津地区遺跡群』美浦村教育委員会

樫村宣行　1992 「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート２号』財団法人茨城県教育財団

樫村宣行　1995 「和泉式土器編年考―茨城県を中心として―」『研究ノート５号』財団法人茨城県教育財団

川崎純徳・金子進他　1972 『赤浜遺跡発掘調査報告書』常総台地研究会

川村　勝　1992 「第Ⅳ章３．陣屋敷遺跡出土の管状土錘と問題点（予察）」『陣屋敷遺跡』茨城県美浦村　陸平調査会

黒澤彰哉　1983 「常陸における奈良・平安時代の土器について」『シンポジウム資料　房総における奈良・平安時代の土器』史館同人　市立市川考古博物館

黒澤秀雄　1995 「第３章第６節　古墳時代」『（仮称）北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団

柴　正　1987 「第４章第６節　真木ノ内遺跡」『霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団

白石真理　1995 「Ⅳ－７　第97Ａ号住居跡」『武田Ⅷ』財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

杉原荘介・大塚初重編　1972 『土師式土器集成２中期』東京堂出版

鈴木正博　1976 「水戸市南台遺跡出土の土師器と須恵器」『常総台地７』常総台地研究会

鈴木素行編　1998 『武田石高遺跡　旧石器・縄文・弥生時代編』財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

鈴木美治　1991 『一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団

高橋嘉朗　1990 「美浦村の古墳と古墳群」『美浦村史研究６号』美浦村史編さん委員会

鶴見貞雄　1993 「粗製器台の用途を考える」『研究ノート３号』財団法人茨城県教育財団

土井義夫・塩野崎直子　1984 「Ⅲ.３.（２）遺物の出土状態」『宇津木台遺跡群Ⅳ』八王子市宇津木台地区遺跡調査会

中野修秀　1987 「Ⅳ．３．古墳時代前期」『向原遺跡』向原遺跡調査会　土浦市教育委員会

中村敬治・江幡良夫　1998 『茨城中央工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団

中村哲也　1992 「第Ⅱ章２．古墳時代の住居址群と土壙」「第Ⅲ章２．古墳時代の土器の観察と編年」『陣屋敷遺跡』茨城県美浦村陸平調査会

中村哲也　1996 「第Ⅲ章　根本遺跡の弥生時代集落」「第Ⅳ章３．方形周溝墓・古墳群と出土遺物」『根本遺跡』茨城県美浦村　陸平調査会

西村正衛　1984 「茨城県稲敷郡美浦村興津貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究』早稲田大学出版部

白田正子　1996 「古墳時代中期後葉における土器編年細分案―牛久地域を取り上げて―」『茨城県考古学協会誌第８号』茨城県考古学協会

土生朗治　1992 『研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）』住宅・都市整備公団つくば開発局　財団法人茨城県教育財団

吹野富美夫　1995 「八幡前遺跡における古墳時代後期の土器様相」『研究ノート４号』財団法人茨城県教育財団

松村恵司　1977 「第三章Ⅰ　出土土器の分類と編年」『山田水呑遺跡』日本道路公団　山田遺跡調査会

村田健二編　1980 『千天』

村山好文　1985 「印旛・手賀沼周辺における古墳時代後期の特異な甕形土器について」『日本考古学研究所集報Ⅶ』日本考古学研究所

山内清男　1979 『日本先史土器の縄紋』先史考古学会（示人社復刻版）

付　　表

弥生土器観察表

・出土位置欄の＋は接合関係を、(　)は同一層位での接合破片数を示す。
・整形・文様欄の(　)は施文工具、→は施文順序で、櫛描文の場合は工具の歯数を示す。縄文の附１は附加条１種である。
・胎土欄の白は不透明白色の、透は透明もしくは半透明白色の、灰は灰色の、雲は雲母の砂・鉱物粒が含まれていることを示し、粗は径１～２mmの粒子が目立つことを表す。

第１号住居址

図版番号		出土位置	整形・文様	胎土	色調(外／内)	焼成	備考
第７図	1	２溝Ⅳ区(2)	撚糸文Ｒ？櫛描文(６本)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡褐	良	同一個体
	2	攪乱	櫛描文(６本)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡褐	良	
	3	２層	櫛描文(4～５本)	白・透	淡橙褐／褐	良	
	4	攪乱	縄文直前段４条ＬＲ→縦位櫛描文(４本) →横位櫛描文(４本)	白・透	淡橙褐／暗褐	良	
	5	覆土	櫛描文(６本？)	白・透・灰	白褐／淡褐	良	
	6	覆土	格子目文(篦状工具)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡褐	良	外面無文部に赤色塗彩
	7	１層	縄文ＲＬ？→沈線文(篦状工具)	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	8	２層	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透	淡橙褐／淡褐	良	同一個体
	9	攪乱	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透	淡橙褐／褐	良	
	10	１層	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透	淡橙褐／褐	良	
	11	１層	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透	淡橙褐／褐	良	
	12	４層	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透	淡橙褐／淡褐	良	
	13	覆土	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透	淡橙褐／褐	良	
	14	覆土	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透	淡橙褐／褐	良	
	15	覆土	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	白褐／暗褐	良	
	16	１層	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	17	１層	刷毛目整形→縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	褐／橙褐	良	
	18	１層	縄文ＬＬＲ	白粗・透粗・灰	淡褐／淡褐	良	外面の一部に赤色塗彩
	19	１層	縄文直前段４条ＬＲ？	白・透・灰	橙褐／淡褐	良	
	20	１層	撚糸文Ｒ	白・透・灰	暗褐／褐	良	
	21	２層	撚糸文Ｒ	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	22	攪乱	撚糸文Ｒ	白粗・透粗・灰	淡橙褐／橙褐	良	
	23	１層	撚糸文Ｒ	白粗・透粗・灰	淡褐／淡褐	良	
	24	１層	撚糸文Ｒ(細)	白粗・透粗・灰	淡褐／暗褐	良	
	25	攪乱	撚糸文Ｒ(細)	白・透・灰	暗褐／褐	良	
	26	攪乱	撚糸文Ｒ(細)	白・透・灰	淡褐／暗褐	良	
	27	１層	縄文ＲＬ	白粗・透粗・灰・雲	淡褐／淡褐	良	
	28	２層	縄文ＲＬと附１ＲＬ＋２Ｌ	白・透・灰	白褐／淡橙褐	良	
	29	床直(2)	縄文ＬＬＲ	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	復元口径19.0cm

第５号住居址

図版番号		出土位置	整形・文様	胎土	色調(外／内)	焼成	備考
第９図	1ａ	床直(41)	縄文附１ＬＲ+2Ｒ単沈線文(篦状工具)	白粗・透粗・灰	淡橙褐･褐／褐	良	同一個体
	1ｂ	床直(3)	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白粗・透粗・灰	淡橙褐/淡橙褐	良	復元胴径40cm
	2	床直	無文荒い撫で	白・透・灰	淡褐／淡橙褐	良	

第３号土坑

図版番号		出土位置	整形・文様	胎土	色調(外／内)	焼成	備考
第11図	1ａ	底面直上＋覆土(2)	口縁部ヨコナデ 口唇部内外面から交互押捺　櫛描文(５本)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡褐	良	同一個体 復元口径16.6cm
	1ｂ	１～３ａ層	櫛描文(５本)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡褐	良	
	1ｃ	１～３ａ層	口縁部ヨコナデ 口唇部内外面から交互押捺	白粗・透粗・灰	淡褐／淡褐	良	
	1ｄ	覆土	口縁部ヨコナデ 口唇部内外面から交互押捺	白粗・透粗・灰	暗褐／褐	良	
	2	４ｂ層	撚糸文Ｌ(細) 平行沈線文(半截竹管状工具)	白・透	暗褐／褐	良	同一個体 ９は表面被熱橙色化
	3	表土	撚糸文Ｌ(細)	白・透	暗褐／褐	良	
	4	底面直上＋覆土(2)	撚糸文Ｌ(細)	白・透	白褐･暗褐／褐	良	
	5	４ａ層	撚糸文Ｌ(細)	白・透	暗褐／褐	良	
	6	底面直上	撚糸文Ｌ(細)	白・透	暗褐／褐	良	
	7	１～３ａ層	撚糸文Ｌ(細)	白・透	暗褐／褐	良	
	8	覆土	撚糸文Ｌ(細)	白・透	暗褐／褐	良	
	9	３ｂ層	撚糸文Ｌ(細)	白・透	淡橙褐/淡橙褐	良	
	10	４ａ層上面	撚糸文Ｌ(細)	白・透	淡褐／淡褐	良	
	11	３ｂ～４層	撚糸文Ｌ(細)	白・透	淡褐／淡褐	良	
	12	３ｂ～４層	撚糸文Ｌ(細)	白・透	淡褐／淡褐	良	
	13	覆土	口縁部ヨコナデ　複合口縁下押捺口唇部内外面から交互押捺　櫛描文(７本)	白・透	暗褐／褐	良	同一個体
	14	底面直上	口縁部ヨコナデ　複合口縁下押捺口唇部内外面から交互押捺　櫛描文(７本)	白・透	暗褐／褐	良	
	15	底面直上	櫛描文(７本)	白・透	暗褐／褐	良	

第３号土坑

図版番号		出土位置	整形・文様	胎土	色調(外／内)	焼成	備考
第11図	16	３ｂ～４層	櫛描文(６本)	白・透	淡褐／淡褐	良	同一個体
	17	１～３ａ層	櫛描文(６本)	白・透	淡褐／淡褐	良	
	18	３ｂ～４層	櫛描文(５本)	白粗・透粗	淡橙褐/淡橙褐	良	
	19	１層	櫛描文(４本以上)	白・透	暗褐／淡褐	良	
	20	１層	口縁部横位単沈線→縦位刻み(篦状工具) 櫛描文(４本)　格子目文(篦状工具)	白・透	褐／褐	良	
	21	１～３ａ層＋覆土	櫛描文(４本) 口唇部縄文	白・透	淡橙褐・灰褐 /淡橙褐・灰褐	良	
	22	底面直上	櫛描文(４本)　口唇部縄文	白粗・透粗・灰	褐／褐	良	同一個体
	23	３ｂ層	櫛描文(４本)　口唇部縄文	白粗・透粗・灰	暗褐／褐	良	
	24	覆土	櫛描文(５本)	白・透	淡橙褐／黒褐	良	
	25	４ｂ層上面	櫛描文(５本？)	白粗・透粗・灰・雲	淡褐／淡褐	良	
	26	１～３ａ層	櫛描文(９本)	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	27	３ｂ～４層	櫛描文(５本以上)	白粗・透粗	淡褐／淡褐	良	
	28	覆土	撚糸文Ｒ　櫛描文(６本)	白・透	暗褐／淡褐	良	
	29	覆土	櫛描文(５本？)	白・透・灰	赤褐／淡褐	良	同一個体
	30	覆土	櫛描文(５本？)	白・透・灰	赤褐／淡褐	良	
	31	覆土	櫛描文(５本以上)	白・透・灰	淡褐／暗褐	良	
	32	２層	縄文直前段４条ＬＲ　櫛描文(４本)	白・透・灰	褐／橙褐	良	
	33	覆土	櫛描文(３本以上)　口唇部縄文	白・透・灰	淡褐／褐	良	
	34	１～３ａ層	櫛描文(７本)	白・透	淡褐／淡橙褐	良	
	35	覆土	櫛描文(３本以上)	白・透	暗褐／橙褐	良	外面に煤付着
	36	覆土	撚糸文Ｒ(細)　櫛描文(3本以上)	白・透	淡褐／褐	良	
	37	２層	撚糸文Ｒ(細)　櫛描文(3本以上)	白・透・灰	褐／淡褐	良	
	38	覆土	撚糸文Ｒ(細)　櫛描文(５本)	白粗・透粗	暗褐／褐	良	
	39	覆土	櫛描文(５本)	白粗・透粗・灰	褐／淡褐	良	
	40	４ｂ層上面	櫛描文(４本)	白粗・透粗	暗褐／暗褐	良	
	41	覆土	櫛描文？	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	42	覆土	櫛描文(５本)→格子目文(篦状工具)	白粗・透粗・灰	淡褐／褐	良	
	43	覆土	単沈線文(篦状工具)	白・透・灰	暗褐／褐	良	同一個体
	44	覆土	単沈線文(篦状工具)	白・透・灰	暗褐／暗褐	良	
	45	底面直上	円形刺突文(径２mmの竹管状工具) 口唇部刻み	白・透・灰	暗褐／褐	良	同一個体
	46	１～３ａ層	口唇部刻み	白・透・灰	暗褐／褐	良	
	47	３ｂ層		白・透・灰	褐／淡橙褐	良	
	48	覆土	円形刺突文(径２mmの竹管状工具)	白・透・灰	暗褐／淡褐	良	
	49	覆土	円形刺突文(径２mmの竹管状工具)	白・透・灰	暗褐／淡褐	良	
	50	１～３ａ層	円形刺突文(径２mmの竹管状工具)	白・透・灰	黒褐／淡褐	良	
	51	覆土(2)	円形刺突文(径２mmの竹管状工具)	白・透・灰	暗褐／褐	良	
	52	底面直上	円形刺突文(径２mmの竹管状工具)	白・透・灰	褐／暗褐	良	
	53	覆土	口唇部刻み	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	54	覆土	口唇部縄文	白・透・灰	褐／淡褐	良	
	55	底面直上	平行沈線文→刻み(篦状工具)　口唇部縄文	白・透・灰	淡橙褐／褐	良	同一個体
	56	覆土	平行沈線文→刻み(篦状工具)　口唇部縄文	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	57	覆土	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	淡橙褐／淡褐	良	
	58	覆土	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透	褐／褐	良	
	59	覆土	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透	褐／淡褐	良	
	60	覆土	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白粗・透粗・灰	淡橙褐・黒褐 ／淡橙褐	良	
	61	表土	附加条縄文附加Ｒ２条密接	白・透	淡褐／橙褐	良	
	62	覆土	縄文直前段４条ＬＲ	白・透・灰	橙褐／橙褐	良	
	63	覆土	縄文直前段４条ＬＲ	白・透・灰	橙褐／橙褐	良	
	64	１～３ａ層	縄文直前段４条ＬＲ？	白・透・灰	橙褐／暗褐	良	
	65	覆土	縄文直前段４条ＬＲ	白粗・透粗・灰	暗褐／淡褐	良	
	66	３ｂ～４層	撚糸文Ｒ(細)	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	同一個体
	67	１層	撚糸文Ｒ(細)	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	68	覆土	撚糸文Ｒ(細)　口唇部縄文	白・透・灰	黒褐／褐	良	同一個体
	69	覆土	撚糸文Ｒ(細)　口唇部縄文	白・透・灰	暗褐／褐	良	
第12図	70	１～３ａ層	撚糸文Ｒ(細)	白・透・灰	黒褐／淡褐	良	
	71	１～３ａ層	撚糸文Ｒ(細)	白・透・灰	暗褐／淡褐	良	
	72	１～３ａ層	撚糸文Ｒ(細)	白・透・灰	黒褐／褐	良	
	73	１～３ａ層	撚糸文Ｒ(細)	白・透・灰	暗褐／淡褐	良	
	74	１～３ａ層	撚糸文Ｒ(細)	白・透・灰	淡褐／淡橙褐	良	
	75	１～３ａ層	撚糸文Ｒ(細)	白・透	褐／淡褐	良	
	76	覆土	撚糸文Ｒ(細)	白粗・透粗・灰	白褐／淡橙褐	良	
	77	１～３ａ層	撚糸文Ｒ(細)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡褐	良	
	78	覆土	撚糸文Ｒ(細)	白・透・灰	橙褐･黒褐／褐	良	
	79	覆土	刷毛目整形→撚糸文Ｒ(細)	白・透・灰	淡褐／褐	良	
	80	覆土	撚糸文Ｒ(細)	白粗・透粗・灰	淡褐／褐	良	
	81	１～３ａ層	撚糸文Ｒ(細)	白・透・灰	褐／橙褐	良	
	82	覆土	撚糸文Ｒ(細)	白・透・灰	橙褐／褐	良	
	83	覆土	撚糸文Ｒ	白粗・透粗	褐／淡褐	良	
	84	覆土	撚糸文Ｒ	白・透・灰	白褐／白褐	良	

第３号土坑

図版番号		出土位置	整形・文様	胎土	色調(外／内)	焼成	備考
第12図	85	１～３ａ層	撚糸文Ｒ	白粗・透粗	褐／暗褐	良	
	86	覆土	撚糸文Ｒ	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	87	覆土	撚糸文Ｌ(細)	白・透・灰	暗褐／淡橙褐	良	外面に煤付着
	88	表土	撚糸文Ｌ(細)？	白・透・灰	褐／暗褐	良	
	89	底面直上	撚糸文Ｌ(０段多条)？	白・透・灰	褐／淡褐	良	
	90	覆土	内外面撫で整形　口唇部上面押捺	白(微粒)	暗褐／淡褐	良	
	91	４ｂ層	底部木葉痕	白・透・灰	白褐／褐	良	底径6.5cm
	92	覆土	底部木葉痕	白・透	橙褐／暗褐	良	復元底径6.2cm

攪乱内土器集中地点

図版番号		出土位置	整形・文様	胎土	色調(外／内)	焼成	備考
第14図	1	(2)	撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	褐／淡橙褐	良	同一個体
	2	(3)	撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡橙褐	良	
	3	(5)	撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	褐／淡橙褐	良	
	4	(2)	撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	褐／淡橙褐	良	
	5	(2)	撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡橙褐	良	
	6		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡橙褐	良	
	7		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	淡橙褐/淡橙褐	良	
	8		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	褐／淡橙褐	良	
	9		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡橙褐	良	
	10		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰／淡橙褐	褐・暗褐	良	
	11		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	淡橙褐/淡橙褐	良	
	12		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	褐／淡橙褐	良	
	13		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	褐／淡橙褐	良	
	14		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	淡橙褐/淡橙褐	良	
	15		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡橙褐	良	
	16		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡橙褐	良	
	17		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡橙褐	良	
	18		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	褐／淡橙褐	良	
	19		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	褐／淡橙褐	良	
	20		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	褐／淡橙褐	良	
	21		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	褐／淡橙褐	良	
	22		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡橙褐	良	
	23		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡橙褐	良	
	24		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	褐／淡橙褐	良	
	25		撚糸文Ｌ(細)	白粗・透粗・灰	褐／淡橙褐	良	
	26		櫛歯文(７本以上)	白・透	褐／暗褐	良	
	27		縄文？	白・透	暗褐／淡褐	良	
	28	(2)	撚糸文Ｒ(細)	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	29		縄文ＲＬ	白粗・透粗・灰	淡褐／淡橙褐	良	
	30		縄文？	白粗・透粗・灰	白褐／白褐	良	

後世遺構内及び遺構外

図版番号		出土位置	整形・文様	胎土	色調(外／内)	焼成	備考
第15図	1	２溝Ⅳ区	縄文ＬＲ　太沈線文	白・透	淡褐／淡褐	良	
	2	２溝Ⅳ区	平行沈線文(半截竹管状工具)	白・透・灰	淡橙褐／淡褐	良	
	3	遺構外①区	撚糸文Ｒ(細) 平行沈線文(半截竹管状工具)	白・透・灰	淡橙褐 ／淡橙褐	良	
	4	３住	口縁部ヨコナデ 櫛歯文(５本)　口唇部縄文	白・透・灰	褐／暗褐	良	
	5	３住	縄文附１ＲＬ＋２Ｌ　櫛描文(４本)	白・透・灰	淡橙褐/淡橙褐	良	
	6	遺構外①区	縄文ＬＲ？　櫛描文(６本)	白・透・灰	褐／淡橙褐	良	
	7	１溝Ⅳ区	櫛描文(３本以上)	白・透・灰	褐／褐	良	
	8	遺構外①区	櫛描文(３本)	白・透・灰	暗褐／淡橙褐	良	
	9	２溝Ⅳ区	櫛描文(５本以上)	白・透・灰	淡橙褐/淡橙褐	良	
	10	２溝Ⅱ区	縄文？　櫛描文(５本？)	白・透・灰	淡褐／褐	良	
	11	１溝Ⅳ区	櫛描文(５本)	白・透・灰	橙褐／橙褐	良	
	12	遺構外①区	撚糸文Ｒ(細)(口唇部も)　櫛描文(６本)	白・透・灰	褐／淡褐	良	
	13	１溝Ⅶ区	櫛描文(５本)	白・透	褐／暗褐	良	同一個体
	14	３住	櫛描文(５本)	白・透	褐／淡褐	良	
	15	遺構外①区	櫛描文(４本)	白・透	淡褐／淡褐	良	
	16	３住	スリット内平行沈線文(半截竹管状工具) 櫛描文(８本)	白・透・灰	淡褐／褐	良	
	17	遺構外①区	櫛描文(５本)	白・透・灰	暗褐／暗褐	良	
	18	２溝Ⅳ区	櫛描文(５本)	白・透・灰	橙褐／褐	良	
	19	遺構外①区	櫛描文(６本)	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	20	３住	櫛描文(４本以上)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡褐	良	
	21	遺構外①区 (4)	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ　櫛描文(５本) 口唇部縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	暗橙褐／褐	良	
	22	３住	櫛描文(７本)	白粗・透粗・灰	白褐／白褐	良	
	23	１溝Ⅴ区	櫛描文(５本以上)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡褐	良	
	24	３住	櫛描文(４本以上)	白・透・灰	橙褐／暗褐	良	

後世遺構内及び遺構外

図版番号		出土位置	整形・文様	胎土	色調(外／内)	焼成	備考
第15図	25	3住	櫛描文(5本)	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	26	2溝Ⅳ区	刷毛目整形　櫛描文(3本以上)	白・透・灰	淡橙褐/淡橙褐	良	
	27	2溝Ⅳ区	櫛描文(5本)	白・透・灰	褐／暗褐	良	
	28	2溝Ⅳ区	櫛描文(4本)	白・透・灰	黒褐／淡褐	良	
	29	3住	櫛描文(9本？)	白粗・透粗・灰	淡褐／黒褐	良	
	30	3住	櫛描文(8本)	白・透・灰	淡褐／褐	良	
	31	3住	櫛描文(6本以上)	白・透・灰	暗褐／淡褐	良	
	32	2溝	縄文ＬＬＲ　櫛描文(4本)	白粗・透粗	淡褐／淡褐	良	
	33	3住	櫛描文(6本)	白・透・灰	淡橙褐／褐	良	
	34	3住	櫛描文(8本)	白粗・透粗・灰	淡橙褐／橙褐	良	同一個体
	35	3住	櫛描文(8本)	白粗・透粗・灰	淡橙褐／橙褐	良	
	36	3住	櫛描文(5本以上)	白・透	暗褐／淡褐	良	
	37	遺構外①区	櫛描文(4本)	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	38	遺構外②区	櫛描文(7本)	白・透・灰	褐／褐	良	
	39	3住	櫛描文(4本)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡橙褐	良	
	40	2溝Ⅱ区	櫛描文(4本)	白・透	淡褐／褐	良	
	41	3住	櫛描文(5本)	白・透・灰	褐／淡褐	良	
	42	3住	櫛描文(4本以上)	白・透・灰	褐／淡褐	良	
	43	3住	櫛描文(4本以上)	白・透・灰	褐／淡褐	良	
	44	3住	櫛描文(5本)	白粗・透粗・灰	暗褐／暗褐	良	
	45	3住	櫛描文(6本)	白・透・灰	褐／褐	良	
	46	2住	格子目文(篦状工具)	白粗・透粗・灰	淡橙褐／淡褐	良	
	47	3住	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ　格子目文(篦状工具)	白・透・灰	淡橙褐／褐	良	
	48	2溝Ⅳ区	格子目文(篦状工具)	白・透・灰	淡橙褐/淡橙褐	良	
	49	3住	格子目文(篦状工具)	白粗・透粗	暗褐／淡橙褐	良	
	50	3住	矢羽状文(篦状工具)	白・透・灰	白褐／白褐	良	
	51	2溝Ⅳ区	単沈線文(篦状工具)	白粗・透粗	褐／暗褐	良	
	52	2溝Ⅳ区	単沈線文(篦状工具)	白粗・透粗	淡褐／淡褐	良	
	53	3住	櫛歯文(4本)→刷毛目整形	白・透・灰	橙褐／暗褐	良	
	54	遺構外②区	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ　口唇部縄文	白粗・透粗・灰	淡褐／暗褐	良	
	55	1溝Ⅵ区	口縁部ヨコナデ　縄文附１ＬＲ＋２Ｒ 口唇部縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透	橙褐／橙褐	良	
	56	遺構外①区	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透	褐・暗褐 ／橙褐・褐	良	
	57	遺構外①区	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	橙褐／淡褐	良	
	58	1溝Ⅵ区	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	黒褐／橙褐	良	
	59	1溝Ⅷ区	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	橙褐／橙褐	良	
	60	1溝Ⅷ区	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	橙褐／橙褐	良	
	61	3住	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透	褐／淡褐	良	同一個体
	62	3住	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透	褐／淡褐	良	
	63	3住	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	褐／黒褐	良	
	64	3住	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	淡褐／褐	良	
	65	3住	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	橙褐／淡褐	良	
	66	3住	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	褐／黒褐	良	
	67	3住	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	褐／黒褐	良	
	68	3住	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	橙褐／褐	良	
	69	3住	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	暗褐／褐	良	
	70	2溝Ⅳ区	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	淡橙褐／褐	良	
	71	2溝Ⅳ区	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	褐／淡褐	良	
	72	2溝Ⅳ区	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	淡褐／暗褐	良	
	73	4住	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白粗・透粗・灰	橙褐／橙褐	良	
	74	3住	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透	淡橙褐/淡橙褐	良	
	75	2溝Ⅱ区	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	橙褐／黒褐	良	
	76	遺構外①区	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	橙褐／淡褐	良	
	77	3住	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ　口唇部縄文	白・透・灰	橙褐／淡橙褐	良	
	78	2溝Ⅳ区	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ(交差)	白粗・透粗・灰	黒褐／橙褐	良	
	79	3住	縄文附１ＬＲ＋２Ｒ	白・透・灰	淡褐／黒褐	良	
	80	2住	縄文直前段４条ＬＲ	白・透・灰	褐／暗褐	良	
	81	3住	縄文直前段４条ＬＲ	白粗・透粗・灰	淡橙褐/淡橙褐	良	
	82	3住	縄文直前段４条ＬＲ	白粗・透粗・灰	淡橙褐／橙褐	良	
第16図	83	3住	縄文直前段４条ＬＲ	白・透・灰	橙褐／褐	良	
	84	3住	縄文直前段４条ＬＲ	白・透・灰	橙褐／褐	良	
	85	3住	縄文直前段４条ＬＲ	白粗・透粗・灰	暗褐／褐	良	
	86	3住	縄文直前段４条ＬＲ	白・透・灰	橙褐／暗褐	良	
	87	1溝Ⅷ区	縄文直前段４条ＬＲ	白・透・灰	淡橙褐／淡褐	良	
	88	2溝Ⅱ区	縄文ＬＬＲ	白粗・透粗・灰	橙褐／橙褐	良	
	89	3住	縄文ＬＬＲ	白粗・透粗・灰	淡橙褐／褐	良	
	90	2溝Ⅳ区	縄文ＬＬＲ	白粗・透粗・灰	白褐／淡褐	良	外面一部に赤色塗彩
	91	遺構外①区	縄文ＬＬＲ	白粗・透粗・灰	褐／褐	良	
	92	3住	撚糸文Ｒ(細)　口唇部撚糸文Ｒ(細)	白・透・灰	褐／褐	良	
	93	3住	撚糸文Ｒ(細)	白粗・透粗・灰	淡褐／黒褐	良	
	94	3住	撚糸文Ｒ(細)	白粗・透粗・灰	淡褐／橙褐	良	
	95	3住	撚糸文Ｒ(細)	白粗・透粗・灰	淡橙褐/淡橙褐	良	

後世遺構内及び遺構外

図版番号		出土位置	整形・文様	胎土	色調(外／内)	焼成	備考
第16図	96	3住	撚糸文R(細)	白・透・灰	褐／褐	良	
	97	3住	撚糸文R(細)	白・透・灰	橙褐／橙褐	良	
	98	3住	撚糸文R(細)	白・透・灰	褐／淡褐	良	
	99	2溝Ⅳ区	撚糸文R(細)	白粗・透粗・灰	褐／淡橙褐	良	
	100	2溝Ⅳ区	撚糸文R(細)	白・透・灰	淡橙褐/淡橙褐	良	
	101	2溝Ⅳ区	撚糸文R(細)	白粗・透粗	淡褐／白褐	良	外面一部に赤色塗彩
	102	2溝Ⅳ区	撚糸文R(細)	白・透	橙褐／橙褐	良	
	103	2溝Ⅳ区	撚糸文R(細)	白・透・灰	褐／暗褐	良	
	104	遺構外②区(2)	撚糸文R(細)	白粗・透粗	淡褐／淡褐	良	
	105	遺構外②区	撚糸文R(細)	白粗・透粗	淡褐／暗褐	良	
	106	2溝Ⅳ区	撚糸文R(細)(交差)	白粗・透粗	淡褐／淡褐	良	
	107	遺構外②区	撚糸文R(細)(交差)	白粗・透粗	褐／褐	良	
	108	1溝Ⅷ区	撚糸文R	白・透・灰	淡褐／淡橙褐	良	
	109	3住	縄文RRL	白粗・透粗	橙褐／褐	良	同一個体
	110	3住	縄文RRL	白粗・透粗	橙褐／淡橙褐	良	
	111	2溝Ⅳ区(2)	縄文RRL？	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	同一個体
	112	2溝Ⅳ区(2)	縄文RRL？	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	113	2溝Ⅳ区	縄文RRL？	白・透・灰	淡褐・黒褐／淡褐	良	
	114	2溝Ⅳ区	縄文RRL？	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	115	2溝Ⅳ区	縄文RRL？	白・透・灰	褐／褐	良	
	116	2溝Ⅳ区	撚糸文L	白・透・灰	橙褐／暗褐	良	
	117	2溝Ⅳ区	撚糸文L	白・透・灰	淡褐／暗褐	良	
	118	2住	撚糸文L(細)	白粗・透粗・灰	黒褐／褐	良	
	119	2溝Ⅳ区	撚糸文L(細)	白・透	褐／褐	良	復元底径10.0cm
	120	遺構外①区	縄文附1LR＋2L	白・透	暗褐／橙褐·褐	良	
	121	遺構外①区	縄文附1LR＋2L？	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	122	2溝Ⅳ区	縄文L？	白・透	暗褐／褐	良	
	123	3住	縄文附1LR＋2Rと撚糸文R(細)	白粗・透粗・灰	淡褐／淡橙褐	良	
	124	遺構外①区	縄文直前段4条LR(2条深)？	白粗・透粗・灰	白褐／	良	内面剥落
	125	3住	縄文直前段4条LR(2条深)？	白粗・透粗	淡褐／暗褐	良	
	126	遺構外①区	縄文直前段4条LR(2条深)？	白粗・透粗	暗褐／	良	内面剥落
	127	3住	縄文LR	白粗・透粗・灰	淡橙褐／淡褐	良	同一個体
	128	3住	縄文LR	白粗・透粗・灰	淡橙褐/淡橙褐	良	
	129	3住	縄文LR	白粗・透粗・灰	淡橙褐／淡褐	良	
	130	2溝Ⅳ区	縄文LR	白粗・透粗	褐／淡褐	良	
	131	2溝Ⅳ区	縄文RL　口唇部縄文RL	白・透・灰	暗褐／橙褐	良	
	132	遺構外①区	縄文RL	白粗・透粗・灰	淡褐／淡褐	良	
	133	遺構外①区	縄文0段多条？RL	白粗・透粗・灰	灰褐／褐	良	
	134	2溝Ⅳ区(2)	縄文結束1種LR・RL	白・透・灰	褐／淡褐	良	
	135	1溝Ⅰ区	撚糸文r	白粗・透粗・灰	淡褐／橙褐	良	
	136	遺構外②区	複合口縁下端上下から交互刺突 口唇部縄文	白・透・灰	橙褐／黒褐	良	
	137	遺構外①区		白・透	暗褐／暗褐	良	
	138	遺構外②区	口唇部縄文？	白・透	橙褐／暗褐	良	
	139	2溝Ⅳ区	口唇部縄文	白・透	淡橙褐/淡橙褐	良	
	140	1溝Ⅴ区	外面刷毛目整形	白粗・透粗・灰	褐／淡橙褐	良	
	141	2溝Ⅳ区	底部太単沈線	白粗・透粗	白褐／褐	良	

遺構別弥生土器出土点数　＊は弥生時代遺構。(　)は同一個体を1点とした場合。図示したもの以外も含む。

1住	2住	3住	4住	5住	3土	撹乱	1溝						2溝			3溝	4溝	遺構外		計
＊				＊	＊	集中	Ⅰ区	Ⅳ区	Ⅴ区	Ⅵ区	Ⅶ区	Ⅷ区	Ⅱ区	Ⅳ区	撹乱			①区	②区	
30	4	128	1	45	146	45	2	3	4	7	2	8	15	118	2	2	3	54	19	638
(28)	(4)	(125)	(1)	(2)	(109)	(11)	(2)	(3)	(4)	(7)	(2)	(8)	(15)	(108)	(2)	(2)	(3)	(51)	(18)	(501)

弥生土器縄文原体集計表　後世遺構外は後世遺構内及び遺構外。＊の附加条は1種、撚は撚糸文、結1は結束第1種。(　)は同一個1点とした場合。図示したもの以外も含む。口唇部施文の縄文は除外。

	1住	5住	3土	撹乱集中	後世遺構外	計		1住	5住	3土	撹乱集中	後世遺構外	計
附1LR＋2R	10 (4)	44 (1)	6 (6)	0	85 (81)	146 (92)	撚糸文L	0	0	0	0	3 (3)	3 (3)
直前段4条LR	2 (2)	0	5 (5)	0	31 (31)	38 (38)	撚糸文L(細)	0	0	16 (6)	34 (1)	4 (4)	54 (11)
LLR	3 (2)	0	0	0	18 (18)	21 (20)	撚糸文L(0段多条)	0	0	1 (1)	0	0	1 (1)
LR	0	0	0	0	7 (5)	7 (5)	撚糸文r	0	0	0	0	1 (1)	1 (1)
撚糸文R	4 (4)	0	8 (8)	0	27 (26)	39 (38)	附1LR＋2L	0	0	0	0	2 (2)	2 (2)
撚糸文R(細)	3 (3)	0	32 (26)	2 (1)	49 (48)	86 (78)	附加条2条密接	0	0	1 (1)	0	1 (1)	2 (2)
RRL	0	0	0	0	7 (2)	7 (2)	結1LR・RL	0	0	0	0	1 (1)	1 (1)
RL	2 (1)	0	0	1 (1)	3 (3)	6 (6)	＊LR+2Rと撚R	0	0	0	0	1 (1)	1 (1)
RL(0段多条)	0	0	0	0	1 (1)	1 (1)	＊RL+2LとLR	1 (1)	0	0	0	0	1 (1)
無節L	0	0	0	0	1 (1)	1 (1)	原体不明	0	0	7 (7)	2 (2)	72 (72)	81 (81)

土師器・須恵器観察表

・出土位置欄の＋は接合関係を、・は不接合関係を示し、(　)は同一層位での接合破片数を、〈　〉は不接合破片数を表すが、数字のないものは１点である。法量欄の単位はcmで、(　)は復元推定値。整形欄の→は整形順序を示す。胎土欄の表記は弥生土器観察表に同じ。残存率の(　)は図示した部位でのもの。

第１号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第43図１	１層(2)	土師器 甕	口径 (12.0)	内外面－口縁部　ヨコナデ 脚部　篦撫で	白 透	内外面－褐	良	(20％)	
第43図２	一括＋攪乱	土師器 底部	底径　6.5	外面－篦撫で 内面－撫で	白 透	外面－橙褐 内面－淡橙褐 ・褐	良	(50％)	
第43図３	攪乱(2)	土師器 底部	底径　5.1	外面－篦撫で 内面－撫で	白 透	外面－褐 内面－暗褐	良	(50％)	

第２号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第18図１	竈支脚＋２層(2)＋３住２層・３層＋３住２層	土師器 高杯	口径 (20.0) 高さ (17.4) 裾径　14.5	外面－口縁・裾部　ヨコナデ 杯・脚部　篦撫で 内面－口縁・裾部　ヨコナデ 杯・脚部　篦撫で	白 透 灰	外面－淡橙褐 ・赤褐 内面－淡橙褐 ・橙褐	良	70％	脚部は竈の支脚として遺存 外面と杯・裾部内面に赤色塗彩
第18図２	２層(14)＋床直＋覆土＋攪乱	土師器 杯	口径　15.5 高さ　7.0	外面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦削り→篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦撫で	白 透 灰	内外面－赤褐	良	75％	
第18図３	床直＋６層上面＋覆土・６層上面＋覆土	土師器 杯	口径 (18.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦削り→撫で 内面－丁寧な撫で	白 透 灰	内外面－橙褐	良	(30％)	
第18図４	床直＋６層上面(2)・６層上面(3)＋２層	土師器 杯	口径 (14.5)	内外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で	白 透 灰	外面－淡褐・暗褐 内面－淡橙褐	良	(70％)	胴部外面の一部に煤付着
第18図５	６層上面(6)	土師器 底部	底径　6.0	外面－篦削り→撫で 内面－篦撫で	白 透	外面－褐 内面－暗褐	良	(60％)	
第18図６	竈支脚直上＋６層上面＋３層(3)	土師器 甕	胴径 (24.0)	外面－指頭押捺→篦撫で 内面－篦撫で	白 透	外面－橙褐・褐 内面－橙褐	良	(20％)	胴下部外面一部に黒褐色の付着物
第18図７	Ｐ４(20)＋３層(2)＋２層(9)＋覆土＋攪乱(2)	土師器 甑	口径　27.0 高さ　20.1 孔径　6.8	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦削り→篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白 透	外面－淡橙褐 内面－橙褐	良	90％	底部付近胴部に黒班

第３号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第20図１	Ｐ１底直(14)＋床直(3)＋一括(8)	土師器 甕	口径　11.8 高さ　22.3 底径　5.6	外面－口縁部ヨコナデ、胴部 篦撫で、底部篦削り 内面－口縁部ヨコナデ、胴部 篦撫で、頸部下輪積痕	白 透	外面－橙褐・褐 内面－暗褐・橙褐	良	100％	
第20図２	Ｐ１底直(3)＋２層(2)	土師器 甕	口径　17.5	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白 透 灰	内外面－橙褐 ・淡橙褐	良	(50％)	
第20図３	２層	土師器 甕	口径 (18.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で	白 透粗 雲粗	外面－褐 内面－橙褐	良	(20％)	
第20図４	６層上面	土師器 甕	口径 (13.2)	内外面－口縁部　ヨコナデ 胴部篦撫で	白 透 灰	外面－橙褐・ 内面－暗褐	良	(15％)	
第20図５	２層(5)	土師器 椀？	口径 (22.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦削り→篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ→胴部 篦撫で	白 透 灰	外面－褐・暗褐 内面－褐	良	(30％)	

第４号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第24図１	竈支脚＋床直＋竈７層＋２層	土師器高杯	口径 17.8 高さ 13.4 裾径 12.8	外面－口縁・裾部　ヨコナデ 杯・脚部　篦削り→篦撫で 内面－口縁・裾部　ヨコナデ 杯・脚部　撫で	白 透	内外面－橙褐	良	95％	杯部は竈支脚として遺存、被熱のため内面剥落顕著
第24図２	床直＋２層＋１層	土師器高杯		内外面－磨き	白 透 灰	内外面－橙	良	(30％)	
第24図３	２層	土師器高杯		内面－撫で	白	内外面－淡褐	良	(50％)	
第24図４	１層(2)	土師器高杯		外面－刷毛目？	白 透	内外面－橙褐	良	(60％)	
第24図５	２層	土師器高杯		内外面－撫で	白 透	内外面－淡橙褐	良	(100％)	
第24図６	２層	土師器高杯		内面－篦撫で	白 透	内外面－橙褐	良	(100％)	
第24図７	床直+2層·床直(10)·床直(３)·2層(2)·1層(2)・床直〈2〉・2層〈2〉	土師器椀	口径 (16.0) 高さ (8.7)	外面－口縁　部　ヨコナデ 胴部撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白 透	外面－橙褐・暗褐 内面－暗褐 橙褐	良	60％	
第24図８	床直(11)・床直＋12層・床直＋12層・床直(2)・床直〈５〉	土師器椀	口径 (15.0) 高さ 8.1	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白 透 灰	外面－暗褐・褐 内面－褐・橙褐	良	25％	
第24図９	床直(10)＋２層(2)・床直	土師器杯	口径 (15.3) 高さ 6.1	外面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦撫で	白 透	内外面－褐	良	60％	
第24図10	床直＋２層(6)＋１層・２層〈3〉	土師器杯	口径 15.6 高さ 5.2	外面－口縁部　ヨコナデ→胴部磨き、底部　篦削り 内面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦撫で→磨き	白 透 灰	内外面－橙褐	良	80％	
第24図11	床直(3)＋２層(2)＋１層	土師器杯	口径 (13.0) 高さ 6.4	外面－口縁部　磨き 胴～底部　篦削り→篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ→磨き 胴～底部　篦撫で	白 透	外面－赤褐・黒褐 内面－赤褐・褐	良	35％	口縁部内外面赤色塗彩
第24図12	床直(9)＋２層(2)・床直・２層	土師器杯	口径 (14.2) 高さ 5.7	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦削り→撫で 内面－口縁部　磨き 胴～底部　篦撫で	白 透 灰	内外面－赤褐	良	25％	口縁部内外面赤色塗彩
第24図13	竈８層(3)＋２層(3)・竈８層(3)・２層(2)	土師器杯	口径 20.0 高さ (6.8)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　磨き	白 透	内外面－赤褐	良	(50％)	全面赤色塗彩
第24図14	２層(2)・１層(3)	土師器杯	口径 (17.7)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　磨き	白 透	内外面－くすんだ橙褐	良	(25％)	全面赤色塗彩
第24図15	２層(2)	土師器杯	口径 (13.8) 高さ 5.4		白 透 灰	外面－褐 内面－暗褐	良	35％	
第24図16	床直(5)＋２層(3)	土師器杯	口径 15.6 高さ 4.7	内外面－口縁部　ヨコナデ	白 透	内外面－橙褐	良	80％	
第24図17	２層	土師器杯	口径 (17.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で	白 透	外面－赤褐・褐 内面－褐	良	15％	
第24図18	竈７層＋２層(3)・２層(2)	土師器杯	口径 (17.0) 高さ 5.5	外面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　磨き	白 透 灰	内外面－橙褐	良	40％	

第４号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第24図19	１層(2)・１層〈2〉	土師器杯	口径 (15.0)	内外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　丁寧な撫で	白 灰 雲	内外面－赤褐	良	25％	
第24図20	２層＋１層・１層	土師器壷	口径 (21.0)	内外面－ヨコナデ	白 透	外面－淡橙褐 内面－淡褐	良	(20％)	
第24図21	床直(2)＋２層 床直(9)＋２層(3)・床直(3)・床直(2)・床直〈5〉	土師器甕	口径 (13.0) 高さ (17.0) 頸径 (10.3) 胴径 (17.1) 底径　(6.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白 透	外面－橙褐 内面－暗褐	良	20％	
第24図22	２層(4)	土師器甕	口径　13.0	外面－頸部　指頭押捺→口縁部ヨコナデ、胴部　撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部篦撫で	白 透	内外面－褐	良	(40％)	
第24図23	１層	土師器甕	口径 (20.6)	外面－口縁部　ヨコナデ→胴部篦撫で 内面－丁寧な撫で	白 透 灰	外面－黒褐・淡橙 内面－淡褐	良	(13％)	
第24図24	２層(3)	土師器甕	口径 (25.0)	外面－口縁部　ヨコナデ→丁寧な撫で 内面－ヨコナデ	白 透	外面－褐 内面－淡褐	良	(15％)	
第24図25	竈７層(4)＋２層(4)・２層	土師器甕	底径　5.0	外面－頸部　撫で 内面－頸部　撫で　胴部　篦撫で	白 透	外面－淡橙褐 内面－橙褐	良	(40％)	
第24図26	１層(2)	土師器甕	口径 (13.7)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で 内面－口縁部　ヨコナデ	白 透	内外面－橙褐	良	(12％)	外面は被熱による剥落顕著
第24図27	２層＋１層	土師器甕	口径 (22.0)	内外面－口縁部　ヨコナデ　撫で	白微 雲	内外面－橙褐	良	(8％)	
第25図28	竈７層＋２層(2)・２層	土師器甑	口径 (26.0) 高さ (18.0) 孔径 (10.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白 透	内外面－淡橙褐～橙褐	良	(20％)	
第25図29	２層(4)＋１層・２層〈7〉・１層〈4〉・５住覆土	土師器甑	口径 (22.9) 高さ (17.0) 孔径　(6.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 頸部　指頭押捺 胴部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白 透	内外面－淡褐・暗褐	良	(40％)	
第25図30	２層(3)・２層(2)・２層	土師器甑？	口径 (34.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　指頭押捺篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で	白 透 灰	外面－橙褐・赤褐 内面－淡橙褐	良	(20％)	
第25図31	床直(13)・床直	土師器甑？	口径 (28.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白 透 灰	外面－橙褐 内面－淡橙褐	良	(15％)	
第25図32	床直・２層・１層	土師器甑？	口径 (18.0)	外面－口縁部 ヨコナデ 指頭押捺 胴部　篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白 透	内外面－橙褐	良	(20％)	
第25図33	床直(3)＋２層(4)・２層〈3〉・１層	土師器甑？	口径　17.8	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白 透 灰	内外面－橙褐	良	(35％)	口縁部外面の一部に煤付着
第25図34	床直(5)	土師器甑	孔径　(9.2)	外面－胴部　篦削り→撫で 内面－胴部　篦撫で	白 透 灰	外面－淡橙褐 内面－橙褐	良	(20％)	
第25図35	２層(6)	土師器底部	底径　6.0	外面－篦削り→撫で 内面－篦撫で	白 透	外面－暗褐 内面－淡橙褐・暗褐	良	(40％)	
第25図36	２層(11)	土師器底部	底径　6.0	外面－篦削り→撫で 内面－篦撫で	白 透	外面－淡橙褐・褐 内面－淡褐	良	(80％)	

第４号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第25図37	床直(2)＋２層	土師器 底部	底径　6.5	外面－篦削り→撫で 内面－撫で	白 灰 雲	外面－橙褐・ 暗褐 内面－橙褐・ 褐	良	(70％)	
第25図38	１層	土師器 底部	底径　(9.0)	外面－篦削り→篦撫で 内面－篦撫で	白 透	外面－赤褐・ 暗褐 内面－橙褐	良	(30％)	
第25図39	２層(2)	土師器 底部	底径　6.5	内外面－篦撫で	白 透	外面－褐 内面－白褐	良	(50％)	
第25図40	床直(8)＋２層	土師器 底部	底径　6.3	外面－篦削り→篦撫で 内面－篦撫で	白 透	外面－暗褐 内面－褐	良	(60％)	
第25図41	竈７層	土師器 底部	底径　6.2	外面－篦削り→篦撫で 内面－篦撫で	白 透 灰	外面－橙褐・ 橙 内面－褐	良	(50％)	
第25図42	１層	土師器 底部	底径　(7.2)	外面－篦削り→篦撫で 内面－篦撫で	白 透	外面－暗褐 内面－橙褐	良	(30％)	
第25図43	２層	土師器 底部	底径　5.0	外面－篦撫で篦削り 内面－篦撫で	白 透	外面－淡褐 内面－淡橙褐	良	(100％)	
第25図44	２層(2)	土師器 底部	底径　(6.5)	外面－篦削り撫で 内面－篦撫で	白 透 灰	内外面－橙褐	良	(60％)	
第25図45	２層	須恵器 甕			白微	外面－暗灰褐 内面－灰褐	良		
第25図46	１層	須恵器 甕			白粗	内外面－灰	良		
第25図47	２層	須恵器 甕		外面－平行叩き 内面－当て具痕	白微	内外面－灰	良		

第６号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第28図１	２層(3)＋１層	土師器 高杯	口径 (15.9)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　磨き	白 透	内外面－淡褐	良	(20％)	
第28図２	Ｐ１内①層	土師器 杯	口径　14.2 高さ　5.0	外面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦撫で	白 透	外面－淡橙褐 ・暗褐 内面－淡橙褐	良	80％	口縁部外面の一部に煤付着
第28図３	Ｐ１内①層	土師器 杯	口径　15.3 高さ　5.7	外面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦削り→篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦撫で	白 透	外面－淡褐・ 赤褐・ 暗褐 内面－赤褐	良	100％	
第28図４	床直	土師器 杯	口径　15.6 高さ　5.3	外面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦削り→篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ　暗文	白 透	内外面－橙褐	良	80％	内面被熱による剥落顕著外面底部付近に黒班
第28図５	床直	土師器 杯	口径　14.8 高さ　5.1	外面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦撫で	白 透 灰	外面－淡橙褐 内面－淡橙褐 ・褐・ 暗褐	良	70％	
第28図６	２ｃ層上面(5) ＋Ｐ１内①層 (2)	土師器 杯	口径　14.7 高さ　6.2	外面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ	白 透	内外面－橙褐	良	90％	内面に褐色の付着物内面被熱のため剥落顕著、外面底部付近に黒班
第28図７	床直	土師器 杯	口径　15.9 高さ　5.6	外面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦削り→篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦撫で	白 透	外面－黒褐・ 褐 内面－橙褐・ 暗褐	良	80％	

第６号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第28図８	２層(2)＋１層(2)	土師器杯	口径 15.0 高さ 6.0	外面－口縁部　ヨコナデ 底部　篦削り→篦撫で	白 透 灰	外面－淡橙褐 内面－淡褐	良	20％	
第28図９	床直～Ｐ１内①層(3)	土師器杯	口径 14.7 高さ 6.1	外面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦削り→撫で 内面－胴～底部　篦撫で →口縁部　ヨコナデ	白 透	外面－黒褐・褐・橙褐 内面－淡橙褐・褐	良	95％	
第28図10	床直(6)	土師器杯	口径 (15.0) 高さ 4.8	外面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ	白 透	内外面－橙褐	良	65％	内面に褐色の付着物、内面被熱のため剥落顕著、外面底部付近に黒班
第28図11	１ｃ層	土師器杯	口径 (16.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ	白 透	内外面－赤褐	良	(15％)	内外面赤色塗彩
第28図12	２層＋１層	土師器杯	口径 (15.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で 内面－口縁部　ヨコナデ	白 透	内外面－橙褐	良	(20％)	
第28図13	２ｂ層上面	土師器椀	口径 13.0 高さ 7.9	外面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦撫で	白 透	外面－橙褐・褐 内面－暗褐・淡褐	良	100％	
第28図14	Ｐ１内①層	土師器甕	口径 18.0	外面－口縁部　ヨコナデ→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ	白 透粗 灰	内外面－淡褐	良	(50％)	
第28図15	２層(4)	土師器甕	口径 (15.5)	外面－口縁部　ヨコナデ、頸部指頭押捺、胴部　撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白 透	内外面－橙褐	良	(25％)	
第28図16	床直(6)	土師器底部	底径 (6.0)	外面－篦削り 内面－撫で	白 透	外面－褐 内面－褐	良	(50％)	
第28図17	床直～Ｐ１内①層(23)＋２層・２層(2)	土師器甕	口径 19.6 頸径 16.0 胴径 20.7	外面－口縁部　ヨコナデ 肩部　撫で 胴部　篦削り 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　輪積痕→篦撫で	白 透	外面－淡褐・淡橙褐・褐 内面－淡褐・褐	良	(75％)	
第28図18	床直～Ｐ１内①層(28)＋２層(5)	土師器甕	口径 15.4 高さ 17.4 頸径 13.6 胴径 18.9 底径 6.9	外面－口縁部　ヨコナデ、頸部指頭押捺、肩部　撫で 胴～底部　篦削り 内面－口縁部　ヨコナデ 頸部　指頭押捺 胴～底部　篦撫で	白 透	外面－淡橙褐・暗褐 内面－橙褐	良	90％	
第28図19	Ｐ１内①層(41)	土師器甕	口径 15.7 高さ 15.4 頸径 13.2 胴径 17.7 底径 6.1	外面－口縁部　ヨコナデ、頸部指頭押捺、肩部　撫で 胴～底部　篦削り 内面－口縁部　ヨコナデ 胴～底部　篦撫で	白 透	外面－赤褐・褐 内面－橙褐・褐	良	90％	
第28図20	床直～Ｐ１内①層(12)＋１層	土師器甕	口径 14.6 頸径 12.3 胴径 20.8	外面－口縁部　ヨコナデ、頸部指頭押捺、肩部　撫で 胴部　篦削り 内面－口縁部　ヨコナデ、頸部指頭押捺、胴部　篦撫で	白 透	外面－淡橙褐 内面－淡橙褐	良	(60％)	
第28図21	床直(3)＋２層(4)・Ｐ１内①層(2)・２層(6)・２層(3)	土師器甕	胴径 (22.0)	外面－指頭押捺　撫で　篦削り	白 透粗 灰	外面－暗褐 内面－淡褐・褐	良	(30％)	胴部最大径付近の外面に帯状に煤付着
第28図22	１層(2)＋１ｃ層	須恵器甕		外面－平行叩き 内面－同心円文当て具痕	白	外面－黒灰 内面－暗灰	良		第図23と同一個体
第28図23	１ｃ層	須恵器甕		外面－平行叩き 内面－同心円文当て具痕	白	外面－黒灰 内面－暗灰	良		肩部外面自然釉 頸部内面釉雫
第28図24	１層	須恵器甕		外面－平行叩き	白	外面－灰 内面－暗灰	良		

第７号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第31図１	覆土(2)	土師器 高杯	裾径 (13.0)	外面－裾部　ヨコナデ 脚部　篦削り　撫で 内面－裾部　ヨコナデ 脚部　輪積痕　撫で	白 透 灰	内外面－淡褐	良	(40％)	
第31図２	覆土	土師器 鉢	口径 (13.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白 透 灰	内外面－淡褐	良	(12％)	
第31図３	床直(2)＋覆土・覆土	土師器 甕	口径 (20.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白 透	外面－白褐 内面－淡褐	良	(30％)	
第31図４	床直(10)	土師器 甕	口径　13.6 頸径　12.0 胴径　18.0	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦削り？→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白 透	外面－橙褐・黒褐 内面－暗褐	良	(75％)	被熱による剥落顕著
第31図５	床直(3)＋確認面	土師器 底部	底径　7.2	外面－篦削り→磨き 内面－篦撫で	白 透	外面－橙褐・褐 内面－橙褐・褐・暗褐	良	(50％)	

第１号溝状遺構

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第35図１	Ⅷ区１層	土師器 高杯	口径 (17.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 杯部　撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 杯部　撫で	白 透	外面－橙褐 内面－淡橙褐	良	(15％)	
第35図２	Ⅷ区１ａ層上面＋Ⅷ区１層＋Ⅷ区確認面	土師器 杯	口径 (12.2) 高さ　3.4 底径　6.9	轆轤右回転成形 底部　回転篦切り	白 透 灰	内外面－淡褐	良	50％	
第35図３	Ⅳ区２層	土師器 杯	口径 (14.0)	轆轤成形	白 透	外面－暗橙褐 内面－暗橙褐	良	(10％)	
第35図４	Ⅶ区１層	土師器 底部	底径　9.5	外面－撫で	白 透	外面－褐 内面－橙褐	良	(70％)	内面剥落顕著
第35図５	Ⅷ区１層	須恵器 杯	口径 (12.0)	轆轤成形	白 透粗	内外面－灰	良	(10％)	

第３号溝状遺構

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第39図１	覆土	土師器 高杯		外面－磨き 内面－撫で	白 透	内外面－淡褐	良	(100％)	

遺構別土師器・須恵器出土点数　(　)は同一個体破片群を１点とした場合。土師器には時期不明素焼き無文破片を含む。

	１住	２住	３住	４住	５住	６住	７住	１溝	２溝	３溝	４溝	２土坑	遺構外	計
土師器	54 (48)	167 (81)	162 (124)	1408 (1123)	16 (16)	356 (188)	73 (54)	352 (346)	64 (62)	57 (56)	5 (5)	1 (1)	119 (114)	2834 (2215)
須恵器				3 (3)	6 (2)			5 (5)			1 (1)	1 (1)		16 (12)

土師器器種別口縁部・底部点数

	口縁部					底　部				
	高杯	鉢椀杯	壷	甕	甑	高杯	鉢椀杯	壷・甕	甑	その他
１住		1		1				2		
２住	1	6		2		1	1	1	1	
３住		8		7		1		1		
４住	8	82	1	36	7	14	17	16	3	2
５住		2		1						
６住	1	20		10		1	11	6		
７住	1	6		3		1		1		
１溝	1	25		3		1	2	7		
２溝		2		2						
３溝		3		2	1	1		1		
遺構外		7		6				1		
計	12	162	1	73	8	20	31	34	4	2

・同一個体は１点として集計。
・同一個体で口縁部と底部が残っているものはそれぞれ１点として加算。
・高杯の底部は脚部。
・底部のその他はミニチュア土器。
・壷・甕・甑については次ように分類した。屈曲した口縁上端が複合口縁－壷、屈曲した口縁全てが複合口縁及び屈曲しない素口縁－甑、屈曲した素口縁－甕。

土製品観察表

・法量欄の土錘と紡錘車の高さは穿孔方向の計測値で、幅は穿孔方向と直交する方向の最大値。支脚の高さは図示の縦方向。
　長さ、高さ、幅、孔径、厚さの単位はcm。重さの単位はｇ。(　)は残存部での値。
・胎土欄の表記は土器に同じ。

図版番号	出土位置	種類	高さ ＊長さ	幅	孔径 ＊厚さ	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第18図８	２住床直	円柱状土錘	2.5	2.9	0.6	22.9	撫で	淡橙褐	白・透	良	100％	
第20図６	３住床直	球状土錘	3.5	3.5	0.7	35.9	撫で	淡褐	白・透	良	100％	
第20図７	３住2b層	球状土錘	3.4	3.7	0.7	40.8	撫で、棒状圧痕	淡褐	白・透	良	100％	
第20図８	３住攪乱	球状土錘	3.7	3.6	0.7	42.9	撫で	淡褐	白・透	良	100％	
第20図９	３住周溝底直	球状土錘	(3.0)	3.5	0.7	29.6	孔部に刺突痕	暗褐	白・透	不良	100％	
第25図48	４住２層	球状土錘	3.4	3.1	0.6	28.1	撫で	淡橙褐	白・透	良	100％	開孔部摩滅
第25図49	４住２層	球状土錘	3.0	3.1	0.6	(24.6)	撫で	淡褐	白・透	良	80％	開孔部摩滅
第29図25	６住床直	球状土錘	2.9	3.3	0.7	30.4	撫で、開孔部削りによる面取り	淡褐	白・透	良	100％	
第29図26	６住２層	土器片研磨具	＊4.4	4.1	＊0.8	17.3	４断面が摩滅 擦痕もあり	淡褐	白・透	良	100％	
第31図６	７住炉直上	支脚	13.5	15.9	＊14.6	1,445.0	撫で・茎状圧痕	橙褐・褐	白・透	不良	100％	
第31図７	７住床直	支脚	13.5	(14.3)	＊(13.2)	(1,296.0)	撫で・茎状圧痕	橙褐・褐	白・透	不良	80％	
第31図８	７住床直	支脚	13.4	(15.5)	＊(14.0)	(1,175.0)	撫で・茎状圧痕	橙褐・褐	白・透	不良	80％	
第12図93	３土５層直上	紡錘車	1.5	5.1	0.6	48.3	櫛歯文（６本）	淡褐・褐	白・透	良	100％	開口部若干摩滅
第12図94	３土4b層上面		＊3.9	1.8	＊0.7	3.6	繊維状圧痕擦痕 指頭押捺	淡橙褐	白・透	良	100％	
第35図６	１溝Ⅱ区２層	球状土錘	3.1	3.3	0.6	29.9	撫で	淡褐	白・透	良	100％	
第35図７	１溝Ⅱ区１層	球状土錘	3.3	3.7	0.7	(29.2)	撫で 孔部に刺突痕	淡褐	白・透	良	60％	
第35図８	１溝Ⅱ区１層	球状土錘	(1.8)	(1.3)		(3.7)	撫で	褐	白・透	良	12％	

鉄器観察表

・法量の(　)は残存部での値。

図版番号	出土位置	器種	法量	備考
第25図50	４住床直	短茎長三角形鏃	鏃身長4.1cm、鏃身幅3.2cm、鏃身厚0.2cm、重さ7.1g	茎部欠損
第25図51	４住床直	刀子	長さ(8.5cm)、重さ8.5g、刃部長(5.4cm)、刃部幅1.3cm、刃部厚0.35cm、柄部幅1.05cm、柄部厚0.25cm	刃部先端欠損 柄部に紐状のものを巻いた木質部

石器観察表

・剥片の長さは剥片剥離軸方向での、第21図11の石核の長さは打面と直交する方向での計測値。
・法量欄の長さ、幅、厚さの単位はcm。重さの単位はｇ。(　)は残存部の値。

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材・石質	備考
第18図９	２住６層	敲石	7.7	6.9	4.7	329.0	砂岩	裏・２側面に敲打痕、２側面磨滅
第21図10	３住２層	敲石	12.8	6.0	1.4	166.0	頁岩	表裏面摩滅・擦痕、全側面敲打痕
第21図11	３住攪乱	石核	3.8	6.3	2.8	60.8	玉随（石灰質物質付着）	
第21図12	３住２層	剥片	3.6	3.4	1.2	11.1	玉随（石灰質物質付着）	
第21図13	３住２層	剥片	2.7	3.7	1.3	10.0	玉随	
第21図14	３住２層	剥片	4.6	2.1	1.1	6.8	玉随	
第21図15	３住攪乱	剥片	2.8	3.7	1.1	6.3	玉随	
第21図16	３住２層	剥片	2.7	3.3	1.9	10.8	玉随（石灰質物質付着）	
第21図17	３住２層	剥片	1.6	1.7	0.4	1.2	玉随	一側縁折れ面
第21図18	３住２層	剥片	2.2	2.6	0.5	1.5	玉随	一側縁折れ面
第21図19	３住２層	剥片	2.1	2.1	0.5	2.0	玉随	二側縁折れ面
未図化	３住１層	砕片	1.7	2.2	0.9	2.3	玉随	
未図化	３住１層	砕片	2.2	1.3	0.8	1.8	玉随	
未図化	３住２層	砕片	1.7	1.0	0.4	0.7	玉随	
未図化	３住２層	砕片	1.6	0.9	0.2	0.3	玉随	

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材・石質	備考
第21図20	3住1層	剥片	2.9	2.6	1.2	5.3	赤色のチャート	
未図化	3住2層	砕片	2.1	1.7	0.8	2.9	灰色のチャート	
未図化	3住2層	砕片	1.8	1.7	0.6	1.6	灰色のチャート	
第21図22	3住2層	剥片	2.4	3.2	0.5	3.5	ペグマタイト(石英質部)	
第21図23	3住攪乱	剥片	2.5	3.1	0.95	4.4	ペグマタイト(石英質部)	
未図化	3住2層	砕片	2.6	1.6	0.7	2.7	ペグマタイト(石英質部)	
未図化	3住攪乱	砕片	2.5	2.2	0.6	2.8	ペグマタイト(石英質部)	
未図化	3住2層	砕片	2.2	1.4	0.7	3.7	ペグマタイト(石英質部)	
未図化	3住2層	砕片	2.0	2.0	0.6	2.4	ペグマタイト(石英質部)	
未図化	3住2層	砕片	2.6	1.4	0.8	2.7	ペグマタイト(石英質部)	
未図化	3住2層	砕片	2.5	1.2	0.6	1.2	ペグマタイト(石英質部)	
未図化	3住2層	砕片	2.3	1.2	1.2	2.8	ペグマタイト(石英質部)	
未図化	3住1層	砕片	2.3	1.3	0.7	1.5	ペグマタイト(石英質部)	
未図化	3住攪乱	砕片	1.2	0.7	0.3	0.3	ペグマタイト(石英質部)	
未図化	3住2層	砕片	1.4	0.8	0.3	0.3	ペグマタイト(石英質部)	
未図化	3住2層	砕片	1.4	1.1	0.4	0.6	ペグマタイト(石英質部)	
未図化	3住1層	砕片	1.8	0.7	0.6	0.7	ペグマタイト(石英質部)	
未図化	3住2層	砕片	2.4	1.6	0.6	1.5	ペグマタイト(長石質部)	
第26図52	4住2層	板状製品	15.3	6.0	0.8	97.0	点紋粘板岩ホルンフェルス	周縁を両面から剥離もしくは敲打
第26図53	4住2層	板状製品	12.0	5.4	0.7	71.0	点紋粘板岩ホルンフェルス	周縁を両面から剥離もしくは敲打 同材同質の破片が他に5点出土
第29図27	6住2 e層	砥石	(8.3)	(5.5)	5.7	(244.0)	凝灰質砂岩	欠損、砥面一面、裏・側面敲打痕
第12図95	3土4 a層＋	敲石	11.5	7.7	8.0	894.0	砂岩	被熱、8片に破砕
	4 a層上面							複数個所に敲打痕
第12図96	3土一括	石核？	5.2	4.5	3.6	93.0	ペグマタイト(石英質部)	
第35図13	1溝Ⅰ区1層	砥石	(4.6)	3.0	2.9	(44.3)	凝灰質砂岩	欠損、被熱赤化、 全面砥面、径0.6cmの孔有り
第37図1	2溝覆土	板状製品	9.7	6.2	2.6	195.0	点紋粘板岩ホルンフェルス	周縁敲打で調整
未図化	2溝Ⅳ区覆土	砕片	2.3	1.7	0.8	2.3	チャート	
未図化	4溝覆土	砕片	2.0	1.6	0.8	2.6	チャート	
第44図2	遺構外①区	剥片	4.0	4.0	1.2	14.7	安山岩	

滑石製遺物観察表

・双孔円盤の長さは図示の縦方向、主要剥離面が残っている遺物の長さは剥片剥離軸方向の計測値。長さ、幅、厚さの単位はcm。重さの単位はｇ。
・表面は図示左側、裏面は図示右側に展開した面。

図版番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	表面	裏面	側面	備考
第43図4	1住1層	1.4	1.9	0.3	1.1	剥離	剥離		
第18図10	2住2層	4.1	6.0	2.2	51.3	剥離	自然、削り、刃痕	剥離	
第18図11	2住攪乱	2.6	1.1	0.6	1.5	剥離、削り	剥離	剥離、折れ	
第18図12	2住覆土	2.8	1.3	0.3	1.0	節理、剥離	節理	折れ	
第26図21	3住攪乱	3.6	2.4	0.7	6.0	剥離	剥離	折れ	
第26図54	4住2層	3.3	3.9	1.1	13.0	剥離、削り、刃痕	剥離	削り、折れ？	
第26図55	4住2層	3.2	4.0	1.1	13.9	削り	剥離	自然、節理、剥離	
第26図56	4住床直	2.8	4.1	0.6	7.6	自然、剥離、削り	剥離	削り	
第26図57	4住2層	2.7	1.8	0.9	3.8	剥離、削り	自然、剥離	削り、折れ	
第26図58	4住2層	3.1	1.9	1.0	4.9	剥離	剥離	折れ	
第26図59	4住2層	2.4	1.2	1.0	2.0	削り	剥離、削り	折れ	
第26図60	4住3層	2.6	1.4	0.5	1.6	剥離	節理	折れ	
第26図61	4住2層	1.5	1.7	0.8	2.3	剥離	剥離、削り	折れ	
第26図62	4住2層	1.5	2.1	0.5	1.9	剥離、削り、刃痕	剥離	折れ	
第26図63	4住2層	1.6	1.3	0.5	0.9	剥離、刃痕	剥離	自然、折れ	
第26図64	4住2層	1.5	1.2	0.6	0.6	剥離、削り、刃痕	節理？	折れ、刃痕	
未図化	4住2層	1.7	1.0	0.4	0.7				
未図化	4住2層	1.5	0.6	0.3	0.3				
第29図28	6住2層	7.3	3.0	1.3	25.0	自然	自然、剥離	自然、折れ	
第29図29	6住1層	3.3	2.1	0.8	5.7	節理、剥離、削り	剥離、削り	折れ	
第29図30	6住1層	1.6	1.9	0.5	2.6	剥離	剥離、削り	剥離、折れ、削り	
第29図31	6住2 a層	2.7	4.3	1.0	10.5	自然	自然	折れ	
未図化	6住2層	1.7	1.7	0.2	6.0				
未図化	6住1層	1.7	1.0	0.2	0.3				
第35図9	1溝Ⅳ区一括	3.0	3.1	0.4	6.5	研磨	研磨	研磨	双孔円盤
第35図10	1溝Ⅳ区1層	2.7	2.5	0.4	5.4	研磨	研磨	研磨	双孔円盤
第35図11	1溝Ⅳ区1層	(3.0)	(2.4)	0.4	(4.3)	研磨	研磨		双孔円盤欠損品
第35図12	1溝Ⅷ区2層	4.2	3.4	0.6	15.6	剥離	剥離	節理、剥離、削り、折れ	双孔円盤未製品
第44図1	遺構外③区	4.6	5.5	0.6	14.5	剥離、削り	剥離、削り	自然、折れ	

報告書抄録

フリガナ	ノナカイセキ
書名	野中遺跡
副書名	第２次調査報告書
シリーズ名	美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	8
編著者名	中村哲也
編集機関	茨城県稲敷郡美浦村教育委員会
発行機関	茨城県稲敷郡美浦村教育委員会
発行機関所在地	〒300-0424　茨城県稲敷郡美浦村受領1460-1　TEL 0298-85-7631
発行年月日	西暦2000年３月31日

所収遺跡名（フリガナ）	所在地（フリガナ）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
野中遺跡（ノナカイセキ）	茨城県稲敷郡（イバラキケンイナシキグン） 美浦村請領字野中（ミホムラウケリョウアザノナカ） 1552-1外	084425		36度 01分 11秒	140度 18分 20秒	19980403 ～ 19980608	約4,000㎡	開発（店舗）に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野中遺跡	集落	縄文時代		縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土錘、土製紡錘車、支脚、土器片研磨具、鉄鏃、刀子、敲石、砥石、板状石製品、石核、剥片、砕片、滑石製遺物（含双孔円盤）	古墳時代住居址で炉址を取り囲むように土製支脚３点が出土 古墳時代住居址出土炭化材の同定
		弥生時代	竪穴住居址２軒 土坑１基		
		古墳時代以降	竪穴住居址５軒 溝状遺構４条 土坑１基		
		時期不明	土坑１基 ピット群１ヶ所		

美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書 8

茨城県稲敷郡美浦村　**野 中 遺 跡**　—第 2 次発掘調査報告—

発行年月日　平成12（西暦2000）年 3 月31日

編集・発行　美浦村教育委員会
茨城県稲敷郡美浦村受領1460-1
〒300-0424　TEL 0298-85-7631

Ibaraki, Nonaka Site

Miho Village Board of Education 2000